

富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)

任海遺跡

吉倉A遺跡

吉倉B遺跡

1993年3月

富山県埋蔵文化財センター

**富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)**

**任海遺跡**

**吉倉A遺跡**

**吉倉B遺跡**

**1993年3月**

**富山県埋蔵文化財センター**

## 序

富山県総合運動公園建設に先立ち実施してきました埋蔵文化財発掘調査は、今年で4年目の調査となりました。

本書は、建設予定地内の遺跡群のうち平成4年度に調査を行った富山市任海遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。

これらの遺跡からは古代と中世の二つの時代を中心に多くの遺構や遺物が発見されました。中でも吉倉B遺跡で発見された竪穴住居跡群は県内でも数少ない古代集落の調査例として注目されました。遺物では、墨書き土器や鉄製品が数多くみつかっています。また、吉倉A遺跡の中世の掘立柱建物は大・中・小規模の建物が整然と並んで発見され、多くの鉄製品・鉄滓がみつかり、この地で鍛冶が行われていたことがわかります。

今回発見されたこれらの遺構や遺物が、これまで具体的に解明されていなかった北陸地方の古代・中世の集落構造の研究に役立てば幸いです。

終わりに、調査に際しご協力をいただきました地元の方々をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

富山県埋蔵文化財センター

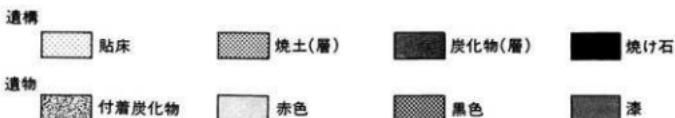
所長 桃野真晃

# 例　　言

- 1 本書は、平成4年度に富山県総合運動公園建設に先立ち実施した富山県富山市任海遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、富山県土木部総合運動公園建設室の依頼を受けて、富山県教育委員会富山県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査期間・面積は、次のとおりである。

任海遺跡：平成4年7月27日～9月1日（延 9日）	600m <sup>2</sup>
吉倉A遺跡：平成4年6月1日～11月11日（延 92日）	3,400m <sup>2</sup>
吉倉B遺跡：平成4年5月27日～12月16日（延 115日）	6,282m <sup>2</sup> (内430m <sup>2</sup> については上層のみ調査)
- 4 調査及び遺物整理並びに報告書担当者は、以下のとおりである。

任海遺跡・吉倉A遺跡：富山県埋蔵文化財センター　主任 橋本正春・文化財保護主事 越前慶祐
吉倉B遺跡：同主任 酒井重洋・久々忠義・文化財保護主事 境洋子
- 5 資料の整理・本書の編集・執筆は、所員の協力を得て各調査担当者が行ない個々の文責は文末に記した。
- 6 遺構は、種別ごとに一連の番号をつけ、本書では、以下の記号を用いた。SB：掘立柱建物、SI：竪穴住居跡、SD：溝、SK：土坑、SE：井戸、P：穴・柱穴、SX：不明遺構である。
- 7 遺物の実測図の縮尺は、土器・陶磁器：1/4、金属器：1/3、石器：1/4を基本として、異なるものは図中に縮尺を示した。
- また、遺物番号は遺跡ごとに通し番号を付し、写真図版に付した番号は、これと一致する。
- 8 遺構・遺物実測図中の各スクリーントーンが示すものは下のとおりである。



- 9 本書で使用した方位は真北で、標高は海拔である。
- 10 出土した金属器の一部については、富山県工業技術センター山崎太郎氏の協力によりX線写真撮影を行なった。
- 11 出土品及び記録資料などは、富山県埋蔵文化財センターが保管している。
- 12 発掘調査及び資料整理並びに本書の作成にあたって、下記の各氏から様々な援助をいただいた。記して、深甚なる謝意を表したい。(以下敬称略、順不同)  
　　調査指導・協力他  
　　藤田富士夫・古川知明・麻柄一志・安念幹倫・斎藤隆・島田修一・岡本淳一郎・伊佐知法・高梨清志・河西健二・押川恵子・山崎太郎・宇野隆夫・吉岡康暢・宮田進一・藤田邦雄・吉井亮一  
　　資料整理他  
　　吉田都・菅野静子・砺波千恵子・森真由美・内山美代子・黒崎静子・角谷弘子

## 目 次

I 位置と環境 .....	1
II 調査に至る経過 .....	2
III 任海遺跡 .....	4
1 調査の概要 .....	4
(1) 調査の経過 .....	4
(2) 立地 .....	4
(3) 地質と層序 .....	4
2 調査結果 .....	4
(1) 遺構 .....	4
(2) 遺物 .....	5
3まとめ .....	5
IV 吉倉A遺跡 .....	7
1 調査の概要 .....	7
(1) 調査の経過 .....	7
(2) 立地 .....	7
(3) 地質と層序 .....	7
2 遺構 .....	9
(1) 壺穴住居跡 .....	9
(2) 掘立柱建物 .....	10
(3) 土坑 .....	14
A 古代 .....	14
B 中世 .....	15
(4) 溝 .....	17
(5) 集石 .....	17
3 遺物 .....	18
(1) 古代の遺物 .....	18
(2) 中世の遺物 .....	19
4まとめ .....	20
掘立柱建物について .....	20
V 吉倉B遺跡 .....	39
1 地形と層序 .....	39

## 図 版 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 .....	1
第2図 富山県総合運動公園内遺跡群 .....	3
○任海遺跡	
第3図 調査区及び基本土層模式図 .....	4
第4図 古代の土器 .....	5
第5図 遺構実測図及び遺物出土状況図 .....	6
○吉倉A遺跡	
第6図 発掘区割図 .....	7
第7図 基本層序 .....	7
第8図 吉倉A遺跡遺構全体図 .....	8
第9図 古代遺構・遺物出土状況図 .....	9
第10図 柱穴覆土バターン図 .....	13

2 遺構 .....	40
(1) 古代の概要 .....	40
A 壺穴住居跡 .....	40
B 掘立柱建物 .....	44
C 穴 .....	44
D 溝 .....	44
E 河跡 .....	44
(2) 中・近世の概要 .....	45
A 南建物群 .....	45
B 中央建物群 .....	45
C 北西建物群 .....	46
D 近世以降の溝 .....	48
3 遺物 .....	49
(1) 古代 .....	49
壺穴住居跡 .....	50
土坑 .....	54
溝 .....	54
その他 .....	54
(2) 中・近世の遺物 .....	55
上飾質上器 .....	55
珠洲・八尾・中國製陶磁器 .....	56
瀬戸美濃・その他の遺物 .....	56
金萬製品・羽II .....	57
砥石 .....	57
種子・骨 .....	57
4まとめ .....	58
(1) 奈良時代・平安時代 .....	58
(2) 中世の遺構について .....	59
(3) 中・近世の遺物出土分布 及び器種組成について .....	60
引用・参考文献 .....	62

第11図 贼床状遺構・焼土・炭化物分布図 .....	13
第12図 掘立柱建物と等高線関係図 .....	20
第13図 古代遺構 .....	23
第14図 掘立柱建物(1) .....	24
第15図 掘立柱建物(2) .....	25
第16図 掘立柱建物(3) .....	26
第17図 掘立柱建物(4) .....	27
第18図 中世土坑・溝(1) .....	28
第19図 中世土坑・溝(2) .....	29
第20図 中世土坑・溝(3) .....	30
第21図 中世土坑・溝(4) .....	31
第22図 集石と溝・遺物位置関係図 .....	32

第23図	南側遺物集中区分布図	33
第24図	古代と中世の遺構出土遺物	34
第25図	中世の遺構出土遺物	35
第26図	中世の遺構出土遺物	36
第27図	集石・南側集中区出土遺物	37
第28図	包含層出土遺物	38
○古倉B遺跡		
第29図	基本場序	39
第30図	吉倉B遺跡発掘区割図	39
第31図	古代土器の器種分類	50
第32図	土師質土器分類	55
第33図	吉倉B遺跡古代遺構の時期別配置	58
第34図	吉倉B遺跡中世掘立柱建物の時期別配置	60
第35図	吉倉B遺跡中・近世土器分布図 及び個体数から見た中世土器器種組成	61
第36図	堅穴住居跡	63
第37図	堅穴住居跡	64
第38図	堅穴住居跡	65
第39図	堅穴住居跡	66
第40図	堅穴住居跡	67
第41図	堅穴住居跡	68
第42図	堅穴住居跡他	69
第43図	吉倉B遺跡中世遺構平面図	70
第44図	吉倉B遺跡中世遺構平面図	73
第45図	中世土坑平面図	75
第46図	吉倉B遺跡 古代の土器(1)	76
第47図	吉倉B遺跡 古代の土器(2)	77
第48図	吉倉B遺跡 古代の土器(3)	78
第49図	吉倉B遺跡 古代の土器(4)	79
第50図	吉倉B遺跡 古代の土器(5)	80
第51図	吉倉B遺跡 古代の土器(6)	81
第52図	吉倉B遺跡 古代の土器(7)	82
第53図	吉倉B遺跡 古代の土器(8)	83
第54図	吉倉B遺跡 古代の土器(9)	84
第55図	吉倉B遺跡 古代の土器(10)	85
第56図	吉倉B遺跡 古代の土器(11)	86
第57図	吉倉B遺跡 中世の土器(1)	87
第58図	吉倉B遺跡 中世の土器(2)	88
第59図	吉倉B遺跡 中世の土器(3)	89
第60図	吉倉B遺跡 繩文時代・古代・中世石器、 鐵器、鐵鋤、羽口	90
付図1	吉倉B遺跡古代遺構全体図	
付図2	吉倉B遺跡中世遺構全体図	

## 写真図版目次

写真図版1	総合運動公園内遺跡群全景
写真図版2	任海遺跡全景
写真図版3	任海遺跡遺構・遺物
写真図版4	吉倉A遺跡全景
写真図版5	吉倉A遺跡掘立柱建物
写真図版6	吉倉A遺跡土坑
写真図版7	吉倉A遺跡土坑
写真図版8	吉倉A遺跡第2文化層遺物出土状況
写真図版9	吉倉A遺跡堅穴住居跡
写真図版10	吉倉A遺跡古代と中世の遺構出土遺物
写真図版11	吉倉A遺跡古代と中世の遺構出土遺物
写真図版12	吉倉A遺跡中世の遺構出土遺物
写真図版13	吉倉A遺跡中世の遺構出土遺物
写真図版14	吉倉A遺跡中・近世の遺物
写真図版15	吉倉A遺跡中世の金属器X線写真
写真図版16	吉倉B遺跡全景
写真図版17	吉倉B遺跡全景・中央建物群
写真図版18	吉倉B遺跡中央建物群・土坑・井戸
写真図版19	吉倉B遺跡中央建物群・土坑・井戸

写真図版20	吉倉B遺跡南建物群他・溝
写真図版21	吉倉B遺跡北西建物群・土坑
写真図版22	吉倉B遺跡北西建物群・堅穴住居跡
写真図版23	吉倉B遺跡堅穴住居跡
写真図版24	吉倉B遺跡堅穴住居跡
写真図版25	吉倉B遺跡堅穴住居跡
写真図版26	吉倉B遺跡堅穴住居跡
写真図版27	吉倉B遺跡堅穴住居跡
写真図版28	吉倉B遺跡土坑・溝・河跡他・遺物出土状況
写真図版29	吉倉B遺跡古代の遺構出土遺物
写真図版30	吉倉B遺跡古代の遺構出土遺物
写真図版31	吉倉B遺跡古代の遺構出土遺物
写真図版32	吉倉B遺跡古代の遺構出土遺物・墨書き器
写真図版33	吉倉B遺跡古代の遺構出土遺物
写真図版34	吉倉B遺跡古代の遺物
写真図版35	吉倉B遺跡中世の遺物
写真図版36	吉倉B遺跡中世の遺物
写真図版37	吉倉B遺跡金属製品・羽口
写真図版38	吉倉B遺跡石器

## 表 目 次

表1	既往調査結果一覧	2
表2	掘立柱建物一覧	11
表3	吉倉A遺跡遺構出土遺物一覧表	22
表4	吉倉B遺跡掘立柱建物計測表	47

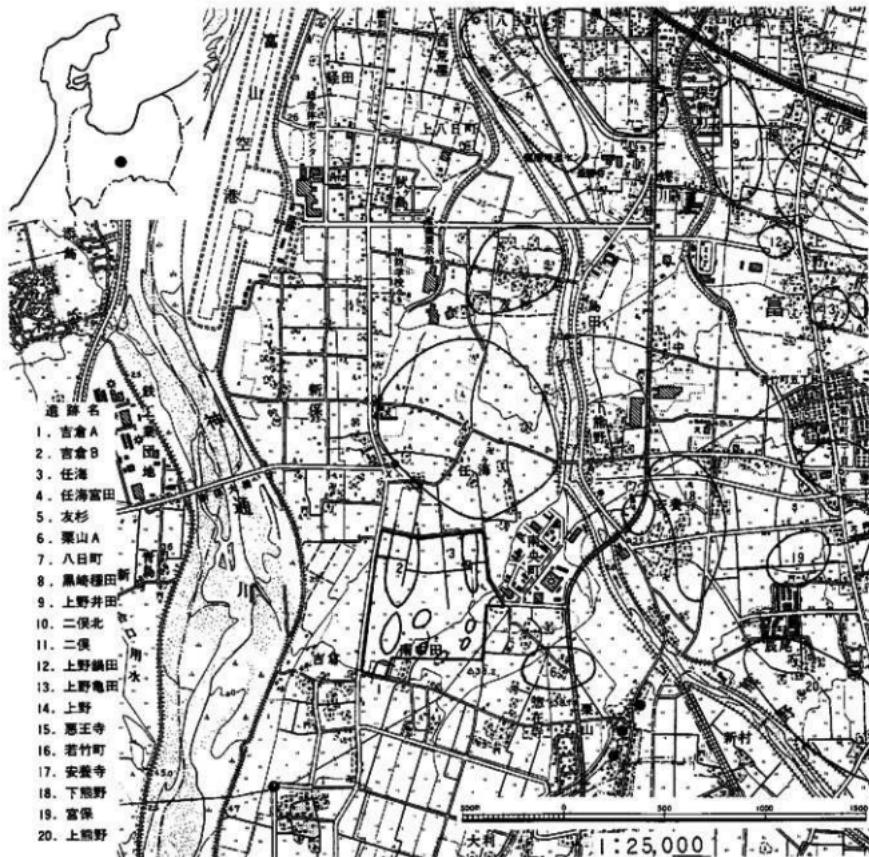
## I 位置と環境

任海、吉倉A、吉倉Bの3遺跡は、富山市南部の任海（とうみ）、吉倉（よしくら）地内にあり、現在建設中の富山県総合運動公園敷地内に含まれている。

このあたりは標高33~39mで、西方約500mに神通川、東方約800mに熊野川が流れ、両河川に挟まれたところである。地形的には南西から北東に延びる細長い谷と台地からなり、神通川の流れにより形成された河道と中州の微高地である。公園用地となる前は谷が水田、台地が畠として利用されていた。遺跡はその台地上に立地している。

周辺には縄文時代から江戸時代にわたる多くの遺跡が立地している。とりわけ奈良時代後半から平安時代前半と平安時代末から鎌倉時代に形成されたものが多い。しかし、その形成に関わる歴史的な背景についてはあきらかでない。富山県史通史編1では、平安時代末、寿永3年(1184)の後白河法皇の院宣にみられる「賀茂社領新保御厨」の比定地のひとつとして、運動公園北側に隣接する新保・任海地区をあげている[富山県1976]。

(久々)



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

## II 調査に至る経過

はじめに、富山県総合運動公園は、県民総合計画にもり込まれた「日本一の健康・スポーツ県」をめざす施策の柱として、また西暦2,000年（平成12年）に開催する国民体育大会のメイン会場として、基本計画が作成され、昭和61年12月には、富山市南部の新保地区に建設を決定した。その規模は、約46haに及ぶものであった。また、平成6年には、陸上競技場など一部の施設を完成し、インターハイ会場とするとして計画が進行している。

**昭和62年度** 建設位置の決定に伴い計画地内の埋蔵文化財の所在状況を把握する必要が生じたため、富山市教育委員会・県教育委員会は同地内の分布調査を同年5～6月に実施した。その結果、6か所で奈良・平安・中世の遺跡を確認した。この成果を基に、富山県都市計画課・富山県埋蔵文化財センター・富山市教育委員会の三者が協議を行ない、埋蔵文化財の遺存状況及び範囲を確認し、保護措置を講じるための試掘調査を実施することとなった。

**昭和63年度** 試掘調査は、富山市教育委員会が主体となり、同年6月20日から10月7日まで、遺跡が確認された6か所を対象として実施した。調査は、対象地区に試掘トレーン255か所、延15,198m<sup>2</sup>を発掘し、10か所で古代から中世の集落跡を確認した。工事地内に含まれる遺跡の総面積は、79,350m<sup>2</sup>であった。この結果を基に三者で協議を行ない、構造物・道路などの建設予定地は本調査を実施し、その他綠地などの部分は、遺跡を破壊せずに保護することとして合意した。その後、同年12月に用排水路の付替工事が計画され、工事にかかる南中田A遺跡・任海遺跡の一部(259m<sup>2</sup>)で富山市教育委員会が本調査を実施した〔富山市教委1989〕。

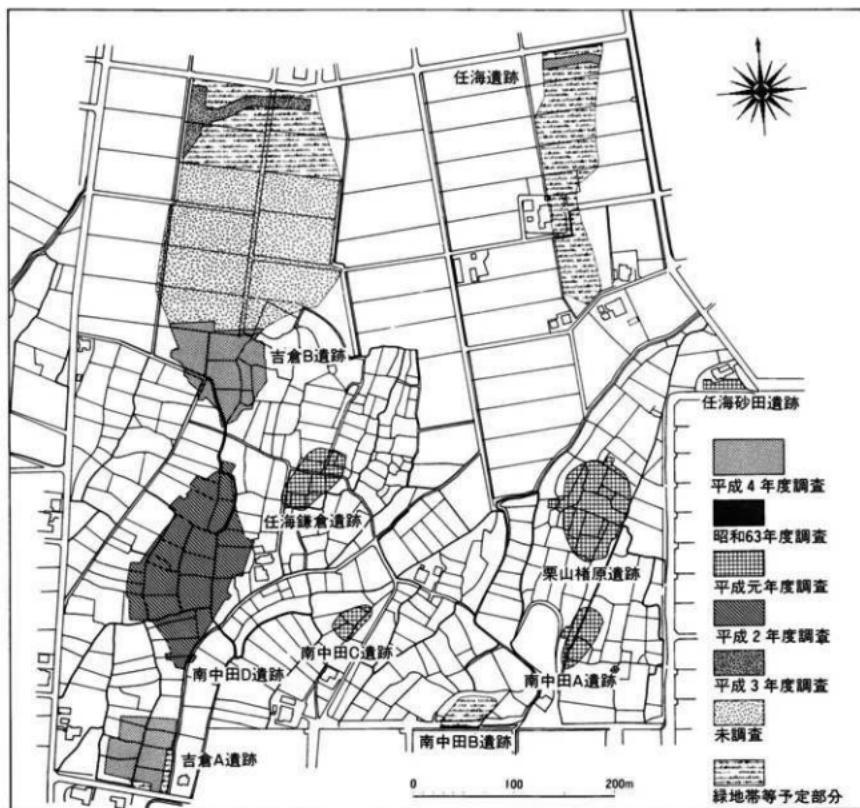
年 度	遺 跡	所 在 地	時 代	種 類	主 な 遺 構 と 遺 物
昭和63 試 掘	任海遺跡	富山市任海	平安・中世	集落跡	六・唐・鐵塔・土塁・船跡
	任海砂田遺跡	富山市任海砂田	奈良・平安	集落跡	土塁・鐵塔
	任海鎌倉遺跡	富山市任海鎌倉	平安・中世	集落跡	六・唐・鐵塔・鐵器・骨・輪轂・土塁
	栗山猪原遺跡	富山市栗山猪原	平安・中世	集落跡	六・唐・鐵塔・鐵器・骨・輪轂・土塁・鐵器
	南中田A遺跡	富山市南中田	鉄・鍍・鐵	集落跡	六・唐・鐵塔・鐵器・土塁・鐵器
	南中田B遺跡	富山市南中田	平安・中世	集落跡	六・唐・鐵塔・鐵器・鐵
	南中田C遺跡	富山市南中田	平 安	集落跡	土塁・鐵塔・土塁
	南中田D遺跡	富山市南中田	鉄・鍍・鐵	集落跡	六・唐・土塁・鐵塔・鐵・鐵器・輪轂・土塁・鐵器・鐵
	吉倉A遺跡	富山市吉倉	中 世	集落跡	九・鐵塔・鐵
	吉倉B遺跡	富山市吉倉	平安・中世	集落跡	六・唐・鐵塔・土塁・土塁・鐵・輪轂・土塁・鐵器・鐵
平成元 本調査	栗山猪原遺跡	富山市栗山猪原	平安・中世	集落跡	鐵塔跡12(古代)・土塁5.0・窓2.0・鐵器・鐵塔・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器・土塁
	任海鎌倉遺跡	富山市任海鎌倉	鉄・鍍・鐵	集落跡	鐵塔跡11・土塁5.0・窓4・鐵石器5.0・土塁・鐵塔・土塁・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器
	南中田A遺跡	富山市南中田	鉄・鍍・鐵	集落跡	鐵塔跡6・土塁5.0・窓7・鐵・鐵器・土塁・鐵器・土塁・鐵器・鐵器・鐵器
	南中田C遺跡	富山市南中田	平安・中世	集落跡	鐵塔跡1・土塁5.0・窓1・土塁・鐵器・土塁・鐵器・土塁・鐵器・鐵器
平成2 本調査	南中田D遺跡	富山市南中田	鉄・鍍・鐵 鐵	集落跡	鐵塔跡61・土塁3.000・鐵石器44・窓2.0・土塁・鐵器・鐵器・土塁・鐵器・鐵器・八角・鐵 戶・鐵・白・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵・鐵
平成3 本調査	吉倉B遺跡	富山市吉倉	平安・中世	集落跡	鐵塔跡2・鐵・鐵器・土塁1.6・窓4・鐵器・鐵器・鐵器・土塁・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器
平成4 本調査	任海遺跡	富山市任海	平安・中世	集落跡	九・土塁1・土塁・鐵塔・土塁・鐵器
	吉倉A遺跡	富山市吉倉	平安・中世	集落跡	鐵塔跡4・土塁1.6・窓4・鐵石器11・窓6.2・鐵器・土塁・土塁・土塁・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器
	吉倉B遺跡	富山市吉倉	鉄・鍍・鐵	集落跡	鐵塔跡25・土塁7.0・窓9.0・鐵石器37(古代)・鐵塔・土塁・土塁・土塁・鐵器・鐵器・鐵器・鐵器

表 I 既往調査結果一覧

**平成元年度** 試掘調査により遺跡の範囲があきらかとなり、工事計画に先行するかたちで本調査を実施することとなった。調査は、富山県土木部（総合運動公園建設準備室）の依頼を受けて富山県教育委員会（埋蔵文化財センター）が行なうこととなり、栗山椿原遺跡・任海遺跡・南中田A遺跡・南中田C遺跡の4遺跡（7,680m<sup>2</sup>）を対象として実施した。調査は、同年6月から11月に行なわれ、奈良・平安時代・中世の遺物が出土した。遺構は、中世の掘立柱建物・土坑が主体を占め、古代の遺構は少ない。総調査面積は、8,880m<sup>2</sup>である【富山県埋文センター1990】。

**平成2年度** 南中田D遺跡（11,750m<sup>2</sup>）を含めて約20,000m<sup>2</sup>の調査要望を受け実施した。しかし、本調査を進めるに、中世と古代の遺構面が約20cmの間層を挟み検出され、2面の文化層を持つことがあきらかとなった。調査の結果、検出された遺構は、竪穴住居跡61、穴及び土坑3,000、掘立柱建物44、溝270である。運動公園内の遺跡としては、最大規模であった。また、二面の文化層の検出は、今後の調査対応を見なおす結果となった。総調査面積は、14,000m<sup>2</sup>である。

**平成3年度** 吉倉B遺跡北側の公園街路計画地2,056m<sup>2</sup>を対象として実施した。この部分でも、古代と中世の2時期の遺構が確認され、次年度以降の調査区にも同様に遺構の存在が予測された。  
（酒井）



第2図 富山県総合運動公団内遺跡群

### III 任海遺跡

#### 1 調査の概要

##### (1) 調査の経過

当遺跡は、分布調査において少暈の須恵器・土師器が採集された。さらに、富山市教育委員会による試掘調査によって、東西70m南北260m、面積13,300m<sup>2</sup>の遺跡が確認された。遺跡は、9世紀中頃から10世紀初頭頃の集落跡で、東西は河川の氾濫によってかなり流出している【富山市教委1989】。

当遺跡は、1988年に用排水工事に伴い、遺跡の北端部において本調査が行われ、円形ピットを6基・溝1条を検出している【富山市教委1989】。今年度の調査は、総合運動公園内の周回道路建設に伴う本調査で、当初予定面積700m<sup>2</sup>であったが、植栽の盛り土等のため最終的に600m<sup>2</sup>を行った。7月23日より吉倉A遺跡と同時並行で調査を行い、途中中断もあり9月1日に終了した。実働日数は延べ9日である。

##### (2) 立地

総合運動公園内遺跡群の北東部に位置し、西側約200mには吉倉B遺跡がある。遺跡の標高は、南・北側では38.5m前後、中央部は38.8mを測る。つまり、中央部が高く南北にいくに従って緩やかに傾斜する地形で、今年度の調査区は遺跡の末端部に近いところである。現状は水田荒地である。

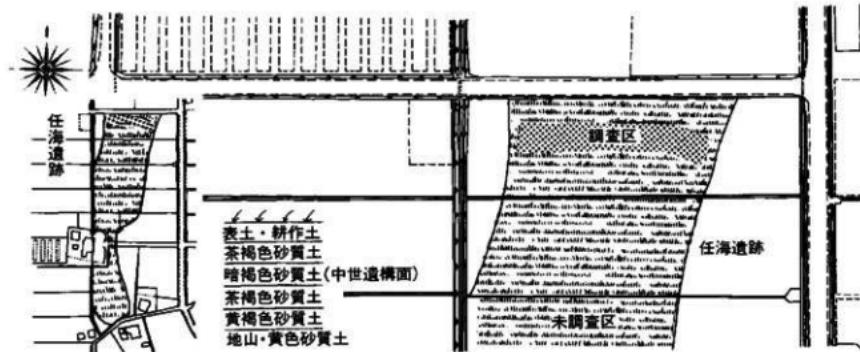
##### (3) 地質と層序（第3図）

基本層序は、これまで調査されてきた遺跡【富山県埋文センター1990・91】とやや異なる。上面の耕作土が区画整理のためはっきりしないほか、暗褐色・黒褐色等の褐色系のシルト質土が厚く堆積する。地山は砂質土であるが、地山までは厚いところで75cm程度ある。調査区の西側17~18mは、礫層が広がっている。  
(越前)

#### 2 調査結果

##### (1) 遺構（第5図、写真図版2・3）

遺構は、調査区東半分にあり、東西方向の溝3条が存在し、土坑1を調査区中央部で検出した。柱穴状の小さく浅い穴が5個存在していたが、うち調査対象区内の3個については完掘し、残りは発掘しなかった。



第3図 調査区及び基本土層模式図

**土坑** SK-1は、調査区中央部で溝 SD-2に南接するようにあった。平面形は、方形に近いが北東隅が少し丸くなっていたため菱形に近く一辺2.2m、深さ70cmの規模であった。平面形を方形とした時、一辺が溝SD-1にはほぼ平行する。断面形は、東・北が丸くなつておらず、他は「L」字状であった。遺構検出時から石が見えており、拡大から人頭大程度の石が底面まで入っていた。出土遺物は、前述した石の他は無かった。

**溝** SD-2は、SD-1の中程で重なり、SD-1より古く、東西に伸びていた。規模は、幅60~80cm、深さ10~20cmの浅く幅狭い溝であり、東に行くに従い浅くなり消える。遺物は、須恵器の杯・壺破片5点が覆土中から出土した。覆土は、上層に暗褐色シルトが薄くあり、その下は黒褐色シルトであった。SD-1は、遺跡中央部から北流して調査区に入り、調査区中央部で折れる。規模は、幅4m、深さ70cmで断面がU字形を呈し、一番深く大きな溝であった。土層は、SD-2と同様で、下層が暗褐色砂質土となり、地山の砂質土まで掘り込んでいた。遺物は、須恵器の杯・壺破片2点が覆土中から出土した。SD-3は、調査区東端で検出され、形状はSD-2に近く、深さが5cmと極めて浅い。この溝は、浅いためか両端が立ち上がり消える。もしかすると調査区の東に溝の統きが在るのかも知れない。規模は、幅40cm、深さ5~10cmで、遺物の出土は無かった。

**穴** 柱穴状の直径15~25cm、深さ10~20cmの穴が調査区の西南部に点在する。浅く、遺物は無かった。

#### (2) 遺物 (第4図、写真図版3)

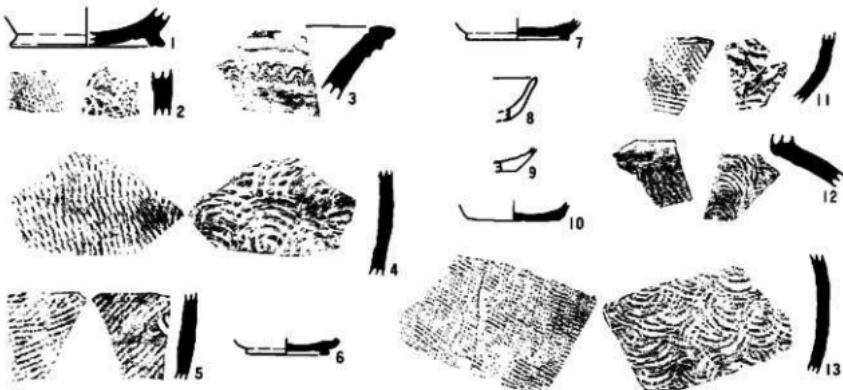
遺物は、1~4と14はSD-1、5~6はSD-2出土で、他は包含層出土である。出土地点などは、第5図で示した。

**古代の遺物** 須恵器は、杯A・B、壺、壺を検出した。杯Aは、10・14・19・20~22の6点で、14と19が口縁部破片で他は底部破片である。杯Bは、6・7の2点のみで、いずれも底部破片である。1・3・17は壺で、3は口縁部破片で、1は底部破片である。17は小破片であるが口縁部が平らで肥厚する等の特徴からここに含めた。2・4・12・13は、壺の胴部破片である。土師器は、杯、壺があり、杯は8・15・18・23~25の6点である。8は杯で、他は碗の可能性もあるが小破片のためここに含めた。24は、底部が糸切り底である。25も同様で、内面は黒色で、丁寧なナデがなされている。壺は、9・16の2点で、9は底部破片、16は胴部破片である。他に、小破片が数点あった。

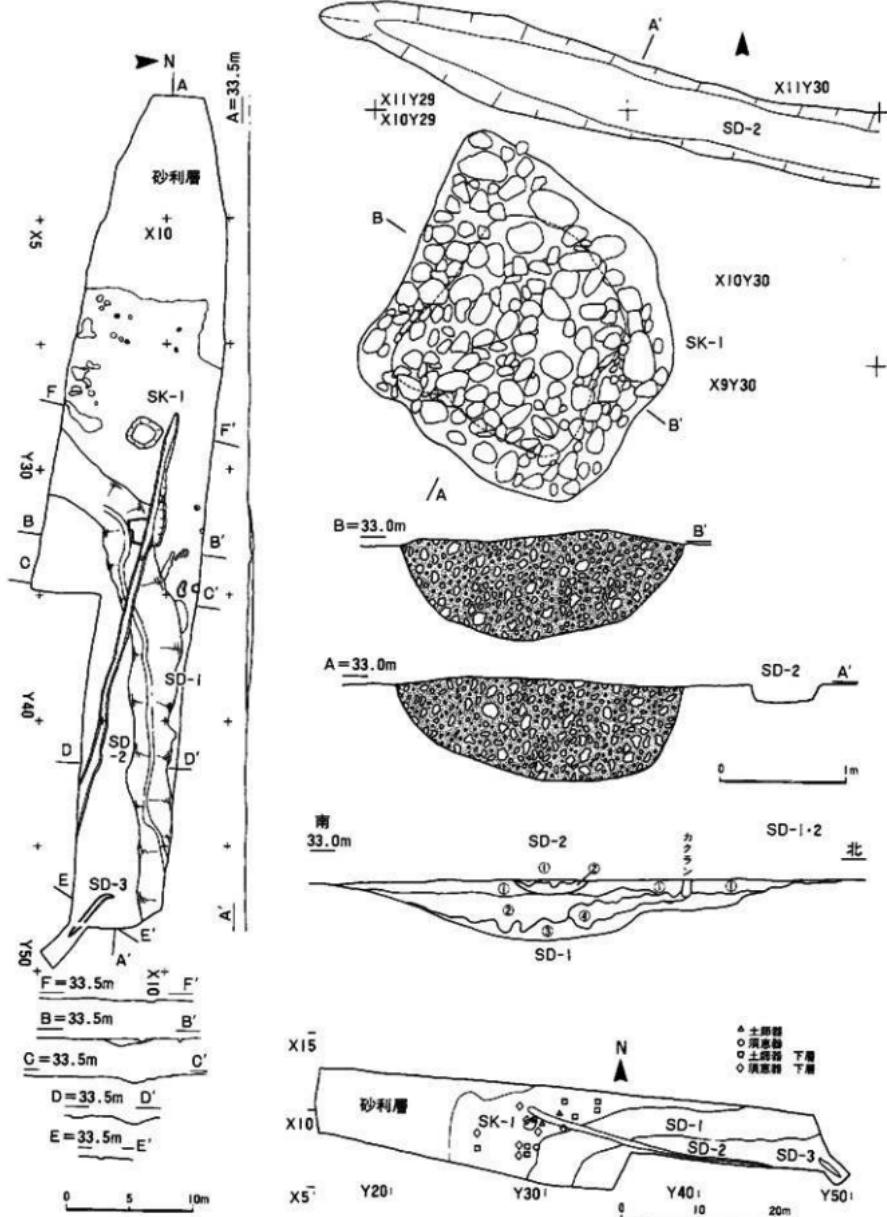
### 3 まとめ

遺物の時期は、小破片のため決定しがたいが9世紀前半を中心とし、遺物をもって遺構の時期とするならSD-1・2も同様となる。また、遺物の出土は無かったがSD-3・SK-1も同じと考える。その他として、9~13・19~25の遺物は、下層の有無確認時検出したもので、遺構面から約10cm程度下層から出土した。しかし、遺構は確認出来なかつた。

(橋本)



第4図 古代の土器 SD-1(1-4), SD-2(5-6), 下層(8-10), 他XY



第5図 遺構実測図及び出土状況図(右下)

## IV 吉倉A遺跡

### 1 調査の概要

#### (1) 調査の経過

当遺跡は、分布調査において少量の土師器が採集され、その後、富山市教育委員会による試掘調査が行われた。その結果、建設予定地内に東西50m南北60m、面積2,750m<sup>2</sup>の広がりが確認され、遺跡はさらに南及び東側に広がる可能性が予想された。また、時期は13世紀後半頃で、総合運動公園内遺跡群中唯一の中世単純遺跡であるとされた【富山市教委1989】。

駐車場建設に伴う調査として、1,900m<sup>2</sup>を対象に5月25日から調査に入った。しかし、調査中北及び東西側に遺跡が広がり、第2文化層（古代）の存在が確認された。そのため、建設室と協議の結果、北及び西側で調査区を拡張し、第1文化層に引き続き第2文化層の調査を行った。最終的に調査面積は約3,400m<sup>2</sup>で、調査は11月12日に終了した。実働日数は延べ92日であった。

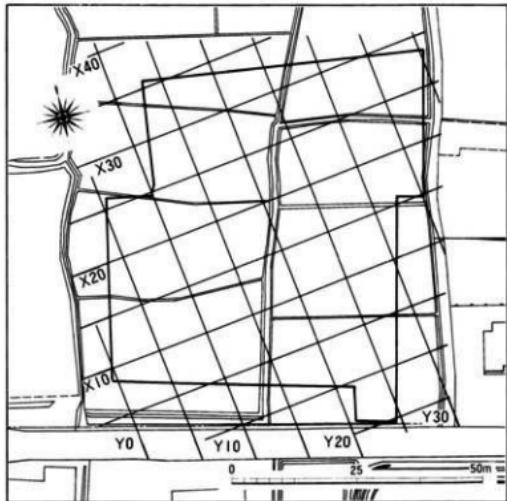
#### (2) 立地

総合運動公園内遺跡群の南端に位置し、すぐ北側には南中田D遺跡が、さらに北側には吉倉B遺跡がある。標高は38.5m前後を測り、現状は水田荒地である。水田の区割りは旧地形を良く残し、遺跡のすぐ東側には旧河道路を確認できる。また、北及び西側にも緩やかに傾斜し、遺跡が微高地上にあることが分かる。

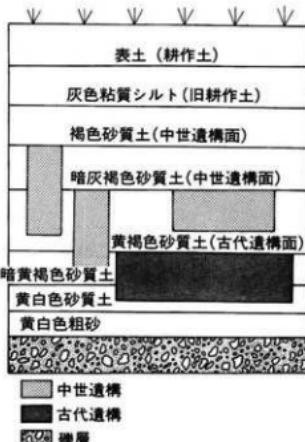
#### (3) 地質と層序（第7図）

耕作土を除去すると、砂質土層、砂層、礫層が現れる。礫は、基本的には地山の礫層が顔を出しているものである。調査区の西半分では南北方向に帯状の礫層が数条みられ、河川が西側へ移動していったものと考える。

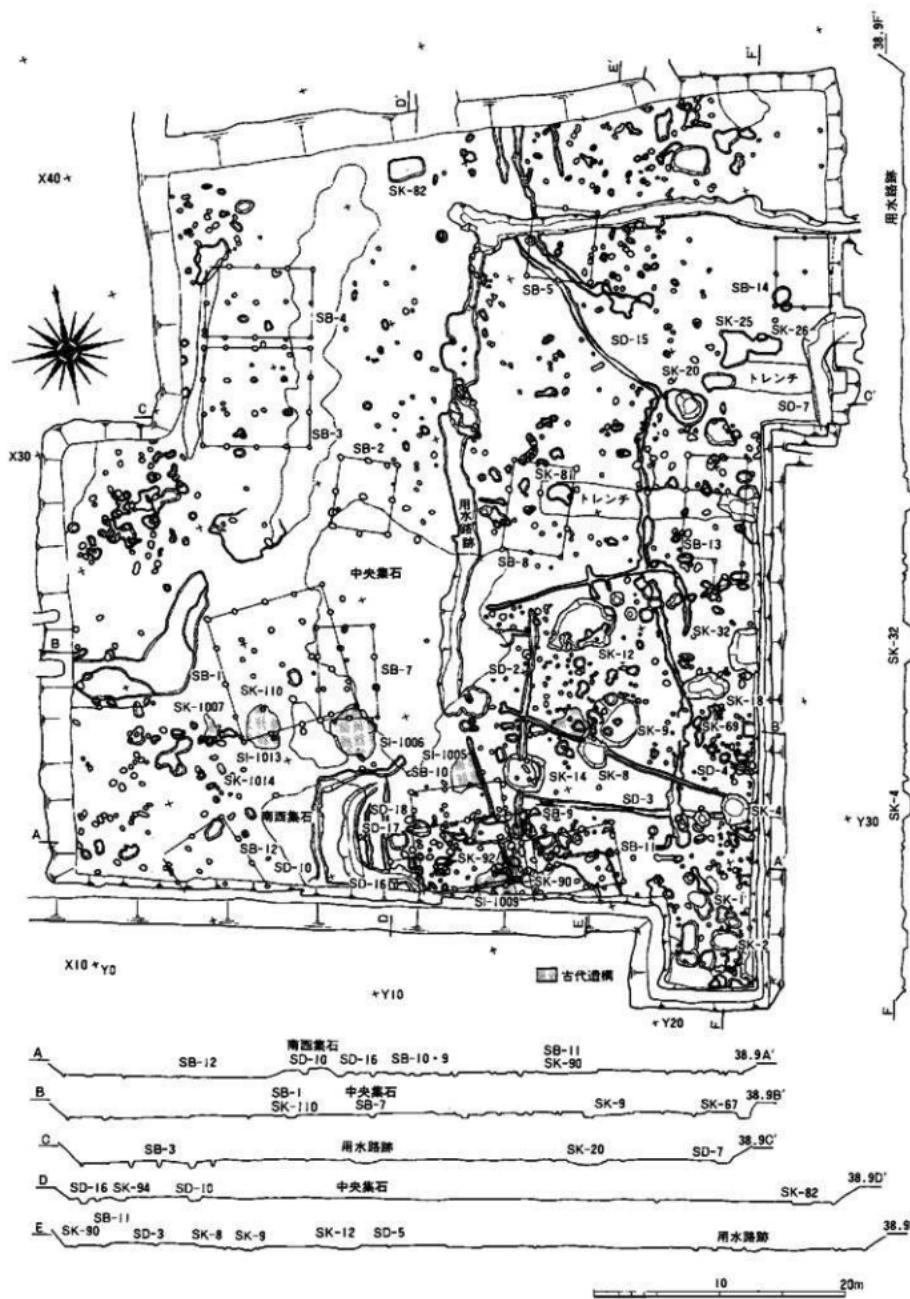
基本層序は、過去の調査結果と大差はない【富山県埋文センター-1990・91】。褐色砂質土は、所によって極めて薄いえ、灰色粘質シルト直下の鉄分の沈着層のため、この層においての遺構の検出はほとんどできなかった。



第6図 発掘区区割図



第7図 基本層序



第8図 吉倉A遺跡遺構全体図 (S=1/400)

## 2 遺構

### (1) 積穴住居跡 (第9・13図・写真図版9)

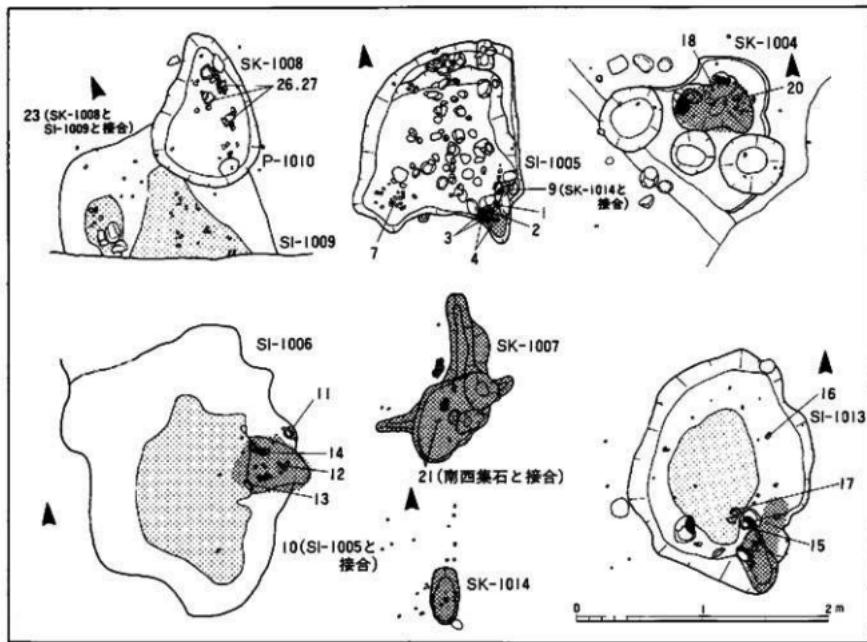
今回の調査では、4棟の積穴住居跡が確認された。いずれも古代に属し、8世紀後半から9世紀初頭のものと考える。積穴住居跡を含め、古代の遺構はすべて調査区の南半分で確認された。なお、( ) 中の数値は推定値である。

#### S I - 1005

調査区の中央、中央集石の東に位置する。形状・規模：南北3.0m×東西2.6m、面積7.4m<sup>2</sup>、深さ20cmの小型方形を呈する。カマド：南壁の東端に位置し、両袖石のほか3・4個の完形円窓で作られ、燃焼室をやや掘窪める。諸施設：4面の壁際を粗い砂・やや粘質の土で埋めている。これは、南中田D遺跡において確認されているが、南中田D遺跡で確認された柱穴は確認できなかった〔富山県埋文センター-1991〕。また、北側から東側にかけて幅25cm程度の段が確認された。この住居跡は、当調査区で唯一貼床がなかった。出土遺物：カマド周辺及び床面南西端から、須恵器杯身（3・5）・同杯蓋（1・2・10）・同壺（6）・土師器小壺（7・8・9）が出土した。また、土師器小壺は、SK-1014との接合関係が認められた。

#### S I - 1006

調査区の西側中央、中央集石のすぐ西に位置する。形状・規模：南北（4.1m）×東西（3.6m）である。貼床面での確認のため正確な形状・規模は不明である。カマド：東壁の中央に位置し、礫層にかかるよう作られている。これにより、熱効率が良かったと思われる。袖石等は確認されなかったが、焼土・土器が集中し、焼けた板状割離が出土したためカマドと考えた。諸施設：中央に不整形、面積4.0m<sup>2</sup>の貼床がある。柱穴等は確認できなかった。出土遺物：前述のとおり、カマド部分に集中して出土した。土師器壺（13・14）・同小壺（11・12）といった煮沸具のみである。



第9図 古代遺構・遺物出土状況図 (S-1/80)

## S I - 1009

調査区の中央南端に位置し、SK-1008・P-1010に切られる。形状・規模：東西3.0m×南北（3.0m）であるが、貼床面での確認であり、南半分が調査区外へと延びているため、正確な形状は不明である。カマド：調査区の南壁面に焼土が確認でき、カマドに伴う焼上の可能性がある。諸施設：中央部に不整形で、途中途切れるが、面積2.1m<sup>2</sup>の貼床を確認した。床面は起伏を持ち、東側が低くなる。その部分から人頭大程度の円礫が数個出土した。出土遺物：遺物は、須恵器杯身（22）・土師器壺が出土した。全体に散漫に分布し、SK-1008と接合するものが多い。

## S I - 1013

調査区の西側中央に位置する。形状・規模：南北3.4m×東西2.7m、面積9.6m<sup>2</sup>、深さ15~40cmの小型精円形を呈する。床面までの深さは15cmであるが、西側2/3程は、あらかじめ30cm程度掘り、埋め戻した後貼床を貼る。カマド：東壁南端に位置している。燃焼室はやや掘堀め、両袖は完形円礫を用いる。焼土がカマド周辺から北壁に沿って広がり、床面の南端から焼けた完形円礫・半截礫が出土しており、カマドの作り替えによる古いカマドの残存と考えられる。諸施設：中央部に指円形、面積1.8m<sup>2</sup>の貼床を確認した。柱穴等は確認されない。出土遺物：遺物はカマド周辺に集中して確認された。SI-1006と対照的に、煮沸具の出土はなかった。須恵器杯身（16）、同杯蓋（15）、内面黒色処理された土師器碗（17）が出土した。また、須恵器杯身は、SK-1007と接合関係が認められた。

### (2) 挖立柱建物（第14~17図・写真図版5）

今回の調査区では13棟の掘立柱建物を確認した。調査区のほぼ全域に分布しているが、大・中規模建物はすべて調査区の西半分で確認し、その周辺は土坑・溝等の遺構は少ない。それに対し小規模建物は、主に調査区の北東部で確認した。建物の棟方向は南北棟が多いが、東西棟も3棟みられる。

建物はすべて中世に属する絶柱建物である。全般に、明らかに建物に伴うと考えられる遺物が少なく、時期決定の決め手に欠くが、12世紀後半~13世紀代には同時に存在した建物と考える。

なお、建物の属性・計測は、今回確認した建物が15世紀以降のものではないと判断した上で「間面法」に沿った復原を試みた（表3）。「間面法」は、15世紀頃まで一般に使われていた建物の規模の表記法で、3間2間2面庇の建物を「3間2面」、4間2間3面庇の建物を「4間3面」という表現法である。つまり、身舎の梁方向は2間（1間）を基本とし、建物規模は、桁行の長さと庇がどのように付加されるかによる。

また、柱穴の断面観察の結果、数種類のバタンが確認された。それらを柱痕または抜き取り痕の有無によりType I・IIに大別し、さらに覆土の堆積のしかたによりType Iをa~cに、Type IIをa・bに細分した（第10図）。Type Iは、柱痕が確認できるもの（I a）、柱の抜き取り痕が見られ水平に堆積するもの（I b）、抜き取り痕がみられレンズ状に堆積するもの（I c）に分けた。Type IIは、基本的には單一土層である（II b）が、柱穴の縁にブロック状に混土するもの（II a）を分けた。但し、全ての建物の柱穴を観察することは出来なかったことを断っておく。

### S B - 1 （第14図）

調査区西側中央に位置し、SB-7と重複するが柱穴に切り合い関係はない。中央集石に東・南庇の柱穴がかかる。南庇の柱穴を除いて柱穴の規模に差は認められないが、間尺から4面庇の可能性を考えた。さらに、身舎部分の間尺が他の建物に比べてずば抜けて大きいこと、庇を含む面積が当調査区中最大規模の建物であること、この建物に伴う建物がないこと等より、生活とは別の目的を持った建物の可能性を考える。P 2・P 3・P 4の南側50~80cmのところに、庇の柱穴と規模が変わらない柱穴が一列並ぶが、建物に伴うかは不明である。柱穴の断面観察の結果、全体の44%がType Iで、そのうちI aに属するものが2本認められ、いずれも庇部分であった。棟持柱（中間柱）はすべてType IIである。遺物は、P 4から刀千片（29）、P 18から土師質土器（28）が出土している。

道 路 名	建物番号	柱行(m)	梁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )	込み面積	寄合比	剪数(箇)	横方向	そ の 他
古賀 A	1	7.8	5.2	39.5	125.8	3.2	2×2	N・E-W	東・西北
古賀 A	2	5.6	4.9	27.4	27.4	1	2×2	N・N-E	北
古賀 A	3	8	4.8	38.4	68.9	1.8	3×2	N・N-E	東・西北
古賀 A	4	5.6	4.8	26.9	48.2	1.8	2×2	N・N-E	東・西北
古賀 A	5	5.6	5.3	29.7	29.7	1	2×2	N・N-E	北
古賀 A	7	7.2	4.3	31.0	31.0	1	3×2	N・N-E	
古賀 A	8	7.3	4.8	35.0	35.0	1	3×2	N・N-E	S K81が付属する
古賀 A	9	7.2	2.4	17.3	52.1	3	4×1	N・N-E	南北 S K92より新しい
古賀 A	10	7.2	2.2	15.8	66.2	4.2	3×1	N・N-E	北底 内側張り出し S K92-94が付属する
古賀 A	11	7.2	4.8	34.5	34.6	1	3×2	N・N-E	
古賀 A	12	6.9	5.6	38.6	38.6	1	3×2	N・N-E	
古賀 A	13	8.2	4.9	40.2	40.2	1	3×2	N・N-E	地方向の柱筋にばらつき 1×1の張り出しあり
古賀 A	14	5.6	4.5	25.2	25.2	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	1	13.7	4.6	63.0	141.0	2.2	5×2	N・N-E	北・東・西北
南中田 D	2	7.0	5.5	38.5	38.5	1	3×2	N・N-E	
南中田 D	3	7.4	4.3	31.8	31.8	1	3×2	N・N-E	
南中田 D	4	3.3	4.1	13.5	13.5	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	5	5.8	4.5	26.1	26.1	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	6	7.6	5.6	42.6	79.8	1.9	3×2	N・N-E	S B-6をまる
南中田 D	7	8.1	4.5	36.5	46.8	1.3	3×2	N・N-E	南底
南中田 D	8	4.7	3.5	16.5	16.5	1	2×1	N・N-E	S Kが付属する
南中田 D	10	4.0	2.3	9.2	9.2	1	2×1	N・N-E	
南中田 D	11	5.6	4.5	25.2	25.2	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	12	7.2	5.9	42.4	107.4	2.5	3×2	N・N-E	南・北・西北 南延底
南中田 D	13	7.5	6.0	45.0	45.0	1	3×2	N・N-E	
南中田 D	14	4.8	4.8	23.0	23.0	1	1×2	N・N-E	
南中田 D	15	4.8	2.8	13.4	24.0	1.8	2×1	N・N-E	
南中田 D	16	4.8	5.4	25.9	25.9	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	17	6.2	5.6	34.7	34.7	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	18	4.5	3.2	14.4	14.4	1	3×2	N・N-E	
南中田 D	19	3.6	3.5	12.6	12.6	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	20	6.0	3.8	22.8	22.8	1	3×2	N・N-E	
南中田 D	21	5.5	3.1	18.2	18.2	1	4×2	N・N-E	北底？附列？ 馬小屋もしくは物置？
南中田 D	22	4.2	3.7	45.5	45.5	1	2×2	N・N-E	S Kが付属する
南中田 D	23	6.6	3.2	21.1	21.1	1	4×2	N・N-E	S Kが付属する
南中田 D	24	6.6	4.6	30.4	30.4	1	3×2	N・N-E	S Kが付属する
南中田 D	25	4.3	3.1	13.3	13.3	1	2×2	N・N-E	S Kが付属する
南中田 D	26	8.8	4.9	43.1	82.5	1.9	3×2	N・N-E	4曲底
南中田 D	28	5.3	4.4	23.3	23.3	1	2×2	N・N-E	右側に1×1の張り出し(不明底)
南中田 D	29	13.5	4.8	64.8	93.2	1.4	5×2	N・N-E	内底
南中田 D	30	6.1	4.7	28.7	28.7	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	31	6.8	5.2	36.4	35.4	1	3×2	N・N-E	西底 S Kが付属する
南中田 D	32	6.5	5.5	36.8	42.4	1.2	3×2	N・N-E	内側構
南中田 D	33	9.4	4.8	45.1	85.5	1.9	3×2	N・N-E	東・西北
南中田 D	34	12.7	4.9	62.2	118.1	1.9	5×2	N・N-E	東・西北 北側壁2列 東側張り出し(込み面積141.1m <sup>2</sup> )
南中田 D	35	5.6	4.4	24.6	24.6	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	36	5.8	5.0	29.0	29.0	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	37	4.9	5.1	25.0	25.0	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	38	6.9	4.6	31.7	31.7	1	3×2	N・N-E	
南中田 D	39	5.0	4.7	23.5	23.5	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	40	4.5	4.3	19.4	19.4	1	2×2	N・N-E	
南中田 D	41	1.4	3.4	4.8	4.8	1	1×2	N・N-E	片流屋根の小屋を想定
南中田 D	42	5.8	5.0	29.0	29.0	1	1×1	N・N-E	
南中田 D	43	3.1	3.0	9.3	9.3	1	1×1	N・N-E	S Kの上層
南中田 D	44	5.7	0	0	0	2×(1)	N・N-E	東半分切られる	
南中田 D	45a	5.7	5.1	29.1	93.9	3.2	2×2	N・N-E	南・北・西北
南中田 D	45b	8.0	5.1	40.8	93.9	2.3	3×2	N・N-E	南・北・西北 S X116-117が付属する
泰山 横倉	10	9.3	5.8	52.1	85	1.6	4×2	N・N-E	北底 南側に出間
泰山 横倉	11	8.0	4.8	38.4	38.4	1	3×2	N・N-E	
泰山 横倉	20	8.5	6.7	57.0	57.0	1	4×2	N・N-E	
南中田 A	1	8.8	5.0	41.5	129.1	3.1	3×2	N・N-E	4面庇(125m <sup>2</sup> )北庇庇？櫛列？
南中田 A	15	8.8	5.4	47.5	47.5	1	4×2	N・N-E	
南中田 A	16	6.9	5.5	38.0	78.5	2	3×2	N・N-E	南北庇
南中田 A	57A	5.4	4.6	24.8	63.0	2.5	2×2	N・N-E	4方向に櫛列？庇？東側のみ櫛？
南中田 A	67B	6.8	4.0	27.2	36.1	1.3	3×2	N・N-E	北側に櫛列？庇？
南中田 A	67C	3.6	3.4	12.2	12.2	1	1×2	N・N-E	楕円のみ
任海緑倉	1A	8.5	4.4	37.4	37.4	1	2×2	N・N-E	
任海緑倉	1B	10.9	5.2	56.7	83.4	1.5	5×2	N・N-E	南北 (石列上に柱を建てる)
任海緑倉	19A	6.1	4.8	29.2	29.2	1	2×2	N・N-E	北・東櫛列？庇？
任海緑倉	19B	4.8	4.6	22.1	22.1	1	2×2	N・N-E	
任海緑倉	20	7.4	5.7	42.2	94.5	2.2	3×2	N・N-E	南・北・内底 南底庇 S K28が付属する
任海緑倉	21	7.9	4.8	37.9	75.6	2	3×2	N・N-E	南・西北
任海緑倉	22	9.6	4.1	39.3	72.9	1.9	5×2	N・N-E	東・西北
任海緑倉	8	4.0	4.1	16.4	16.4	1	2×2	N・N-E	
任海緑倉	23	3.6	3.5	12.6	12.6	1	2×2	N・N-E	
任海緑倉	73	5.6	3.5	19.6	29.7	1.5	3×2	N・N-E	西北
任海緑倉	120	5.8	3.9	22.6	33.6	1.5	3×2	N・N-E	東北 北側櫛列
南中田 C	4	9.2	4.8	44.2	44.2	1	4×2	N・N-E	S K165が付属する 南底庇

表2 据立柱建物一覧

棟方向はすべて真北を基準とする。

( )内の数値は、推定値である。

### SB-2 (第14図)

調査区の中央に位置し、南半分が中央集石にかかる。棟持柱（中間柱）（P2・P8）の柱穴は、側柱の柱穴よりやや規模が小さく、P2は、側柱の柱列よりやや外にずれる。P5の柱穴は、この建物の中で最も規模が大きい。P8・P9の柱穴には、後補の柱穴があり、柱を補強したものと考える。柱穴の断面観察の結果、Type Iが56%を占める。そのうちIaはP5のみである。遺物は、柱穴から須恵器杯身・土師器甕が出土しているが混入と考える。

### SB-3 (第15図・写真図版5)

調査区の北西部に位置し、SB-4とは70cm前後の間隔で並存する。東西に疊層の露頭がみられ、東西庇がこれを切る。棟持柱（中間柱）（P3・P18）の柱穴は、身舎の側柱より小さく深さも浅い。庇の柱穴も、身舎の柱穴より明らかに小さく深さも浅い。また、庇の柱は、身舎の梁方向の柱筋よりややずれる。柱穴の断面観察の結果、75%がType Iで、Iaのものが2本、Ibのものが7本である。棟持柱（中間柱）列のうち3本がType Iである。遺物は、P1（30・32）・P3（31）から土師質土器が出土している。

### SB-4 (第15図・写真図版5)

棟方向はSB-3とほぼ揃い、庇を含めた梁方向の規模や身舎の柱穴の特徴が酷似するなど、同時期に建っていた可能性、もしくは、1つの屋根で繋がれ1つの建物として存在していた可能性があると考える。仮に1つの建物とするとき、庇を含めた面積は、SB-1に匹敵する大規模な建物になる。棟持柱（中間柱）（P2・P13）が、ともに北方向にややずれるため、梁方向の柱筋がややずれる。庇の柱穴は身舎の柱穴に比べて小さく深さも浅い。西側庇の柱穴は、上面を削平してしまった可能性もあるが特に浅く、P1は梁方向の柱筋からずれる。柱穴の断面観察の結果、33%がType Iで、Iaのものが3本である。棟持柱（中間柱）列のものにType Iは1本だけである。出土遺物はない。

### SB-5 (第14図・写真図版5)

調査区の中央北に位置し、SD-15を切る。両棟持柱（中間柱）（P2・P8）が、側柱の柱筋よりやや外にずれる。周辺には柱穴状の小穴が多数存在し、さらに複数の建物が存在した可能性が高い。柱穴の断面観察の結果、88%がType Iだが、Iaはない。棟持柱（中間柱）はすべてIbである。出土遺物はない。

### SB-7 (第14図・写真図版5)

調査区の西側中央に位置し、ほとんど中央集石にかかる。SB-1と重複するが柱穴に切り合い関係はない。両棟持柱（中間柱）（P2・P11）は、梁方向の柱筋より内側に、P4・P6・P7・P9は、4隅を結んだ柱筋の外側にそれぞれややずれる。柱穴の断面観察は、12本中8本しか行えなかったが、すべてType Iであった。遺物は、混入と思われる土師器甕が出土している。

### SB-8 (第17図・写真図版5)

調査区の中央やや北に位置する。両側柱の柱筋にばらつきがあるが、両妻梁方向の柱筋を揃える。周辺には柱穴状の小穴が多数存在し、さらに複数の建物が存在した可能性が高い。柱穴の断面観察は行えなかった。この建物には、SK-81が付属する。出土遺物はない。

### SB-9・10・11 (第16図・写真図版5)

調査区の中央南側に位置し、3棟の建物が重複するが、柱穴の切り合い関係はない。位置関係よりSB-11はSB-10の付属建物と考える。これらの建物のすぐ西側には、3棟の建物のいずれかに対応するものと思われる数条の溝が確認された。また、当調査区で東西棟はこの3棟だけである。復原した建物以外にも、柱穴状の小穴や土坑が多くみられ、さらに複数の建物が存在した可能性が高い。SB-9に付属する掘立柱建物は確認できなかった。しかし、詳細についての後述するが、SK-90中に2間2間以上の柱穴が巡り、これを堅穴住居状の建物とすると、SB-9に伴う可能性がある。なお、建物の把握が遅れ、土層観察できた柱穴が少ないため、柱痕の有無・覆土の埋まり方等の検討が

十分に行えなかった。以下、個々の建物について記載する。

**S B-9** 間尺から考え、身舎を4間1間南北庇に復原した。こうした建物の場合、棟持の方法が問題になる。宮藤交二氏は、堂山下遺跡の梁行が1間の建物の検討に際し、次のような可能性を考えている【財崎玉県理蔵文化財調査事業団1991】。「このような棟持柱を持たない建物の場合、板に棟木の存在を想定しようものならば、①梁の上に棟木を支える又首が置かれる、②妻側の両隅の柱と柱の間を地表で横に繋ぐ材が渡してあり、棟持柱はその材の上に置かれる、等の方法が取られていた可能性が惹起されよう。」とあり、この建物においても同様の可能性を考える。しかし、梁方向の柱筋から見てみると、南側の1列のみがずれており、南側のみを庇部分と考え、4間2間南北庇となる可能性も否定できない。SK-88・92を切り、SD-16に切られる。このことから、SB-10より古いことが分かり、占有位置・棟方向等から、SB-10はSB-9の建て替えと考える。また、特記すべきこととして、貼床状造構（堅く締めた砂質土面）および焼土・炭化物層の存在が挙げられる（第11図）。これらは、造構検出面の上層15~20cmで確認され、建物の床面と考えられる。貼床状造構は、焼土・炭化物層を閉むように広がっている。カマドの残欠の可能性を考えるが、県下においてこれまでにカマドの検出例はない。また、福井県の一乗谷遺跡においてもカマドの検出例はほとんどなく、類例が待たれる。遺物は、P 11から出土している（33）ほか、床面のレベルから珠洲・土師質土器・青磁・鉄製品（鉄滓含む）・石製品・植物種子等が多く出土している。

**S B-10** 初め、桁方向の間尺がまちまちなため、2つの建物の重複、もしくは建て替えを考えた。しかし、基本的に3.0mの間尺によって建物梁方向の規模を設定、必要に応じてその間に柱を持たせたもの（P 11~14、P 19~22）と判断し、1棟の建物とした。その結果、3間1間の南北庇の東西棟、西側に張り出しがつく建物を復原した。SK-92・94は建物に付属する。間尺が極端に狭い（80cm）所について確認は無いが、出入口・窓等を想定したい。P 6~P 9の柱穴は、他の柱穴より大きく深い。SK-94から遺物の出土はないが、SK-92より珠洲甕（152・155・158）・土師質土器（153・154・156・157・164~171）・鉄製品（159~163）等が多く出土している。その他土師質土器は、P 11（40）・P 13（42）・P 19（41）から出土している。

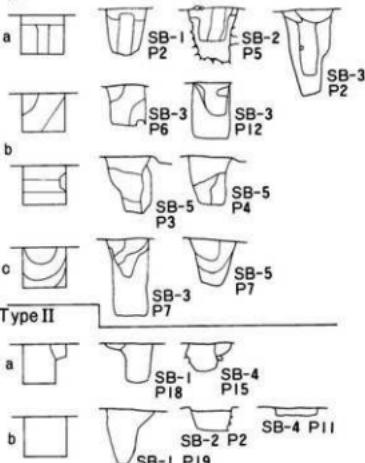
### S B-11

P 1・P 2は、調査区外に延びている。SK-90・85との切り合い関係は確認できなかった。焼土・炭化物層がP 10上面（SK-85上面）20cm程度で確認された。貼床状造構は確認できなかったが、当時の床面と思われる。明らかに作うと考えられる出土遺物はない。

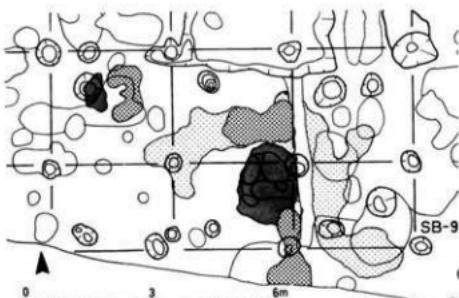
### S B-12（第17図）

調査区の西側南端に位置し、南側は調査区外

### Type I



第10図 柱穴覆土バタン図



第11図 貼床状造構・焼土・炭化物分布図 (S=1/120)

に延び、全体を把握できない。北側の1列は、P10が確認できなかったため張り出しども考えられる。そうした場合、現在P1・P11を棟持柱（中間柱）に想定しているが、P4・P6を棟持柱（中間柱）とするべきかもしれない。なお、柱穴の断面観察は行えなかった。出土遺物はない。

#### S B-13 (第17図)

調査区の東側中央に位置する。無柱列の柱穴には土坑等に切られ確認できないものがある。側柱列の柱筋は描わらず、梁行の間尺も一定ではない。規模は比較的大きいが、しっかりした建物は想定しにくく、小屋程度のものを想定したい。なお、柱穴の断面観察は行えなかった。出土遺物はない。

#### S B-14 (第17図)

調査区の東側北に位置し、第2文化層検出途中で確認された。P6は、調査区の壁に確認された。柱筋はややばらつきがある。この付近は、かなり上層が削平されているものと思われるものの、柱穴の規模も小さく、小屋程度のものを想定したい。なお、柱穴の断面観察は行えなかった。

#### (3) 土坑

古代の土坑は、調査区の南半分で4個確認された。覆土は、焼上が充满するものと黄褐色砂質土のものがある。

中世の土坑は、調査区の東半分を中心に確認され、SK番号をつけたものは約120個ある。遺構の覆土は、褐色砂質土・暗褐色砂質土・黒褐色砂質土・灰褐色砂質土等4・5種類が確認できたが、それらによる時期差は、灰褐色砂質土が新しいという以外確認できなかった。

形状は様々であるが、便宜上次のように分類した。

平面形：方形 長方形 円形 楕円形 不整形

規模：大型（長軸が3.0m以上） 中型（長軸が80cm以上3.0m未満） 小型（長軸が80cm未満）

#### A 古代

##### SK-1004 (第9・13図・写真図版9)

SI-1005の東側約7mのところに位置する。長軸2.8m、短軸2.4m、深さ10cm、不整形・中型の土坑である。覆土は焼土が充満し、須恵器杯身（18・19）・土師器小甕（20）がまとまって出土した。竪穴住居のカマドと類似した様相を持つが、他の施設が確認できなかった。削平を受け、カマド部分以外の諸施設が破壊された可能性も考えられる。

##### SK-1007 (第9・13図・写真図版9)

SI-1013の西側約3mのところに位置する。長軸2.5m、短軸2.0m、深さ15cm、不整形・中型の土坑である。覆土は、焼土及び炭化物が充満していた。遺物は、土坑内及び周辺から須恵器杯身（21）・土師器甕等が出土した。そのうち須恵器杯身は、南西集石出土遺物と接合関係にある。

##### SK-1008・P-1010 (第9・13図・写真図版9)

SK-1008は、SI-1009を切り、P-1010に切られる。覆土は、地山との区別困難な黄褐色砂質土である。長軸2.4m、短軸2.0m、深さ20cm、楕円形・中型の土坑である。焼土はみられないが、若干の炭化物と数個の人頭大の石・板状割縫がみられた。遺物は、須恵器杯身（24）・土師器甕（23・26・27）・土師器小甕（25）がある。それらは全体に大きな破片で出土し、SI-1009と接合関係があるものが多い。

##### SK-1014 (第9・13図)

SK-1007の南に位置し、焼土・炭化物が充満する。長軸80cm、短軸40cm、深さ15cm、楕円形・小型の土坑である。遺物は、土師器小甕（9）が出土し、SI-1005と接合関係にある。

## B 中世

SK-8・9 (第21図) SK-9はSK-8を切り、SD-4がSK-8を切る。

SK-8 長軸3.3m、短軸2.7m、深さ20cm、円形・大型の土坑である。遺構中には、人頭大以下の石が多くみられた。また、一部で貼床状に堅く縛られた白色砂質土層が確認され、南端には青灰色の粗砂が確認された。住居跡・作業場の可能性も考えたが極め手を欠く。遺物は、珠洲片口鉢(77)・土師質土器(76)がある。

SK-9 長軸5.5m、短軸5.0m、深さ30cm、円形・大型の土坑で、SK-8を切る。遺構中には、人頭大以下の石および炭化物を含む。遺物は、須恵器杯身(79)・土師質土器(78)等が出土した。底には、直径50cm~1.0m程度の小穴があり起伏が激しい。それらが、SK-9を切り込んでいるのかは不明である。小穴のひとつSK-9 P-1(直径1.2m、深さ20cm)は、穴の底付近に厚さ5~8cm程度の炭化物層が確認され、骨片・植物種子・炭化した纖維(?)が出土した(写真図版14)。また、穴の底の拳大の石の上から、「熙寧元寶」「不明」の2枚の銅錢が重なって出土し、穴の上面付近からは土師質土器(80)が出土している。骨片が人骨かどうかは不明だが火葬墓の可能性がある。

SK-12 (第19図・写真図版6)

長軸7.3m、短軸5.4m、深さ25cm、不整形・大型の土坑である。本調査区中最大規模の土坑で、SK-90・88と似る。遺構中には直径20~40cm程度の石が多くみられた。また、炭化物が多く出土し、特に、南西部の壁際には焼土・炭化物が少量ではあるがまとまってみられた。遺物は、珠洲片口鉢(90・91)・土師質土器(86~89・92・93)等が焼土付近から比較的多く出土した。当初、住居跡・作業場跡の可能性も考えたが、SK-8同様極め手を欠く。

SK-14 (第21図・写真図版6)

長軸4.0m、短軸3.7m、深さ35cm、方形・大型の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底はほぼ平坦だが、縁辺部に溝状の凹みがみられる。また、覆土中には直径20cm程度の石がみられた。遺物は、土師質土器(94~100)・土師器甕(101)が出土した。

SK-18 (第19図・写真図版6)

長軸4.7m、短軸2.7m、深さ40cm、梢円形・大型の土坑である。遺構中には大小の石が多くみられ、覆土も人為的に埋めたようである。覆土に灰褐色砂質土が見られ、後世における擾乱の可能性がある。出土遺物はない。

SK-20 (第18図・写真図版6)

長軸4.4m、短軸3.5m、深さ50cm、梢円形・大型の土坑である。遺物の出土もなく、土層も単純である。底部には拳大から人頭大までの石がみられたほか、北縁には長梢円形の石(長軸30cm程度)が立っていた。

SK-32 (第19図・写真図版6)

東側半分が調査区外に延びるが、およそ長軸・短軸ともに4.5m程度、深さ75cm、方形・大型の土坑である。また2箇2間の覆屋を想像する。焼土は認められなかったが、長さ2~4cm程度の炭化物・被熱した円礫・破碎繭が多く出土した。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底はほぼ平坦である。遺物は、珠洲片口鉢(114)・越前甕(115)・土師質土器(111・112)・白磁甕(113)がある。類似したものにSK-4があり、炭化物はさほど多くないが、被熱した円礫・破碎繭が大数に出土した。遺物は、珠洲甕(72)・同片口鉢(74・75)・土師質土器・砥石(73)が出土した。

SK-33 (第20図)

長軸1.1m、短軸1.0m、深さ45cm、円形・小型の土坑である。覆土に若干の焼土・炭化物がみられる。覆土中から「天祐通寶」1枚と土師質土器数個体(110)が出土した。また、上面からも土師質土器が出土している。骨は確認できなかったがSK-9 P-1同様、火葬墓の可能性がある。

SK-34 (第20図)

長軸・短軸ともに1.0m、深さ25cm、円形・小型の土坑である。SK-33の南側に土坑を1つ挟んで位置する。その

土坑は、SK-33は切られるが、SK-34と同一の覆土が入り、切り合いは不明である。上層に焼土と炭化物の互層が厚さ約15cm程度見られ、被焼した円錐・土師質土器が出土した。

#### SK-37・38・106・107 (第19図)

平面形に円形と方形の差はあるが、長軸・短軸もしくは直径1.3~1.5m、深さ45~60cmの中型の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、土層は単純である。SK-107がSK-106を切るかは切り合い関係はないが、類似した形態、遺物の出土状況を見せる。同様の土坑には、SK-33・63・64・1001・1002・1003等がある。1001~1003は、第2文化層掘り下げ時点で検出されたが、遺構中からは、中世の遺物が出土した。遺物は、いずれも土師質土器 (116~119・179~182・191) が出土している。

#### SK-54・79 (第20図上)

SK-54は、長軸60cm、短軸50cm、深さ20cm、円形・小型の土坑である。大・小の炭化物を含み、人為的に埋められたと考える。SK-79は長軸2.0m、短軸1.1m、深さ40cm、椭円形・中型の土坑でSK-54を切る。出土遺物はない。

#### SK-69 (第20図下)

長軸・短軸ともに1.5m、深さ45cm、方形・中型の土坑である。土坑の東側は不明だが、1間1間の覆屋を想像する。覆土から比較的多くの炭化物が出土した。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底はほぼ平坦である。出土遺物はない。

#### SK-81

長軸2.5m、短軸1.1m、深さ10cm、長方形・中型の土坑である。SB-8に付属すると考える。遺物はない。

#### SK-85・86 (第21図)

ともに長軸2.2m、短軸1.5m、深さはSK-85が25cm、SK-86が30cmで、不整形・中型の土坑である。上面に焼土・炭化物の互層が厚さ約15cm程度見られる。遺物は、SK-85には土師質土器 (121・122)・鉄製品 (123) が、SK-86には土師質土器 (86)・土師器甕 (125) がある。

#### SK-88・90・95 (第21図)

3つの土坑は切り合い関係があり、SK-95が最も古く、SK-90が最も新しい。SK-88・90は調査区外に延びるため、全体の規模は明らかではないが、深さはともに25cm程度で、方形・大型の土坑になる。

SK-88 SK-90同様南半分が調査区外に延びる。SK-95を切り、SK-90・SD-2に切られる。遺構上面には、焼土・貼床状遺構がみられた。遺物はSK-90同様多く、珠洲甕 (136)・同盃 (135)・土師質土器 (120・128~133)・白磁碗 (134)・刀子 (137)・鉄滓等が出土している。

SK-90 南半分が調査区外に延びるもの、当調査区中最大の土坑である。遺構中には、人頭大以下の石が多くみられ、廃棄するときに投げ込んだものと見られる。東側1/3程が一段高くなり、土坑内にやや歪むが2間2間以上の柱穴が巡る。仮に、これを近年まで各地でみられた堅穴住居(主に作業場)・あなぐらであるとすると、南北棟の建物が考えられる。民俗例では、同規模のものが山仕事や冬期間の作業小屋として使われており、床面は40~70cm程度掘込まれる[川島1992]。SK-90は、遺構検出面からの深さが20cm前後あり、当時の生活面からは40cm程度掘込まれていたと思われる。珠洲甕 (148・151) 同片口鉢 (149)・土師質土器 (138~141・143~145)・青磁 (142・146・147)・砥石 (150)・鉄滓等多くの遺物が出土した。SB-9に付属する可能性がある。

#### SK-92 (第21図・写真図版6)

長軸3.8m、短軸2.8m、深さ20cm、長方形・大型の土坑である。SB-10に取り込まれる。北側が一段高くなっている。底から5cm程度のところに断片的ながら炭化物の層が入るが、その上下の土に差は認められない。遺物も、炭化物層とほぼ同レベルのところから多く出土している。遺物は豊富にあり、珠洲甕 (152・155・158)・土師質土器 (153・154・156・157・164~171)・鉄製品 (159~163) 等がある。

#### SK-94 (第20図下)

一边1.4m、深さ35cm、方形・中型の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底はほぼ平坦である。SB-10に付属する。覆土には炭化物粒が含まれるが、遺物はなく、性格は不明である。ただし、遺構上面からは、土師質土器が出土している。

#### (4) 溝

溝はすべて中世段階の溝である。SD-7・16以外はいずれも細く、比較的浅い溝である。

#### SD-7 (第18図)

調査区の北東部端にわずかにかかる。幅2.7m、深さ40cmの溝である。南北に流れていたものが調査区内で直角に曲がり東に流れれる。屈曲部分には、拳大から人頭大の石が壠状に積み上げられている。同様の遺構は、SD-16においても見られる。遺物は極めて乏しく、須恵器壺胴部片(57)が1片出土したのみである。

#### SD-10・17・18 (第20図下)

調査区の中央南において確認され、それぞれが南北にはば並行に流れ、切り合い関係は無い。SD-10は、南西集石を切り、集石の北側で東に直角に曲がる。SD-18は、SB-10に切られる。検出状況・切り合い等から、3条の溝は一番東のSD-18が最も古く、徐々に西へと移動していったものと考える。これらの溝は建物に伴い、建物の建て替え等によって移動したものと考える。これらの溝からの出土遺物はない。

#### SD-16 (第20図下)

調査区の中央南において確認され、南西集石を切る。西へコ字状に張り出しながら南北方向に流れ、幅1.0~2.0m以上、深さ30~40cmを測る。SD-7同様、屈曲部分に壠状に石が積み上げられ、その南側において溝の幅が広くなる。このことから、この施設は水を塞き止めるためのものであることが分かる。遺物も、珠洲(58・61・65)・八尾(62・64)・鉄製品(60)等が豊富に出土している。この溝は、SD-17・18・SB-9・10を切り、建物と直接関係はない。しかし、遺物が多く、溝の南側に浅い平坦面をもっており、洗い場・水汲み場など生活に密接に関連した場所と考える。

その他の溝は、調査区の東半分で南北・東西方向にそれぞれ数条ずつ見られた。いずれも覆土中に古代・中世の遺物の出土を見る。

#### (5) 集石 (第22図・写真図版5)

集石としたものは、元々は地山の礫層の露頭部分である。しかし、中世以降人の手が加わっていると判断した中央集石と古代に集石が行われたと判断した南西集石の2つである。これらは、石捨て場的な場所と判断したい。

中央集石は、中世の幾つもの遺構が切り合っている。中世においては、SB-1・2・7・8がかかっている。そして、これらの建物の柱穴を覆うように石が堆積しており、須恵器杯身(192)・珠洲(198・199)・砥石(200)等がその中から出土した。

南西集石は、SD-10・16に切られる。上から、1層 人頭大以下の石、2層 人頭大以下の石と黒褐色砂、3層 黄褐色粗砂、地山という堆積をする。1層上層部からは、土師質土器・瀬戸の壺(196)・壺(197)が出土しているが、その下層の2層までは須恵器杯身(21・193・194)・同壺(195)・土師器壺等、古代の遺物のみが出土している。それらは摩滅しておらず、かつSK-1007・1008と接合関係を持つ。

### 3 遺物（第24～28図）

今回の調査では、古代・中世の遺物を中心に、縄文・近世の遺物も若干出土した。器種分類は、古倉B遺跡の分類（第31図）に従った。

#### （1）古代の遺物

主に調査区の南半分において出土し、特に分布が濃密であったのが、第23図のⅡ・Ⅲ付近及び調査区南東部である。遺構は第23図Ⅱ及びⅢ付近で確認された。Ⅲの部分は西に向かって緩やかに傾斜する谷地形の肩部にあたる。

A 瓢箪器：杯蓋、杯A、杯B、壺、甕がある。

杯蓋 2・250は3類に、1・15・43は4類に、10・249は5類にそれぞれ分類できる。250は、4類の器高が高いものである。口径は、43の12.0cmから10の18.0cmまでバラエティーに富む。249は、内面に墨痕がある転用甕である。1は内面が摩滅しており、墨痕はないが転用甕の可能性がある。1・2・250は、頂部はヘラケズリ後ナデを施し、壺部から内側にかけてロクロナデを施す。15は、内面天井部を除いてすべてロクロナデである。

杯身 杯Aは、16・215は1類に、3・4・19・21・22は3類に分類できる。また、杯Bは、45・193・255は1類に、その他は5を3類の小型品とした以外は2類である。口径は、5の10.0cmから18の13.6cmまであるが、12.0cm前後のものが最も多い。104は、底部からの立ち上がりが弱いが2類に含めた。214は、口縁外間に墨痕がある。また、16・255は内面がツルツルになっており、転用甕の可能性がある。さらに、252は、内面に漆と思われる付着物がみられる。調整方法はいずれも、底部外面はヘラケズリの後ナデ、その他の内外面にはロクロナデを施す。

壺 6は、胴部と高台の破片である。胴部片は、焼き彫れがひどい。257・258は、小型の壺の肩部と底部である。

甕 出土数は少なくいずれも胴部小片である。

B 土師器：壺、小型壺、鍋、碗がある。

壺 26がB1類、13・23・27がB2類、14がB3類である。口径は、いずれも20.0cm前後、器高は、27で31.5cmを測る。調整方法を見てみると、14は、内外面上半部はヨコナデ、面下半部はタキを施すが、その他は、内外面上半部はヨコナデ、内外下面下半部は縦方向のヘラケズリを施す。

小型壺 8・9・12・20・25が1類、7・11・49は2類である。口径は、20の10.0cmから25の14.2cmまであるが、13.0cm前後のものが多い。器高は、12.0cm前後のものが多い。調整方法は上部に内外面ともヨコナデを施すが、下部はヨコナデ・ヘラケズリ・カキメ・タキ等のものがみられる。いずれも、内面にススが付着する。20・49の外縁は、長期間熱を受け剥離が激しい。同様のものは、他に数片見られた。

鍋 17は内面黒色処理された、碗4類である。口径13.8cm、器高5.0cmを測る。底部から丸みを持って立ち上がり、II級縛部をわずかにつまみ上げる。底部は回転ヘラ切りで、内外面に丁寧なヘラミガキを施し、内面には1mm程度の幅でヘラによる暗文がある。底部の暗文は、直径1cm程度の円を3重の螺旋状に施すが、極めて見にくく岡化出来なかった。体部の暗文は、口縁部直下から底部に向けて幅5～8mmで放射線状に施す。長岡杉林遺跡〔富山市教委1987〕で、同様の暗文を持つ8世紀初頭の土師器柄が出土しているが、黒色処理は行われてない。

鍋 188は2類に分類され、口径26.0cmを測る。口縁部はヨコナデ、下部はカキメを施す。

#### （2）中世の遺物

中世の遺物は、調査区の全域で出土したが、その多くは中央部から南にかけて集中していた。第23図のⅠは、3棟の掘立柱建物と床面が確認されたところで、暗褐色砂質土層（中世生活面）の堆積が厚く、特に遺物量が多かった。

A 土師質土器：ロクロ土師器と非ロクロ土師器がある。

ロクロ土師器 底部の形態には、264のように高い高台を持つものと、その他のように高台を持たないものがある。

178は、高い高台を持つと思われる。また、図示していないが、口径4.5cm、器高1.4cm、底径3.5cm、底部糸切りで短く口縁を立ち上げるものがある。これらは、12世紀後半に位置づけられる。非クロコロ土師器 調整方法には1段ナデのものと2段ナデのものがあり、それぞれに口縁端部を面取りするものがある。ただし、2段ナデのものは少ない。また、口径は、7~8.0cmのもの、10.0cm前後のもの、12~13.0cmのもの、それ以上のものがあり、それぞれ深いものと浅いもののがみられる。口径10.0cm前後のものは、一般には余り見られない。また、具体的な数値はないが、胎土が白いものが目立ち、1段ナデで口縁端部を外反させずにつまみ上げるものが多い。66~68・107・117・120・141・211・261~262等がこれにあたる。また、110・179~182・261~263等は、1段ナデでやや肥厚した口縁端部をつまみ上げ、やや外反させるものである。これらは、SK-106・107・187・1001など円形または方形で、一定の深さを持つ土坑内及び周辺より出土しており、16世紀前半に位置づけられる。

B 珠洲：壺、壺、片口鉢がある。編年は、吉岡編年による [吉岡1989]。

壺 脇部片が多く、時期決定が出来る口縁部片は少ない。しかし、I~II期のものが多く、若干III期のもののが混ざる。234は、生焼けである。胎土に、海綿骨針状のものがみられる。

壺 233は、口径12.0cm、器高20.4cmを測る。肩部から脇下部にかけて、1単位12条以上の櫛目文を施す。類似するものは他に數片ある。II期に属する。

片口鉢 I期の新しい段階からII期にかけての小型品が多く (70・109・220)、III期・IV期のもの (75・267) が若干混ざる。61・65・71・103は生焼けである。小型品はオロシメが入らず、270を除いてオロシメは直線的である。

C. 陶器系陶器：越前壺・八尾壺及び片口鉢がある。

越前壺 脇部片1片のみ (115) である。

八尾壺 口縁部小片が1点のみ (236) 出土した。「N」字状口縁をもち、複合口縁端部が肥厚し直立する。第2群要A1タイプ [酒井1990] にあたる。

八尾片口鉢 50・64・268は同一個体と思われる。脇部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部外面に面をとる。オロシメは5条1単位で巴状に弧を描く。オロシメの入った片口鉢は、類例が少なく、京ヶ峰窯で数片見られる程度である [八尾町教委1985]。しかし、これらはいずれも直線的で粗いものである。

D 磁器：青磁、白磁、瀬戸、伊万里、唐津等がある。

青磁 龍泉窯のものと思われる。12世紀後半以降のものと14世紀以降のものがある。142・146・147・185・245が、古い段階のものにあたる。

(青) 白磁 134は楕、37は直である。134は、口縁端部口禿のものである。13世紀後半以降に位置づけられる。37は、体部下部及び底部には施釉されない。134は壺の肩部、280は青白磁の合子蓋である。

瀬戸 196は小壺の蓋である。草文状のスタンプ文が施され、外側のみに灰釉がかかる。279は茶褐色の釉がかかった天目茶碗である。これらは、15・16世紀頃のものと思われる。

その他 212・275・277・278・281は伊万里、243は唐津である。その他近世陶磁器は、用水跡より多く出土した。青磁・白磁・瀬戸の出土地点を見てみると、そのほとんどが南側集中区 (第23図I) 内及び周辺より出土している。

E 金属製品：銭貨、釘、刀子・鉄滓、板状鉄製品等がある。

292は「天祐通寶」、293は「熙寧元寶」である。137の刀子は、X線写真で、目釘穴が確認された。また、282の不明鉄製品には、上部左に目釘穴が確認された。161は両端が尖り、ヤスの可能性を考える。鉄滓は、SK-88・90内及びその周辺で多く出土した。

F 石製品：砥石 (73・200・248・284) がある。

よく使用され、柱状を呈するもの (248・284) と1面もしくは2面程度を使用する不整形のもの (73・200) がある。

G その他の遺物：縄文時代の小型磨製石斧（172）、ビエス・エスキュー（287）、剝片（285・286）がある。

磨製石斧は、蛇文岩製で、刃部再生が頻繁に行われている。285の剝片には二次加工がみられ、285は鉄石英製、286・287は玉髓製である。

古代の遺物は、おおよそ8世紀後半から9世紀初めに位置づけられる。また、中世の遺物は、土師質土器を見ると、12世紀後半から14世紀前半までのものと16世紀以降のものとがみられる。珠洲は、Ⅰ期の新しい段階からからⅡ期にかけてとⅢ期からⅣ期のものがみられる。また、青磁・白磁・青白磁は、12世紀後半から13世紀後半にかけてのものと、14世紀中頃以降のものがみられる。

#### 4 総まとめ

##### 掘立柱建物について

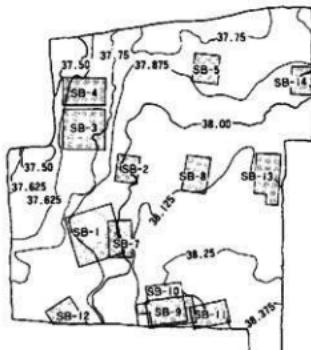
ここでは、当調査区で確認された13棟の中世掘立柱建物について若干の考察を行う。前述の通り、当調査区の建物は「間面法」に沿って考えた。表2の南中田D遺跡以下の建物についても同様の考え方を沿って再考したため、既に刊行済みの報告書【富山県埋文センター1990・91】の記載と異なる点があることを断つておく。

まず、建物規模・立地によって建物を見てみると、庇込み面積で100m<sup>2</sup>を越す大規模建物は、SB-1のみである。ただし、前述のとおり、SB-3・4（以下、SB-3Aとする）が屋根を繋げた一つの建物として存在していたと仮定すると、面積117.1m<sup>2</sup>の大規模建物になる。庇込み面積で50m<sup>2</sup>以上100m<sup>2</sup>未満の中規模建物は、SB-9・10及びSB-3の3棟である。これらはSB-9・10を除いて中央集石の西側に位置する。これに対し、小規模建物（庇込み面積50m<sup>2</sup>未満）は、主に調査区の北東部に位置する。溝・土坑・柱穴状ピット等が多くみられる、中央から南東部にかけては掘立柱建物は確認できない。調査区は、中央集石の東側で高く、西側に向かって緩やかに傾斜する。つまり、小規模建物が高い所に位置し、大規模建物が低い所に位置する。

さらに、全体の地形を踏まえた上で、等高線と掘立柱建物の棟方向を見てみる。すると、SB-1・3・4・12は、それぞれ集石の西側に沿ってあり、等高線の方向に沿う。また、東西棟であるSB-9・11も、等高線の方向に沿う（第12図）。棟方向に10~90°程度差があるが、同時期のものとして良いと考える。

次に、当調査区で確認された建物の性格について考えてみる。黒田日出夫氏によると、中世の資材帳により、以下のことが言える。大規模経営の農民は、農具等は余り持たず、数頭の牛・馬を持ち、彼らに従属する小農民に耕作させていた。中規模経営の一般的な名主農民は、馬または牛といった役畜と犁・鋤等の農具、および弓・槍等の武具を持つ。小規模経営の農民は、犁は持てず、鋤・鋤等だけである（黒田1984）。また、廣瀬和雄氏は建物規模・構成等から、以下のように述べている。小規模経営の農民の生活は、小規模な建物が数棟あつたった建物群を構成し、「複合家族」の形態をとり、中規模経営の農民は、50m<sup>2</sup>を前後する中形の家屋に居住し、倉庫を付随させる。そこに住むのは、自立した単婚家族であろうと考えている。さらに、大規模経営の農民になると、傑出した大規模な建物に、中小の建物を付隨させ、裕福な農民と隸属民とが一つの屋敷地に生活していると考えている（広瀬1988）。

このことを踏まえて当調査区の大・中規模建物についてみてみると、建物規模・施設等から、SB-3Aは比較的大規模経営の農民の家屋、SB-9・10は中規模経営の農民の家屋と思われる。また、当調査区のそれぞれの掘立柱建物の位置関係を見てみると、中規模建物に小規模建物



第12図 掘立柱建物と等高線関係図

が伴うと思われるものは、SB-10と11、SB-9とSK-90に伴う建物程度である。前述のとおり、小規模建物は、北東部に多く位置する。これらは一定の間をもって比較的整然と並んでいる。これらが大・中規模建物に付属するのか、また、同時に何棟が存在していたかは明らかでない。しかし、仮に屋敷地が1,600~1,700m<sup>2</sup>程度あると仮定するならば、溝・柵列等の施設は確認できないがSB-3・4を主屋に、SB-2・5・8・13・14がそれに伴う付属建物と考えられる。そうしたとき、これらの小規模建物は、従属する小農民の家屋の可能性もある。屋敷地面積は、多少の時期差や地域差があるとしても管見の限りでは、1,500~2,000m<sup>2</sup>程度と思われる。ただし、これはあくまで中規模経営以上の農民についてである。

また、中規模経営以上の農民が、馬・牛を所有していたと思われることから、厩について考えてみる。厩が建物内に取り込まれているのか、独立した建物であったのか。前者の場合、建物に付属する土坑が厩にあたる可能性があり、後者の場合は、小規模建物のうちのいずれかがそれに当たる可能性もあるが、1・2頭の牛馬のためには規模が大きすぎるようと思える。極めて簡単で痕跡が残りにくい程度の建物であった可能性もあり、検討を要する。

SB-3 Aと同じ大規模建物であるSB-1は、4面庇の可能性を考える建物である。4面庇の建物は、これまでの運動公園内遺跡群調査例中では南中田D・南中田A遺跡においてみられ、県下では、じょうべのま遺跡においても確認されている（入善町教委1985）。中でも南中田A遺跡のものは規模も良く似る。

今回の調査区からは、屋敷地1,600~1,700m<sup>2</sup>程度をもつ大規模経営農民家であるSB-3 Aを中心とする建物群と、中規模経営農民家であるSB-9・10とそれに伴う建物と、独立した大規模建物であるSB-1、および調査区中央部から南東部にかけての耕作地からなる集落の一部が想像できる。

次に、建物の上屋構造等を想像しながら間面法に沿って建物を考えると、間尺や柱穴の規模等から明らかに庇と考えられるものと、身舎と区別しにくいものとがみられる。これは、庇部分も普段必要な生活空間として建築当初から意識していたためと考え、梁方向・桁方向とともに身舎と異なった間尺の庇部分は、建物が建った後必要に応じて建て増ししたためと考える。

また、棟持柱（中間柱）の規模が、身舎の他の柱より小さく浅いものが3例、棟持柱（中間柱）が梁方向柱筋の内外にずれるものが4例みられる。前者の建物は、屋根の重みは壁組によって支えられていたか、又首の存在が考えられる。後者の建物は、小屋構造の作り方による差や、壁の作り方による差等が考えられる。

間尺は、8尺のものが最も多く、次に9.5尺のものが多い。しかし、間尺は、同じ建物においてもばらつきがみられる。しかし、身舎の桁行きは、5.6mもしくは7.2m前後のものが多く、同じく梁行きは、4.8(2.4)m前後のものが多い。つまり、規模建物による差が認められないことが分かる。たとえば、SB-3・4が一棟としても、桁行き14.3m(7.2m×2)・梁行き4.8mである。また、身舎面積を見てみても同様のことが言える。さらに、柱穴の規模においても、同様に目立った差は認められない。身舎面積には、ある程度の規格があったと考える。

柱穴の土層観察を行ったのは、6棟(SB-1・2・3・4・5・7)だけである。他のものは建物と認識するのが遅れたため観察し得なかった。6棟だけとはいえ、大・中・小型の各建物を含み一通りの類例は挙げるものと考える。タイプ分けについては前述の通りである。その結果、庇部分はType IIが57%を占め、身舎部分のうち、側柱はType I b・cで50%を占め、棟持柱（中間柱）はType I bが50%を占める。Type I aは、全体の15%程度を占める。Type I aには、建ったまま放置されたのか、地上部分を切って持ち去ったのか両方の可能性がある。また、抜き取りが確実に行われたと見られるType I b・cは、6棟の柱穴84本中（6本は不明）42本である（50%）。つまり、かなりの頻度で建物の建て替えの際にその柱穴を抜き取り、再利用しているといえる。そして、その柱は建物規模に関係なく身舎部分のものが多い。

以上、若干の考察を行ったが、漫談のためと、紙幅の関係上これまでの総合運動公園内遺跡群の調査で確認された掘立柱建物についても十分に検討を加えられず部分的な考察にとどまった。今後別の機会に論じたいと思う。（越前）

## 古代の遺構

## S I 整穴住居跡

遺構番号	遺物他
1005	土師壺 須恵壺・杯蓋・杯身
1006	土師壺

遺構番号	遺物他
1009	須恵杯身
1013	須恵杯蓋・杯身 土師輪身

## SK 土坑

遺構番号	遺物他
1004	須恵杯身 土師壺
1007	須恵杯身

遺構番号	遺物他
1008	須恵杯身 上師壺

## P 柱穴

遺構番号	遺物他
1010	土師壺

## 中世の遺構

## S B 堀建柱建物

番号	遺物他
01	金屬 土師質土器 土 師壺
02	土師
03	土師質土器 土師壺 須恵杯身

番号	遺物他
07	土師壺
09	土師質土器
16	金屬

## SD 溝

番号	遺物他
01	金屬 鉄滓 珠洲片口 鉢 須恵杯身 土師質 土器 土師壺
02	珠洲壺 土師質土器 青磁碗
03	土師質土器 土師壺
05	土師質土器

番号	遺物他
07	須恵壺
09	土師質土器
15	土師壺
16	金屬 須恵壺 珠洲片 口鉢 越前片口鉢 土 師壺

## P 柱穴

番号	遺物他
01	土師質土器
03	土師質上器 土師壺 陶器
04	金屬 土師質土器 陶 器
05	土師質土器 土師壺
06	土師質土器 須恵壺
07	骨
08	土師壺
09	土師壺
10	土師質土器
11	土師質土器 土師壺
12	土師壺
13	土師質土器
15	土師壺 須恵杯蓋・杯身

## 中世の遺構

## SK 土坑

番号	遺物他
01	金屬
02	越前片口鉢 珠洲片口 鉢 土師質土器 上師 壺 灰

番号	遺物他
04	砥石 珠洲片口鉢 灰 土師質土器 土師壺 鐵 滓
06	土師壺

番号	遺物他
08	珠洲片口鉢 土師質土 器
09	土師質土器 土師壺 須恵杯身 灰化木・種 子 灰 骨 鋼錢

番号	遺物他
10	土師壺 土師質土器 陶戸 灰
11	土師壺 土師質土器

番号	遺物他
12	土師壺 土師質土器 珠洲片口鉢 灰
17	土師壺 須恵杯身 灰

番号	遺物他
20	灰

番号	遺物他
21	土師質土器

番号	遺物他
30	土師壺 珠洲片口鉢 珠洲壺

番号	遺物他
32	土師質土器 土師壺 珠洲片口鉢 白磁壺 灰

番号	遺物他
33	土師質土器 銅銭

番号	遺物他
38	土師質土器

番号	遺物他
58	土師壺

番号	遺物他
63	土師質土器

番号	遺物他
64	土師質土器

番号	遺物他
73	土師壺

番号	遺物他
85	金屬 土師質土器 土 師壺 灰

番号	遺物他
86	土師壺

## 中央集石

番号	遺物他
21	須恵杯身

番号	遺物他
22	土師壺

番号	遺物他
23	土師壺

番号	遺物他
24	土師質土器

番号	遺物他
51	陶器

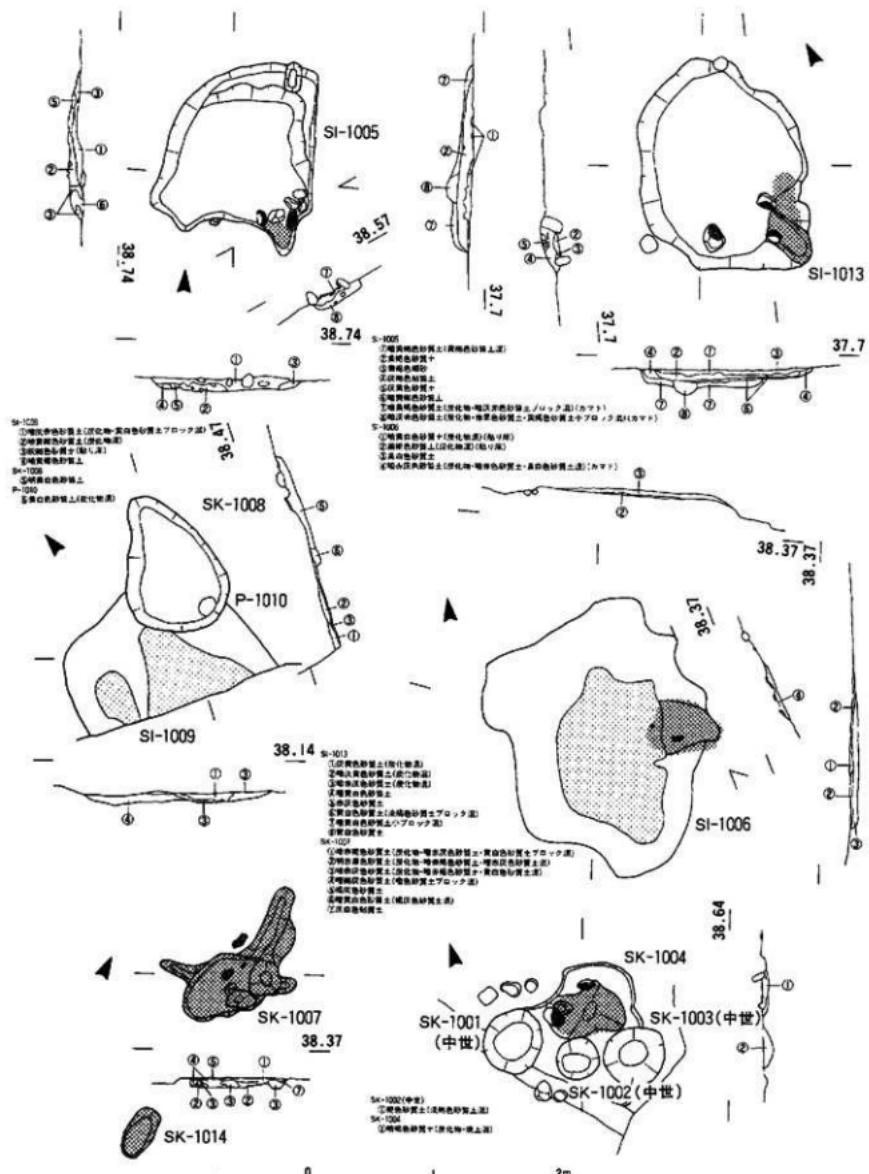
番号	遺物他
54	炭

番号	遺物他
55	炭 青磁碗

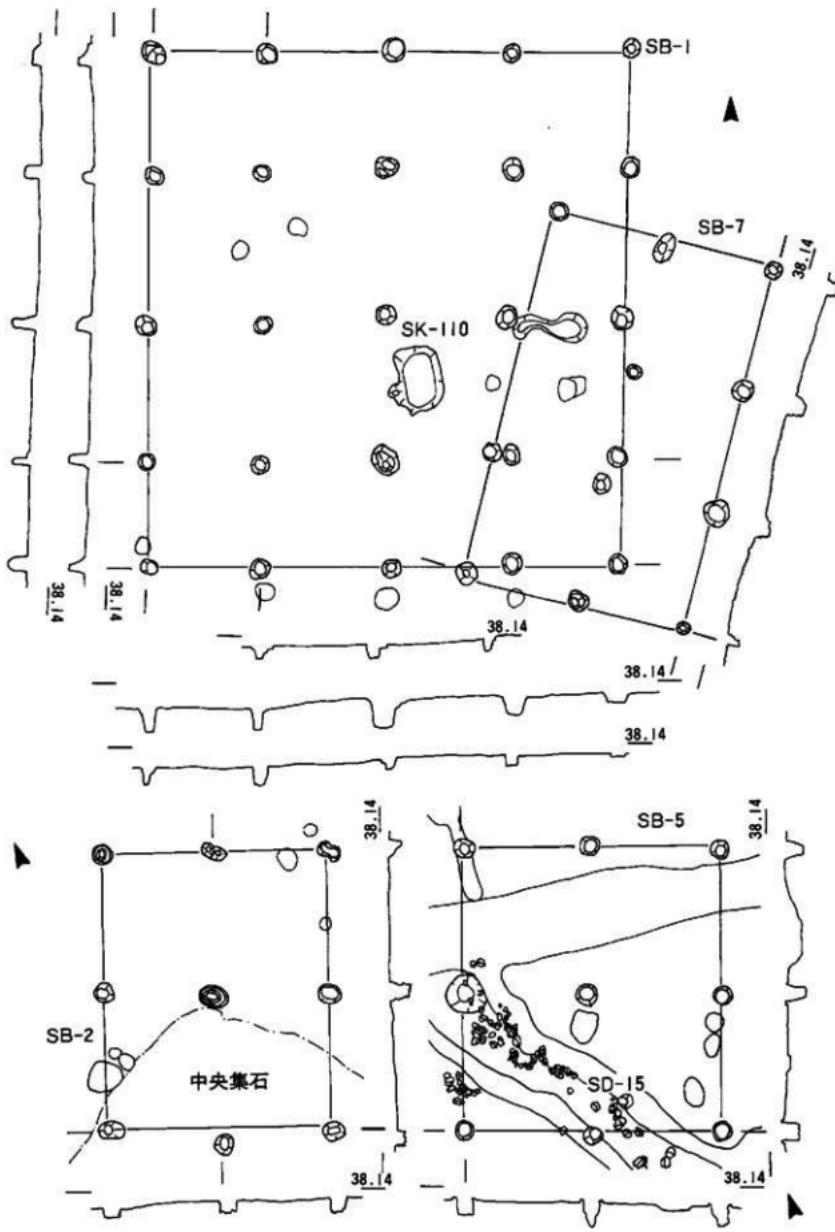
## 南西集石

## 遺物他

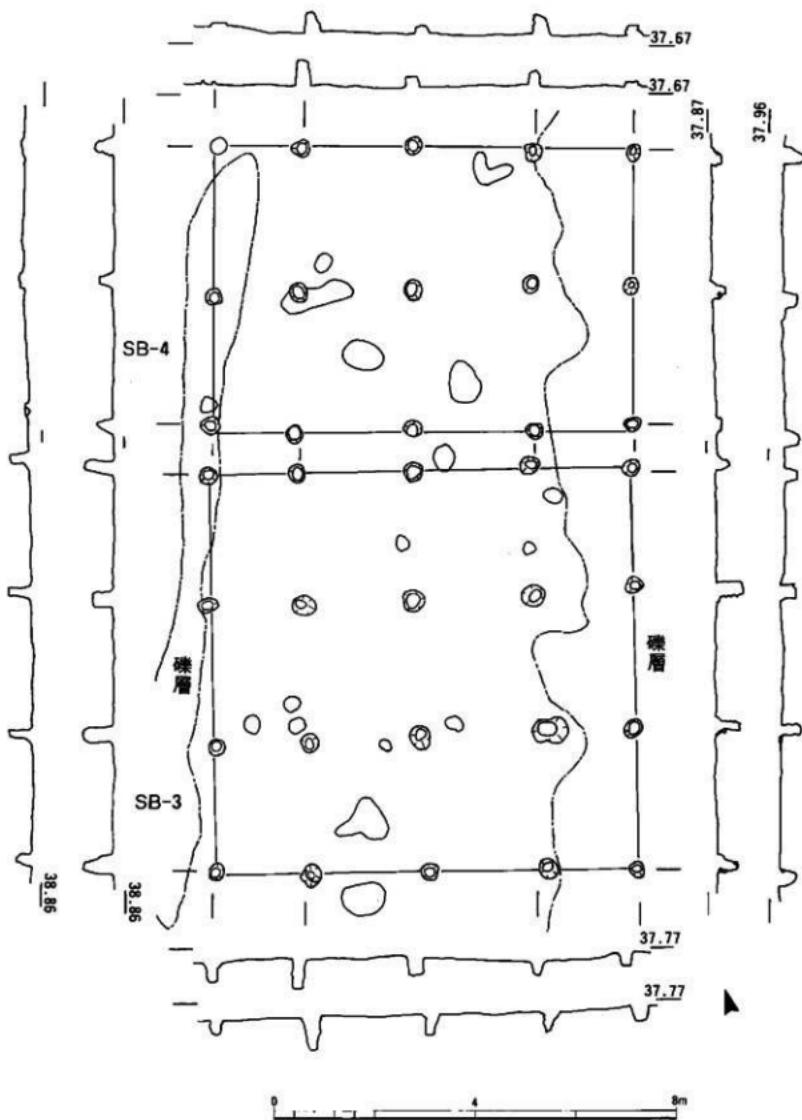
番号	遺物他
須恵杯身・壺 土師壺 陶器	



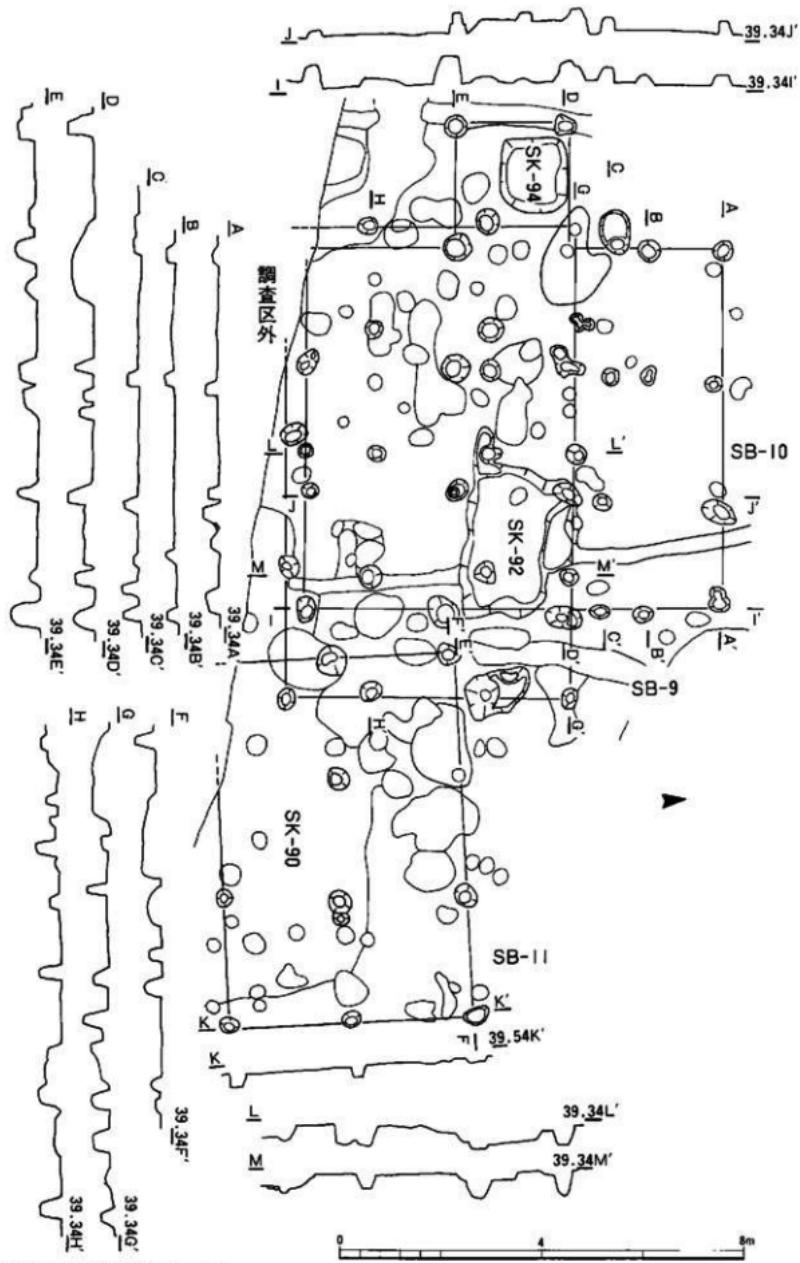
第13図 積穴住居跡・古代土坑 (S=1/40) 0 1 2m



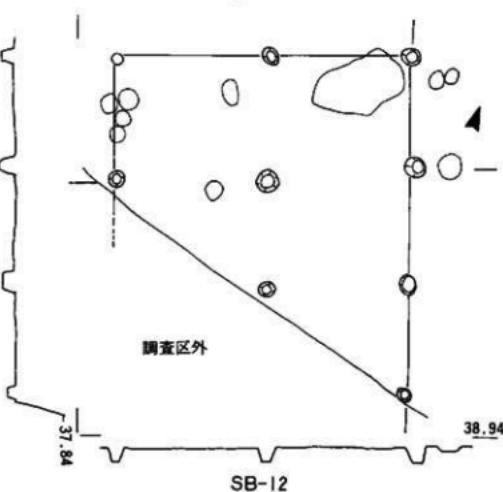
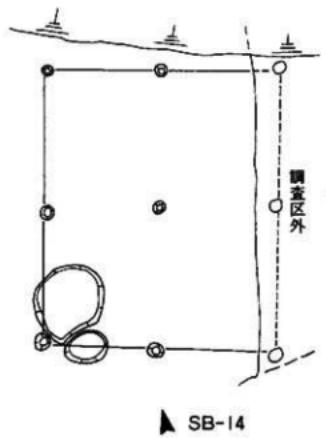
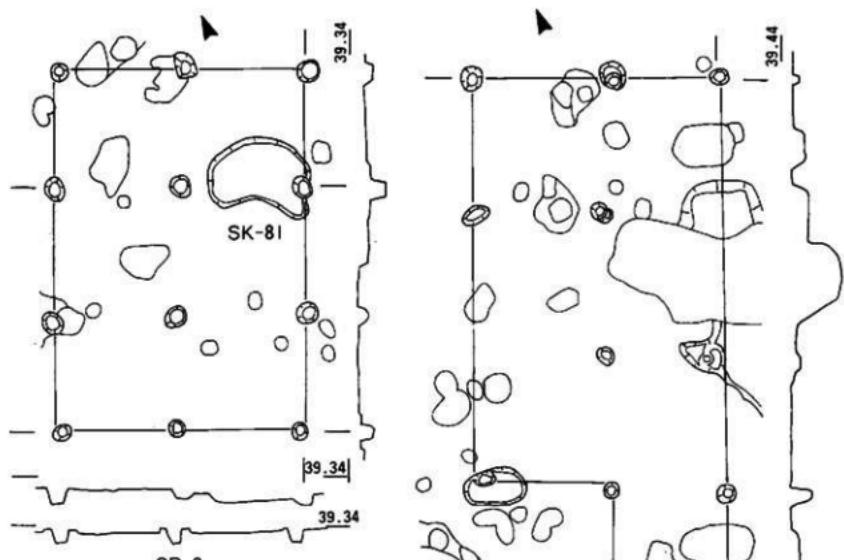
第14図 捶立柱建物(1) (S=1/100)



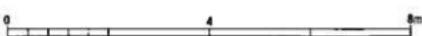
第15図 挖立柱建物(2) (S=1/100)

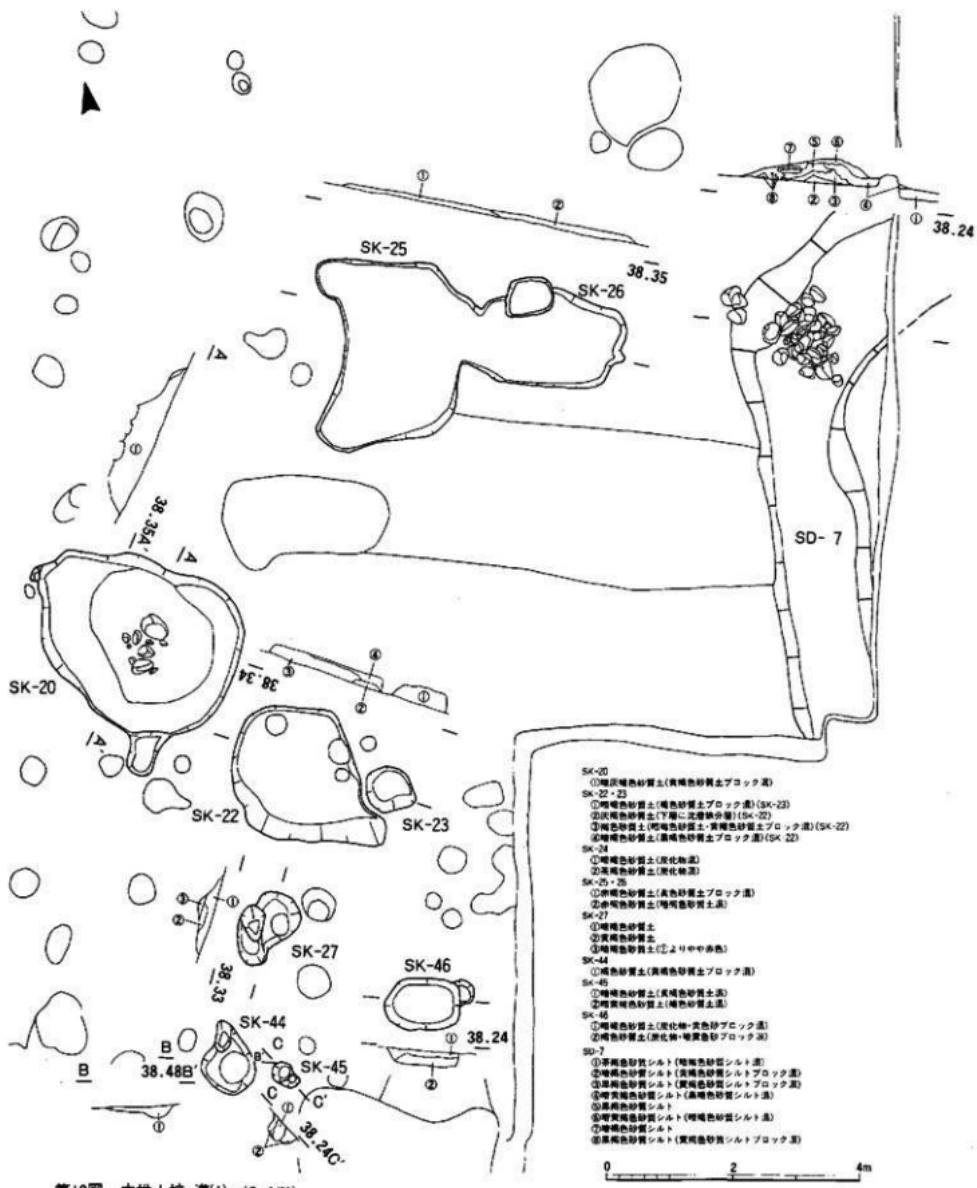


第16図 摩立柱建物(3) (S=1/100)

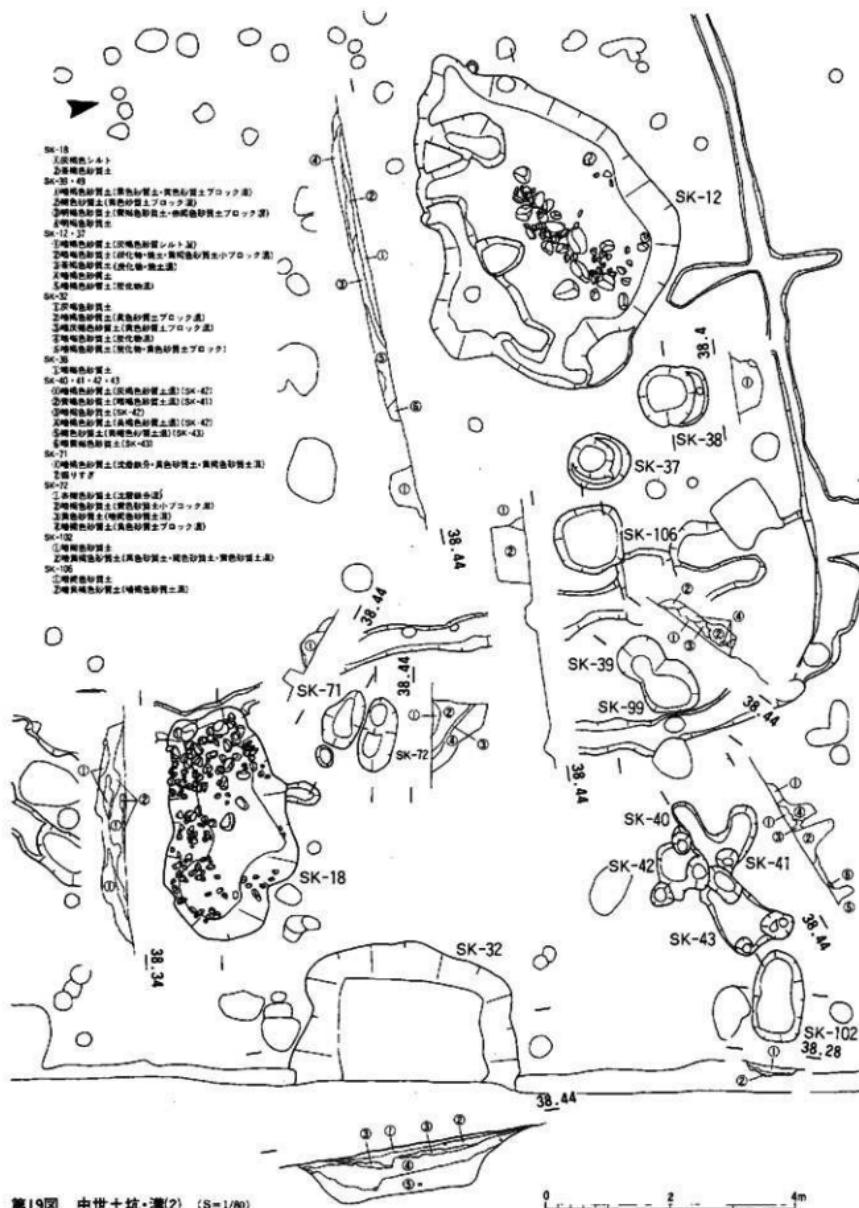


第17図 挿立柱建物(4) (S=1/100)

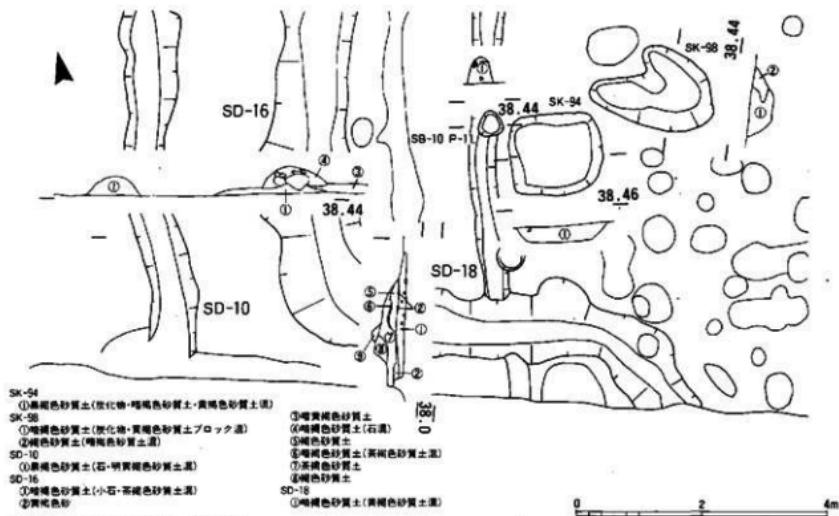
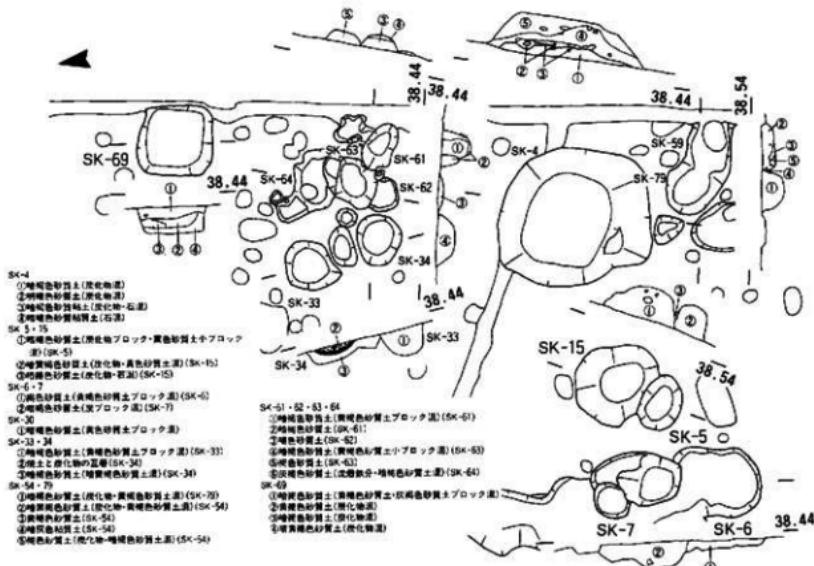




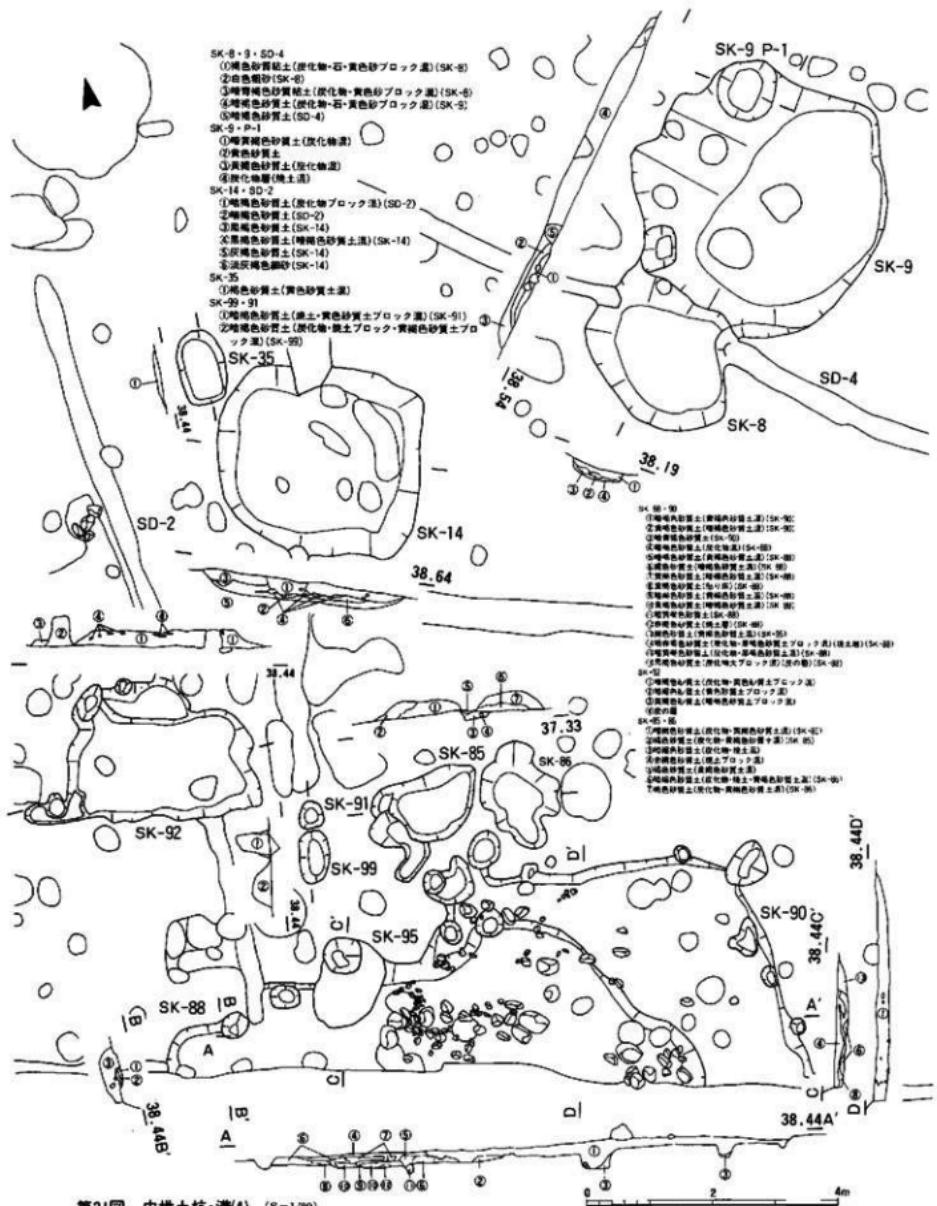
第18図 中世土坑・溝(1) (S=1/80)



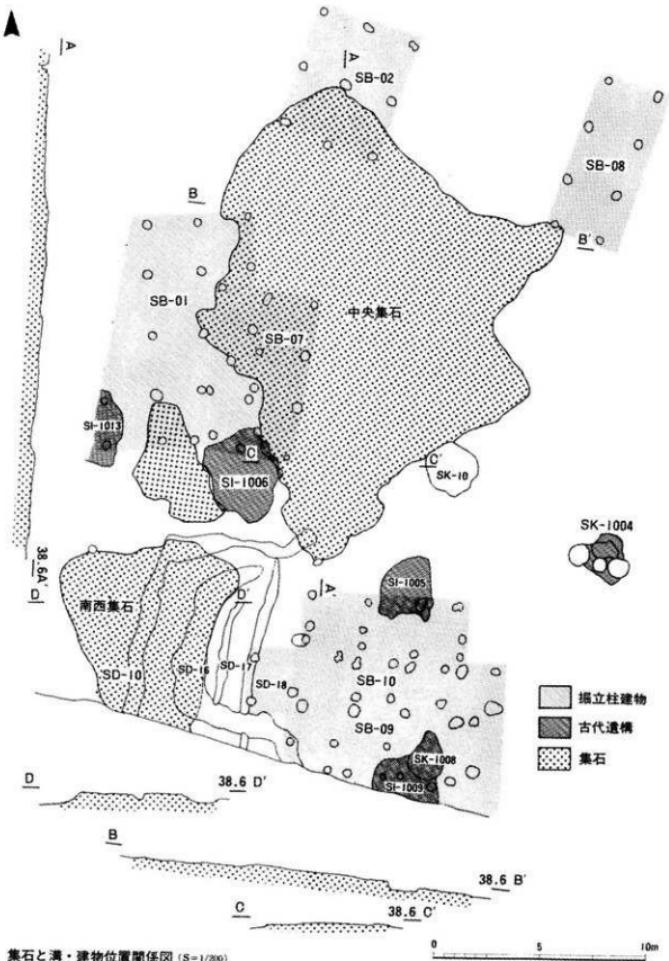
第19圖 由世士抗·濃(?) ( $S=1/80$ )



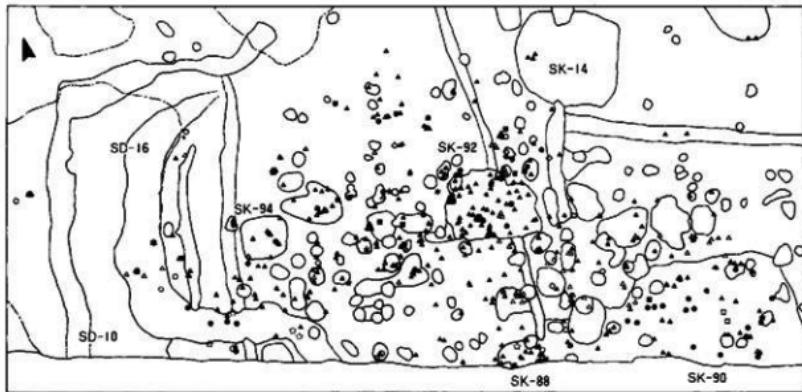
第20図 中世土坑・溝(3) (S=1/80)



第21図 中世土坑・溝(4) (S=1/80)

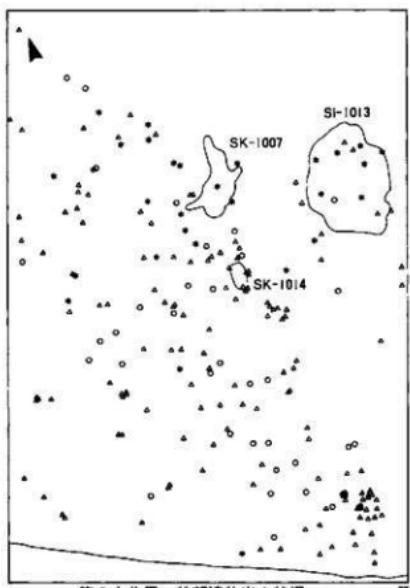


第22図 集石と溝・建物位置関係図 (S=1/200)



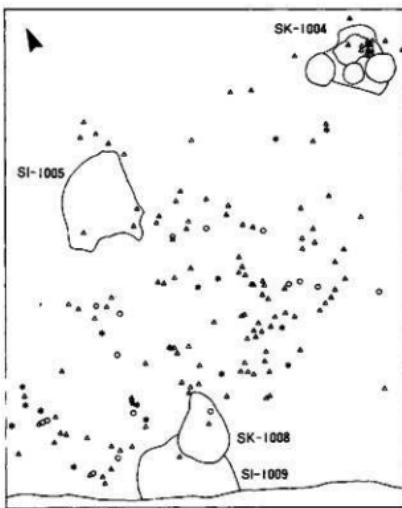
第Ⅰ文化層 南側集中区遺物出土状況

I



第Ⅱ文化層 谷部遺物出土状況

II

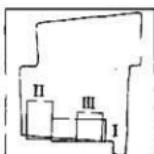


第Ⅱ文化層 南側集中区遺物出土状況

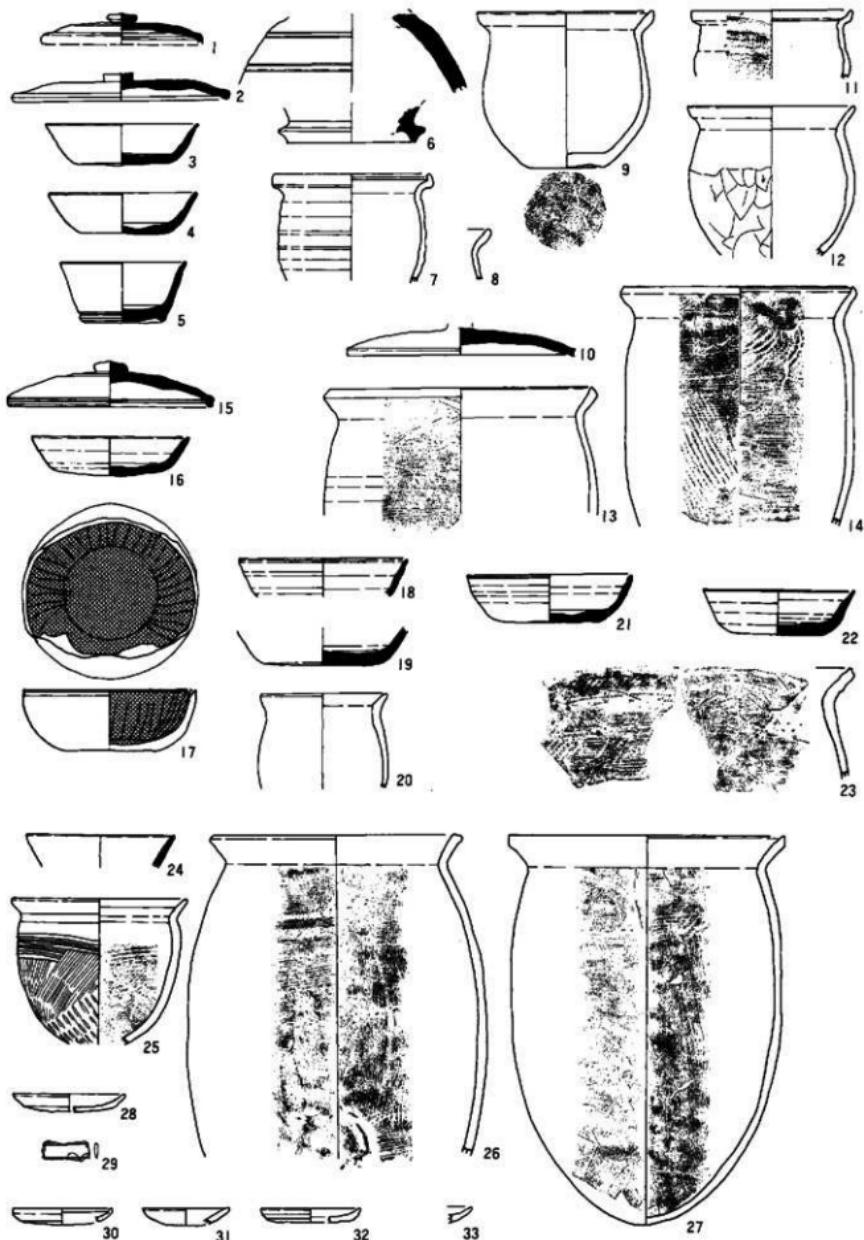
III

- 土器質土器
- 珠州
- 遺器系陶器
- 陶磁器
- 青磁・白磁・青白磁
- 金属製品
- 石製品
- 土器器
- 瓷窯器
- 磷酸物
- その他

0 4 8m

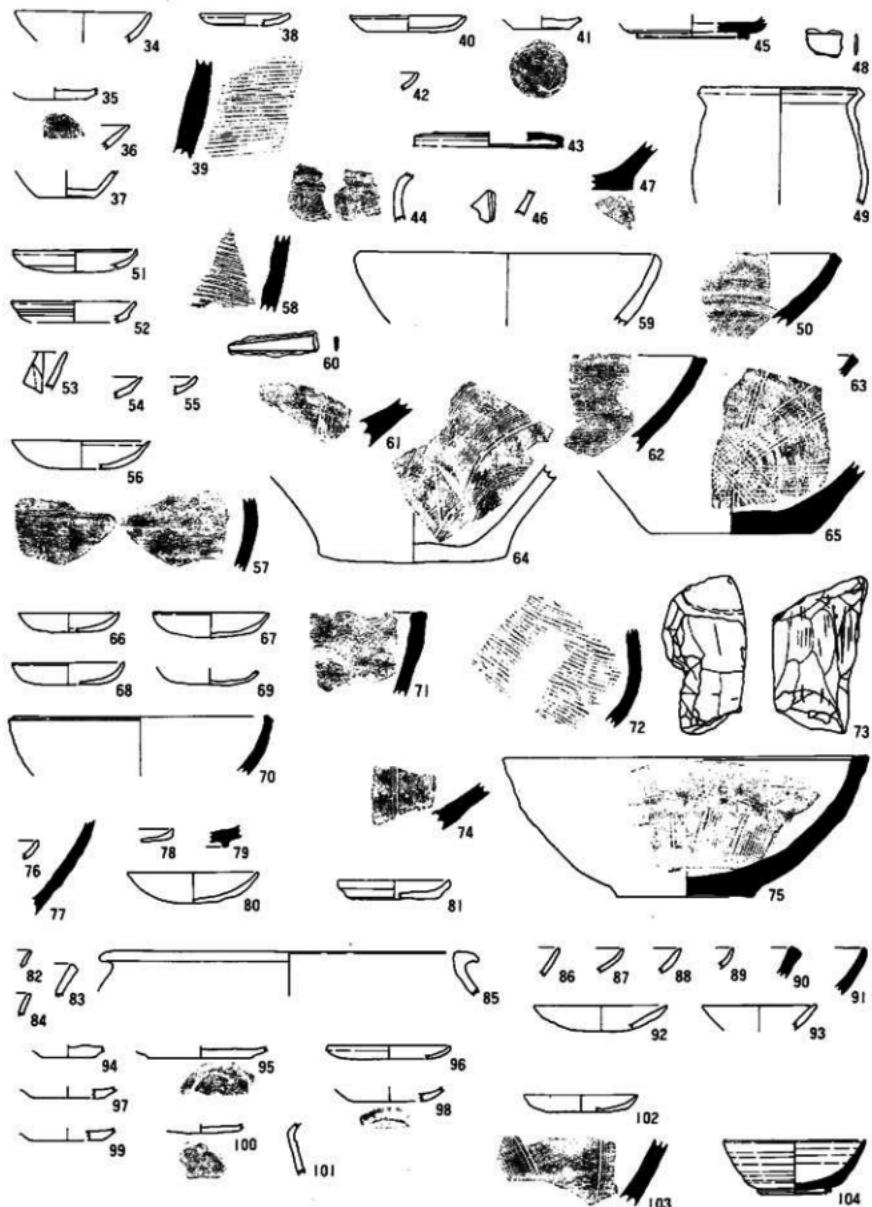


第23図 南側遺物集中区分布図 (S=1/160)



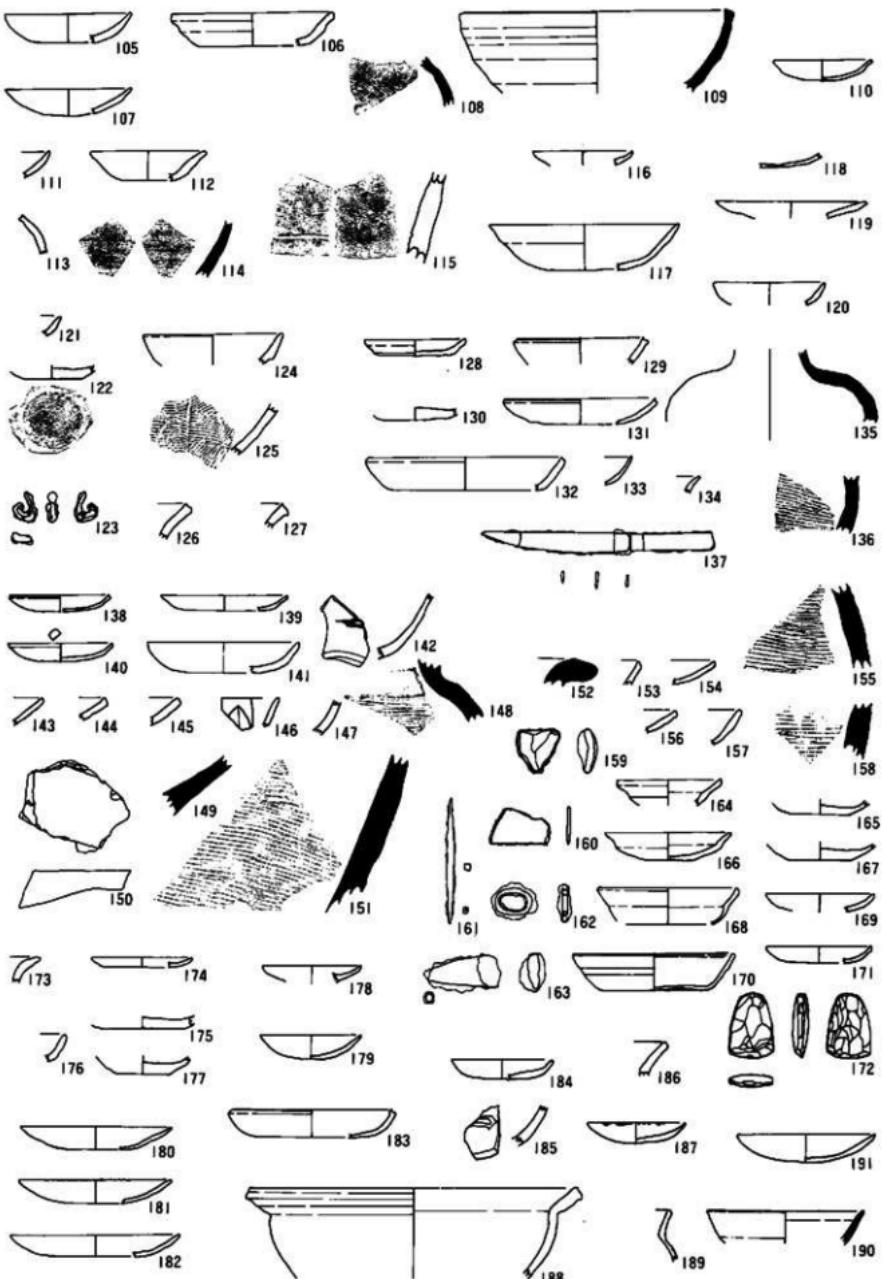
第24図 古代と中世の遺構出土遺物

1-9・10(SI-1005), 11-14(SI-1006), 15-17・22-23(SI-1013), 18-20(SK-1004), 21(SK-1007-南西壁石), 24-27(SK-1008),  
28-29(SB-1), 30-32(SB-3), 33(SB-9)



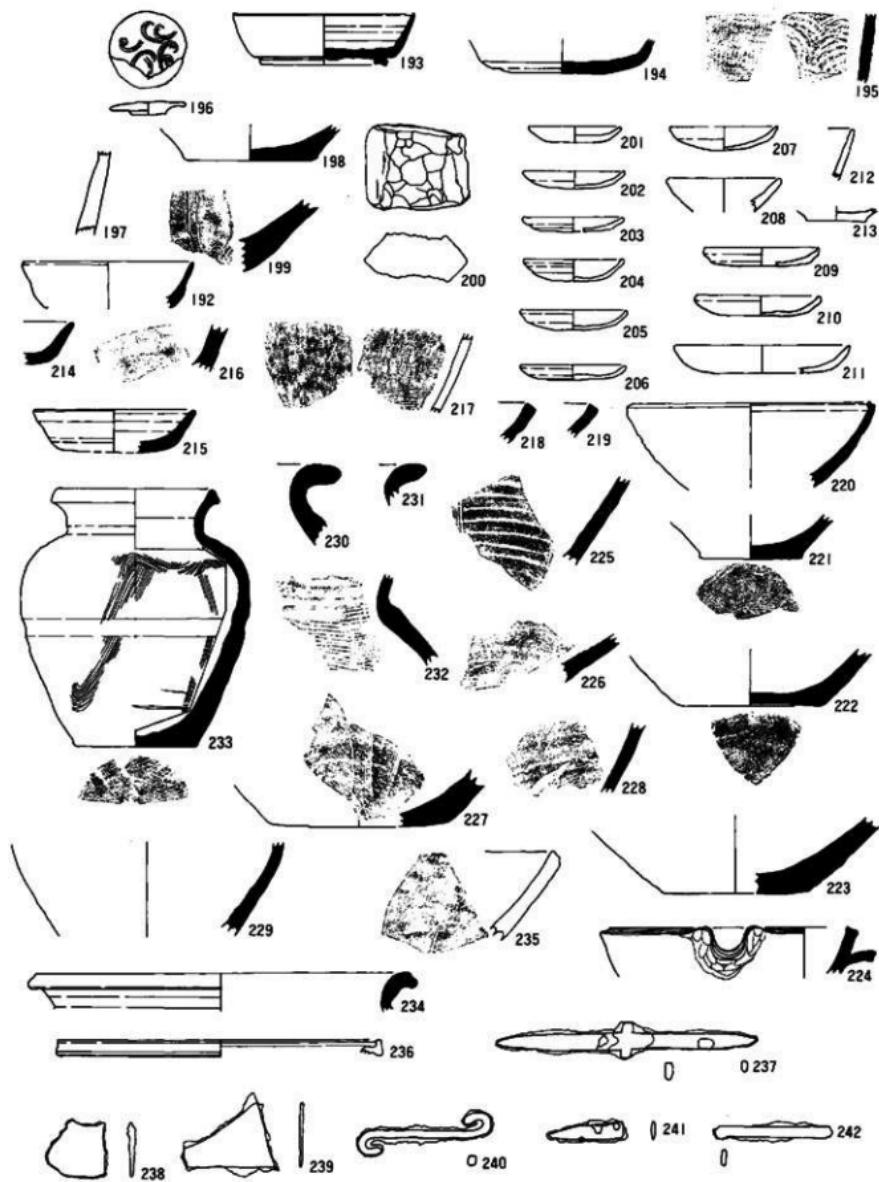
第25図 中世の遺構出土遺物

34(P-3), 35-37(P-4), 38-39(P-6), 40-42(SB-10), 43(SB-11), 44(P-8), 45(P-21), 46(P-54), 47(P-20), 48-50(SD-1), 51-53(SD-2),  
54-55(SD-9), 56(SD-5), 57(SD-7), 58-65(SD-16), 66-71(SK-2), 72-75(SK-4), 76-77(SK-8), 78-80(SK-9), 81(SK-11), 82-85(SK-10),  
86-93(SK-12), 94-101(SK-14), 102-103(SK-16), 104(SK-17)

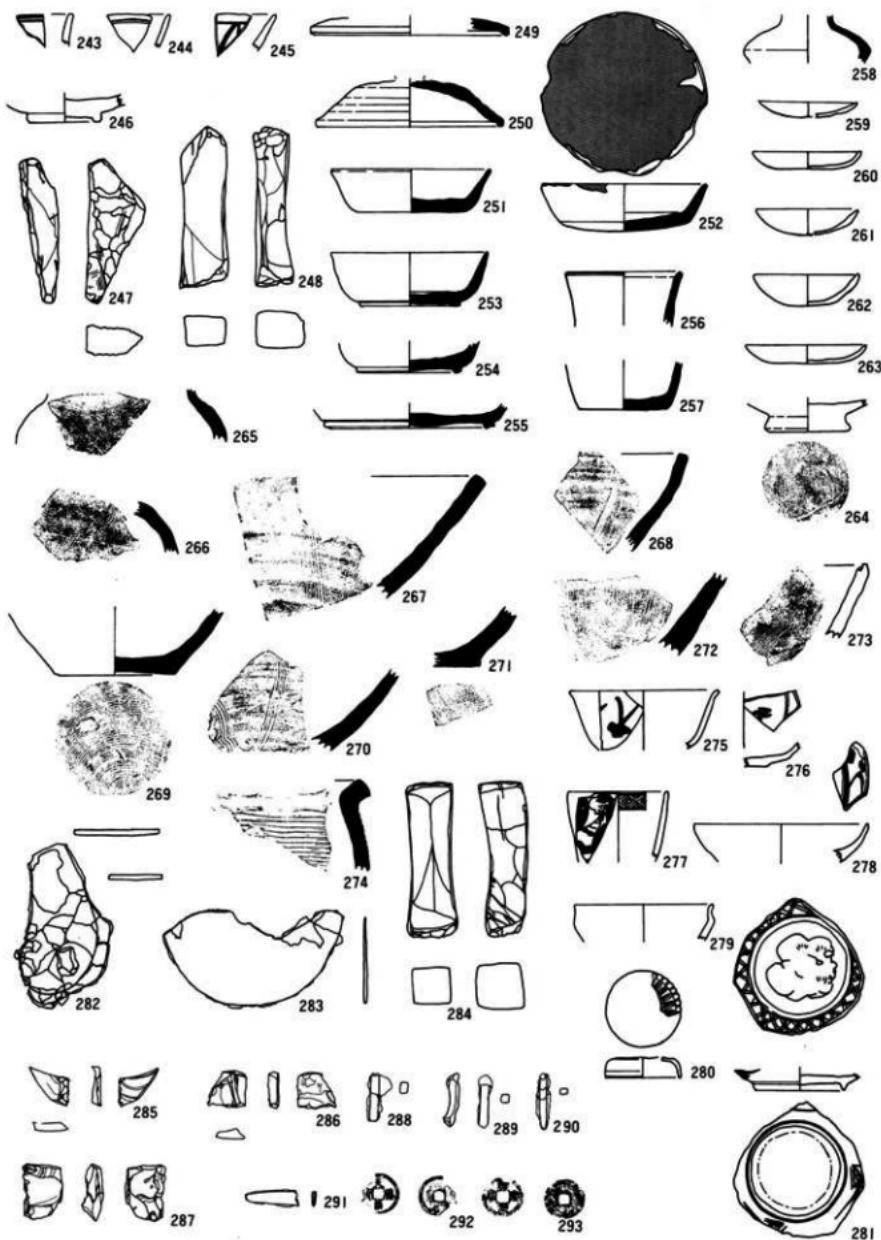


第26図 中世の遺構出土遺物

105~107(SK-21), 108~109(SK-30), 110(SK-33), 111~115(SK-36), 117(SK-63), 118~119(SK-64), 120(SK-65), 121~123(SK-85), 124~125(SK-86),  
126(SK-87), 127(SK-89), 128~137(SK-89), 138~151(SK-90), 152~172(SK-92), 173(SK-93), 174(SK-96), 175~177(SK-97), 178(SK-101),  
179(SK-107), 180~182(SK-106), 183(SK-108), 184~186(SK-110), 186(SK-112), 187(SK-111), 188(SK-114), 189~190(SK-109)



第27図 集石・南側集中区出土遺物 192~196(南側石), 197~200(中央石), 201~242(南側石)



第28図 包含層出土遺物

243~248・285~287・289~290(南窯集中区), 249~281・286~291(XY地), 288(SK-1), 292(SK-991), 293(SK-33), 243~248: 1/4, 285~293: 1/3

## V 吉倉B遺跡

### 1 地形と層序

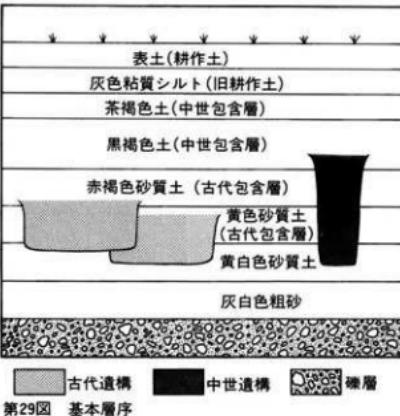
吉倉B遺跡は、富山県総合運動公園建設予定地内の北西に位置し、同遺跡群の中では、最も広範な広がりを見せる遺跡である。扇状地上に立地するこの遺跡は、かつての流路に沿って礫が帶状に堆積している。今年度の調査範囲においても、南西から北東に向けて斜めに礫が堆積している。主な遺構は、この礫部を避けて立地する。

遺跡の層序は、基本的には第29図のとおりである。中世の包含層は中央で薄く東西に厚く堆積し、かつての地形は東西両側が谷状になる微高地であったことが窺える。

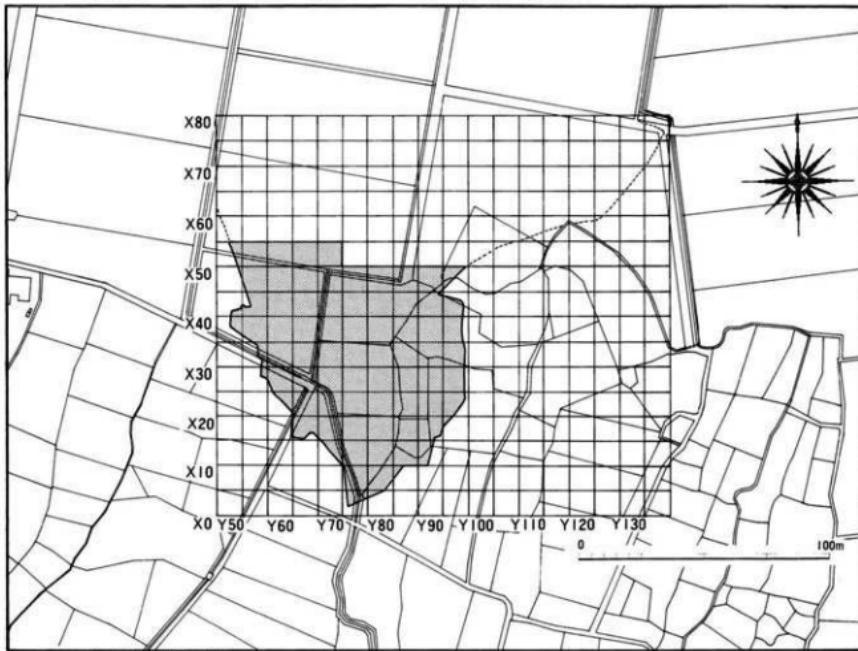
中世遺構は、茶褐色砂質土の上面で検出することができ同時にこの層が古代の包含層となる。なお、中世遺構は、一部黒褐色土中から掘り込む場合もあると思われる。

古代遺構は、新しいものが黄褐色砂質土上面で、古いものはそれを若干掘り下げる段階で検出できる。

(境)



第29図 基本層序



第30図 吉倉B遺跡発掘区割図

## 2 造構

### (1) 古代の概要

古代の造構は、豊穴住居跡25棟、溝・河跡11条、穴約70か所がある。造構の位置は発掘区北西部と南側に分かれるが、いずれも西側にある河跡の縁に沿っている。

造構は、重なりあつてることと出土した土器の特徴から5期に分けられる。始まりは奈良時代後半（8世紀後半）、終わりは平安時代前期（9世紀前半）の約100年間にわたって形成されたものと考えられる。

#### A 豊穴住居跡

豊穴住居跡は南側に21棟が集中してあり、しかもそれらは3棟から4棟が重なりあつていて。

##### S I 1 (第36図・写真図版23)

西側がS I 2と重なり北側がS I 22と重なる。そのため、実際の大きさは不明であるが、南北5.2m東西4.8mの方形で、面積は約25m<sup>2</sup>となるものと考えられる。造構確認面から床面までの深さは約20cmである。主軸方位は北から約50度西にふれている。覆土は黄褐色砂質土で上層はやや茶褐色をしている。床面には南側半分の壁面に沿い幅40cmから1m深さ約10cmの溝があり、中央には厚さ約6cmの黄色土の貼床がある。

また、カマドの焚口付近と周溝内に穴があるが、規則正しい配列ではなく柱穴になるかどうかはわからない。カマドは南東隅部分に焼土・炭化物があり、煙出しが東方を向くカマドであることがわかるが、残りぐあいはよくない。焚口部は径約60cm深さ10cmのくぼみとなっていて、赤褐色に焼けていた。時期は2期である。

##### S I 22 (第36図・写真図版23)

中央が中世の溝S D 3と重なり南側がS I 1と重なり東側がS I 2と重なる。そのため、実際の大きさは不明であるが、おおよそ南北3.5m東西3.5mの方形で、面積は約12m<sup>2</sup>となると考えられる。造構確認面から床面までの深さは約15cmである。主軸方位は北から約85度西にふれている。覆土は褐色砂質土で上層はやや茶褐色をしている。床面には北側と西側に壁面に沿い幅30cmから60cm深さ約10cmの溝がある。壁際に穴があるが、規則正しい配列ではなく柱穴であるかどうかはわからない。床面に焼土・炭化物はなく、カマドの位置は不明であるが、S I 1の南縁上部に径約30cmの焼土があり、これが煙出し先端とすれば、南西隅に南方を向くカマドがあったものと推定される。時期は1期である。

##### S I 2 (第36図・写真図版22-23)

中央が中世の溝S D 3と重なり南側がS I 1と重なり西側がS I 22と重なる。南北3.8m東西4.1mの方形で、面積は約16m<sup>2</sup>である。造構確認面から床面までの深さは約30cmである。主軸方位は北から約80度西にふれている。覆土は上層が茶褐色砂質土、下層が黄褐色砂質土である。床面にはカマド付近を除いたすべての壁面に沿い幅40cm深さ約10cmの溝があり、中央には厚さ約4cmの黄色土の貼床がある。また、カマド付近と壁際に穴がある。四隅にある穴は柱穴の可能性がある。南東隅に焼土・炭化物があり、煙出しが東方を向くカマドがつくられている。カマドは黄褐色砂質土で袖部をつくり、その幅は約50cm高さは25cmである。焚口部は径約70cm深さ10cmで赤く焼けている。時期は3期である。

##### S I 6 (第39図・写真図版25)

北側がS I 7・20と重なる。南北5.6m東西6.6mの方形で、面積は約34m<sup>2</sup>であるが、周溝を除くと約14m<sup>2</sup>となる。造構確認面から床面までの深さは約12cmである。主軸方位は北から約75度西にふれている。覆土は茶褐色砂質土である。床面にはすべての壁面に沿い幅1.1mの溝が巡る。溝の深さは北側は10cmから30cm、その他は約10cmである。中央には厚さ約6cmの黄色土の貼床がある。また、カマドの付近に穴があるが柱穴とは思われない。北東隅部分には焼

土・炭化物・赤く焼けた繰群があり、煙出しが東方を向くカマドがつくられていたことがわかるが、残りぐあいはよくない。繰群はカマド袖部を構成していたものであるが、擾乱を受けている。カマドは長さ約2m幅40cmで居溝内に位置する。焚口部は径60cm深さ12cmのくぼみとなっており、赤褐色に焼けていた。時期は2期である。

#### S I 7・20 (第39図・写真図版25)

南側がS I 6と重なり、S B 1、S D 76・77と重なる。南北2.3m以上東西5.1mの方形で、正方形とすれば面積は約26m<sup>2</sup>である。遺構確認面から床面までの深さは約10cmである。主軸方位は北から約68度西にふれている。覆土は茶褐色砂質土である。黄色土の貼床は2面あり、上層は遺構確認面の高さにあり厚さ約4cmで、下層は遺構確認面からの深さ約10cmにある。貼床のありかたから、ふたつの住居が重なっていると見られたため、上層をS I 7、下層をS I 20と呼び分けたが、出土遺物・平面形では区分できない。柱穴についてはわからない。また中央には上層貼床に伴うとみられる焼土・炭化物があり、S I 7のカマドに関連したものであろうか。S I 20は北東隅に焼土・炭化物があり、煙出しが東方を向くカマドがつくられていたことがわかるが、残りは良くない。時期は1期である。

#### S I 8 (第38図・写真図版26)

北側がS I 9と重なる。南北3.5m東西4.1mの方形で、面積は約14.5m<sup>2</sup>である。遺構確認面から床面までの深さは約10cmである。長軸方位は北から約25度東にふれている。覆土は褐色砂質土である。床面には北側・南側・東側の壁面に沿い幅20cmから30cm深さ約10cmの溝があり、中央には黄色土の貼床がある。柱穴についてはよくわからない。南壁のやや東寄りには焼土・炭化物があり、煙出しが南方を向くカマドがつくられていたことがわかるが、残りは良くない。時期は1期である。

#### S I 9 (第38図)

南側がS I 8と重なり東側がS D 73と重なる。南北1.6m以上東西2.3m以上の方形で、北側壁面には幅30cm深さ4cmの溝がある。遺構確認面から床面までの深さは約10cmである。長軸方位は北から約52度東にふれている。覆土は茶褐色砂質土である。床面には黄色土の貼床がある。カマド付近に穴があるが柱穴とは思われない。東側に焼土と赤く焼けた石があり、カマドがあったことがわかるが残りはよくない。時期は1期である。遺構の切りあいからみると、S I 8よりは新しいことがわかるが、出土土器では区別がつかない。

#### S I 10 (第39図・写真図版25)

新と古の2棟の住居が重なっており、さらに東側がS I 14と重なる。S I 10新は南北3.7m東西2.2mの方形で、面積は約8m<sup>2</sup>である。遺構確認面から床面までの深さは約30cmである。主軸方位は北から約65度東にふれている。覆土は褐色砂質土である。西側の一部と東側の壁面に沿い幅30cm深さ約6cmの溝があり、中央には黄色土の貼床がある。柱穴は不明である。西壁南寄りに、煙出しが西方を向くカマドがつくられている。カマドは長さ20cmから30cmの河原石を用いて袖部をつくる。煙出しの幅は約30cm長さ1mである。焚口部は径約50cm深さ10cmで赤く焼けている。時期は3期である。

S I 10古は南東隅のカマド付近が残るだけである。大きさは不明である。遺構確認面から床面までの深さは約10cmである。長軸方位はカマド煙出しがS I 10新と平行であることからS I 10新と同じである。覆土は黒褐色砂質土である。中央には厚さ約5cmの黄色土の貼床がある。柱穴は不明である。カマドは西側に向き、煙出しの幅は約40cm長さ1.5mである。焚口部は径約40cm深さ5cmが赤く焼けている。時期は3期である。

#### S I 14 (第39図・写真図版25)

西側がS I 10と重なる。南北2.8m東西2.2m以上の方形で、正方形であれば面積は約8m<sup>2</sup>である。遺構確認面から床面までの深さは約30cmである。長軸方位は北から約60度西にふれている。覆土は上層が灰黒色砂質土で20cmから30cmの河原石が入っていた。下層は茶灰色砂質土である。床面中央には黄色土の貼床がある。柱穴は不明である。西

側面寄りに焼土があり、煙出しが西方を向くカマドがつくられていたようである。時期は1期である。

#### S I 15 (第42図・写真図版27)

他の住居跡と重なりがない。南北2.8m東西3.4mの方形で、面積は約9.5m<sup>2</sup>である。遺構確認面から床面までの深さは約30cmである。主軸方位は北から約15度東にふれている。覆土は上層が茶褐色砂質土、下層が褐色または灰色砂質土である。中央には厚さ約4cmの黄色土の貼床がある。南壁に沿い穴があるが柱穴とは思われない。南壁西端に煙出しが南方を向くカマドがつくられている。カマドは長さ20cmから30cmの河原石を用いて袖部をつくる。袖部は、片側は幅約20cm高さ30cmである。カマドは上層の袖石の下約10cmにも焼けた河原石があり、カマドの作り替えがあったようである。時期は3期である。

#### S I 16 (第40図)

中世の遺構と重なっていて、残りぐあいはきわめて悪い。南北2m東西1.7mの方形で、正方形であれば面積は約4m<sup>2</sup>である。遺構確認面から床面までの深さは約5cmである。主軸方位はほぼ南北にある。覆土は黒褐色砂質土である。中央には厚さ3cmの黄色土の貼床がある。柱穴は不明である。南壁西端に焼上がり煙出しが南方を向くカマドがつくられていたらしいが、残りは良くない。時期は1期である。  
(久々)

#### S I 3 A・3 B (第37図・写真図版23・24)

カマドBを持つSI 3 Bと、ほぼ同一プランでやや南東にずれ、カマドAを持つSI 3 Aが重複する。また、SI 3 Bは北東側で、SI 2 1・4の2棟と重複する。また、SI 3 Aは3 Bカマド灰層を切りプランが作られており、南・東側の壁は3 Aのプランで、西・北側の壁は3 Bのプランと考えられる。床はほぼ同じ深さに設けられ、遺構確認面から深さ30cmで貼床が部分的に2枚みられる。規模は、3 Bが東西3.0m南北3.6m、面積10.8m<sup>2</sup>、3 Aが一辺2.8mの方形で、面積7.8m<sup>2</sup>、主軸は、それぞれN-78°-W、N-7°-Eである。3 Aで、プランの隅に柱穴状のピットが確認できる。3 Bのカマドは、焚口部で幅60cm、煙出しが幅20cm長さ1mで、袖は両側に河原石を立てて並べ、砂質土で作る。時期は、3期と考えられる。3 Aカマドは、北向きにSI 2 1覆土内に作られる。焚口部は、幅50cmで長さ約1m、幅30cmの煙出しが検出できる。焚口部両側には、河原石を立て袖部を作る。また、焚口部の前は、直径約80cm、深さ約20cmの穴を設ける。時期は、4期と考えられる。SI 3は、貼床をはずすと掘り方整地面まで約10cmの汚れた砂質土がみられ、地山となる。

#### S I 4 (第37図・写真図版23・24)

SI 2 1と重複し、SI 3 Aに接する南北に長いプランと考えられる。規模ははっきりしないが、床には南北3m東西2mで貼床がみられることからプランは、それ以上の大きさと考えられる。周溝は、南・東側に幅20cm、深さ20cmでみられるが、住居跡の覆土に比べるときれいな黄褐色砂質土が覆土となっており、あるいは板などを壁にあてるための掘り方で埋め戻されている可能性がある。また、はっきりしないがプランの隅にみられる穴が柱穴となるかもしれない。主軸は、N-90°-Eである。カマドは、幅50cm、長さ1mで東壁に設けられる。袖は、石を用いない。また、床は掘り方整地後に、黄白色砂質土を敷き作られる。時期は、2期。

#### S I 2 1 (第37図・写真図版23・24)

SI 3 A・3 B・4に切られる4棟の中で最も古い住居跡。規模は、東西4.8m南北3mほどと推定され、東側に周溝状の溝を持つ。カマドは、確認できないが南壁に作られたと考えられる。床には貼床が確認される。主軸は北壁の方に向かって、ほぼN-62°-Eと考えられる。柱穴は不明。床面積は14.4m<sup>2</sup>以上で、時期は1期。  
(酒井)

#### S I 5 (第40図・写真図版24)

遺構の南側部分を中世の溝が切っているため、住居の実際の規模は不明であるが、検出した部分は、南北2.4m、東西2.5mの方形である。遺構確認面から床面までの深さは約30cmである。主軸方位は、北から約80度西にふれている。

北側には、床面から約20cmのところに大きな礫が並べたように整然と検出された。床面は、貼床が認められる。住居東壁にカマドがあり、煙出しは東方を向く。袖部を河原石で組んでいる。焚口部には平たい石がおかれ、上に須恵器杯が附せられた状態でみられた。時期は2期である。

#### S I 12 (第40図・写真図版26)

S I 5の北側に位置する。規模は、南北4.4m東西4m、面積約18m<sup>2</sup>で、崩れた方形を呈する。造構確認面から床面までの深さは約20cmである。主軸方位は、ほぼ南北方向に一致する。住居の南西部分で貼床を検出した。カマドは南側にあり、煙出しは南方を向く。袖石は使っていない。時期は2期である。なお、カマド付近の床面から刀子が出土した。

#### S I 11古・新 (第38図・写真図版26)

貼床の検出状況や方形のプランのつながりから、当初、一つの住居と考えていたが、カマドの位置から古と新に分けられることが判明した。このカマドは、S I 11新に付属すると考えられる。S I 11新の造構確認面から床面までの深さは、24cmである。S I 11新の規模は明らかではないが、カマドの位置からして東西約2m南北2m、面積約4m<sup>2</sup>程度になると考える。同様に主軸方位は、北から東に約30度ふれる。S I 11新の貼床をはずしたところ、さらに橢円形の掘り込みを検出した。その中央部には、径約70cmの円形を呈する貼床状の堅固な面があり、覆土中からは土師器の小片が出土した。カマドは、SD73に切られるため残りはよくないが、袖石がある。煙出しは、南方を向く。なお、西側と北側の壁に沿う幅約20~30cmの部分の土の色が床面と異なり周溝かと思われたが、判然としない。S I 11古はS I 11新の南に重なり、主軸・深さともS I 11新と同じである。また、S I 13に切られるため、カマドは残っていない。北側に貼床が認められる。時期はS I 11古が1期、S I 11新が3期である。

#### S I 13 (第38図・写真図版26)

S I 13は、S I 11古を切っている。東西2.8m南北3.2mで、面積約9m<sup>2</sup>の正方形に近いプランになる。造構確認面から床面までの深さは約40cmである。主軸方位は、北から約70度西へふれる。壁に沿って幅約20~30cmの周溝が巡る。貼床は約6cmの厚さがあり、周溝とカマドの付近を除いた床一面に広がる。カマドは住居の東壁にあり、煙出しは東方を向く。袖石は残っていない。焚口部は、円形の凹みとなっている。時期は2期である。 (境)

#### S I 17 (第41図・写真図版27)

調査区の北西部に位置し、S I 18と北側で重複し切る。遺存状態は悪く造構検出面から10cmで床面となる。規模は、東西5.6m南北4.5m以上の方形プランと推定でき、面積は、25.2m<sup>2</sup>以上である。柱穴は、はっきりしない。主軸は、N-78°-Eとなる。床面には、部分的に貼床が残るが東側では地山の礫層が露出しており、床の状態はよくない。カマドは、南東壁に北向きに付けられ、焚口部は礫を20cm掘り凹める。周溝は、東壁の一部と北西隅にわずかにみられる。時期は2期である。

#### S I 18 (第41図・写真図版27)

S I 17北側に重複する。プランは、南北4m東西5mの方形と考えられるがはっきりしない。また、北側には、張り出したプランがみられもう一棟重複している可能性がある。床にみられる2本の平行した溝は、カマドの下層に設けられており、住居跡の床整地時のものである可能性が強い。また、柱穴は不明。カマドは、北壁に設けられる。遺存状態は悪く、焼土の入った1m×50cmの穴が確認できるだけである。床は、全体に柔らかいが一部に貼床が残る。また、プランの北西外側に、直径60cmの縛まった床状の部分がみられるが用途不明。時期は1期である。

#### S I 19 (第41図・写真図版27)

S I 17・18の北西で確認された小型の住居跡で、一辺3mほどのプランを持つ。床は、地山の礫層上部に設けられていたと考えられるが、すでに削平を受けており、礫の間に汚れた茶褐色土が認められただけである。しかし、南西

側にカマドの焼土がみられたため、住居跡と確認した。カマドは、1m×60cmの焼土を覆土とする穴を残すだけである。柱穴は不明。主軸方向は、N-28°-Wで、時期は1期である。

(消井)

#### B 捏立柱建物

##### S B 32 (第39図)

S I 6と重なる。S I 6のP 1・P 3・P 4・P 6、SK58・57、P 220・219・233の10個の穴で構成される。梁行2間(柱間寸法2.6m)桁行3間(柱間寸法2.6m)の東西棟の建物である。床面積は約40m<sup>2</sup>である。棟方位は北から約70度西にふれている。柱穴は一辺50-70cmの方形で、S I 6のP 3の断面観察では、径約20cmの柱根痕跡が認められた。建物の中央にはS I 7のカマドと考えられる焼上と貼床があるが、S B 32に伴う焼土の可能性もある。

#### C 穴

S K 57 (第39図) 北側がS B 32の柱穴と重なっている。上部は径1.6m深さ5cmで浅く、西寄りは長さ1.2m幅70cm深さ約35cmと深くなっている。

S K 60 (第42図) 長さ95cm幅80cm深さ40cmの方形である。覆土は褐色砂質土で、下層には径5-20cmの河原石がまとっていた。

S K 63 (第42図) 長さ1.75m幅80cm深さ約10cmの長方形である。覆土は褐色砂質土である。

#### D 溝

##### S D 72~74・76~82 (第36-39図)

豊穴住居跡と重なりがあり、それより新しい時期につくられている。幅20-80cm深さ約10-20cmのもので、東西南向のS D 81を除いて北から約20度東にふれた南北方向で、溝相互の間隔が0.8-1.7mではば平行にならんでいる。覆土は茶褐色砂質土である。

S D 73は北側と南側で東側においてCの字状になる。内側に東西約5m南北約9mの区画をなす。そこには柱穴とみられる穴があるが、整然とした配列にはなっていない。

##### S D 75 (第42図)

S I 6の西側で河跡に沿い南北に延びる。残りが悪く長さにして7mだけが確認できた。本来は北側へ延びてSD 96に合流していた可能性がある。幅は約1.5m深さ26cmで、覆土は褐色砂質土と白色砂質土である。

(久々)

##### E 河跡 (第42図・写真図版28)

遺跡の西側に、南から北へ向かって流れていったと思われる幅約10m-15m、深さ30-60cmの河跡がある。この河跡は、北側のSD 96にぶつかるところで人江状になって止まり、「L」字状に折れ、西側の谷へと向かって行く。西側へ向かう流路は浅かったためか、その肩を明確に検出することはできなかった。この河跡には、主に灰色のシルトが厚く堆積し、古代の土器が散在していた。このシルトを除去し河底部が露呈すると大きな河石が転がり、いかにも河底といった様相である。人江状になって止まる方の端は、石や土器を投げ込んだものと見られ、石の下で細かく碎けた状態の土器がいくつも出土した。これらの土器の時期は、1期-3期と幅がある。

(境)

S D 96・97 Y 73付近から東西にX40列に添って検出された溝で、2-4期にかけて使用されたと考えられる。SD 97は、古い段階の溝でY 60列より西に残る。遺跡西側の自然の谷跡が「L」字状に曲がる際を流れ、大量の遺物が投棄され、大小の礫により埋められていた。溝幅は約1m深さ30cmで、10mが残る。SD 96は、3期ごろの流路と考えられる溝で、Y 73付近からやや北側に流れを変え西側の谷へ落ちると考えられる。また、SD 96は、Y 70以東では、4期の流路と考えられ、溝の底部分が残る。上部は、ほ場整備などすでに削平されたと考えられる。この他に北流する溝としては、SD 75がある。この溝は、X 20・Y 67付近から SD 17に添って古代の遺物が出土していることから、この部分を北流し SD 96・SX 6に続くと考えられる。

S X 6 (第42図・写真図版28) X39・Y73付近に位置する。2×3mの方形で深さ約10cmで底部が残る。覆土は、地山礫層に灰白色砂層がみられ、溝と同じ砂質土で、水に関係する施設と考えられる。また、遺跡内には、井戸がみられないことから、用水により引き水し、SX 6に貯めて SD96から西側の谷へ排水する「洗い場」的な性格を持つかもしれません。

## (2) 中・近世の概要

遺構は、掘立柱建物36棟、土坑50か所、溝79条が検出される。掘立柱建物は、調査区の南東部、中央部東側、西北部の三群に分かれ、それぞれの群内で重複関係を持つ。また、建物に土坑が付随する例が多くみられる。溝は、大きく中世前半に作られたものと、中世後半から近世・現代まで長く使われた例があり、近世以降は水路が大きく変化していないようである。中世の掘立柱建物は、遺物などから12世紀後半から14世紀前半に営まれたようで、15世紀以降は、溝がみられるだけで建物などはない。中世の遺構は、基本的に暗茶褐色土が覆土となっており、腐植土が堆積したのちに集落が形成されたと考えられる。また、SD 7・31は東西に、SD38は南北に撤高堆上を区切る中世の区画溝である。

(酒井)

### A 南建物群 (第43図・写真図版19・20)

発掘区の南東を占めるグループを南建物群とした。確認できるものだけでSB10・11・20・22・28・29の6棟があり、同じ場所で何度も建て替えを行なったものと思われる。

SB10は2間2間の東西棟。SB11は、この建物群の中では最も規模の大きな建物で、5間4間を基本とする。南西隅には柱穴がなく北東に土坑(SK26)を伴う張出を持つ。棟方向は、東西棟であると思われる。SB20は3間2間の東西棟で、北東に張出部、南西に土坑を持つ。土坑を覆っていた屋根は庇になると思われる。なお、このSB20は一部の柱穴がSB11・28と重複する。また、SB20に伴う土坑(SK25)をSB11のP15が切ることから、SB20は、SB11よりも古いことが分かる。SB22は、2間2間のSB10と同じ東西棟の建物であり、P9がSB29のP5を切る。このことからSB22の方がSB29よりも古いことが分かる。SB28は、SB11とはほぼ同じ方位で建ち柱穴もSB11と7か所で重複するが、SB28のP11とSB11のP15の切り合いからSB28の方がSB11よりも新しいことが分かる。SB11・20・28の柱穴の重複からこの建物群においては、短期間に同じ場所で建物の建て替えを行なったと考えられる。また、柱穴が重複する場所は、ちょうど礎の堆積部分であるため建て替えの際に新たに掘り直すことを避け、以前からの柱穴を利用したのではないかということも考慮にいれたい。これらの柱穴は、最も新しいと考えられるSB28の柱根部分には黒褐色土が入り、その周りを疊で埋めて根固めを行なっている。SB29は、2間1間の建物であり、SB10の付属建物になると考えられる。

南建物群の土坑は、SK8・11・24-27がある。このうちSK25はSB20に、SK26はSB11に伴うと思われる。SK26は長方形が切り合ったプランになり、何回かの作り替えもしくは重複が考えられる。なお、南西のSK25との境付近に貼床が認められた。この貼床付近からフイゴの羽口が、また土坑全体から精練鍛冶滓が出土し、鍛冶を行なっていたことを窺わせる土坑である。SK8もいざれかの建物に伴うと考えられる。SK11・27は、ともに深さ約50cmの深い土坑である。

溝は、SD52-57がある。SD52・53・55は、いずれも同地区を東西に横切る溝である。SD52はSB11に伴うSK26とSD53を切っている。SD57は、SK26から出て方形に巡らかに見えるが、深さ数cmと極端に浅く、覆土も灰色シルトであることから、SK26及びSB11との関連は考え難い。

(境)

### B 中央建物群 (第43図)

発掘区中央部東側X20-50Y75-95区に集中している中世遺構群を総称して、中央建物群と呼ぶ。掘立柱建物17棟、土坑約30か所、溝2条がある。その他の溝は、江戸時代以降の農業用水である。

### a 捩立柱建物（表1）

建物は、4間×4間のもの1棟(SB6)、3間×4間のもの2棟(SB3・14)、3間×3間のもの2棟(SB1・31)、2間×4間のもの3棟(SB2・7・33)、2間×3間のもの2棟(SB36・9)、2間×6間のもの1棟(SB8)、2間×2間のもの4棟(SB4・12・24・39)、1間×2間のもの2棟(SB5・30)がある。

建物の方位は、北から14度～20度東にふれるSB4～6・12・30・31・39、北から6度～8度東にふれるSB7・8、北から3度～7度西にふれるSB1～3・9・13・14・24・36・37がある。棟方向は、ほぼ南北に長いもの8棟(SB1・4・5・6・12・14・24・39)、東西に長いもの9棟(SB1・2・3・7・8・9・13・36・37)がある。

SB1・2・3・13・31には庇がある。SB1は北側、南側、東側三方に、SB2は南側一方、SB3は南側一方、SB13は南側一方に、SB31は北側一方にある。また、SB8・24・30・31には櫺列が伴う。SB8は南側一方に、SB24は東一方に、SB30は南側一方に、SB31は北側、南側、東側三方にある。SB1・8・14の庇の下と櫺の間には、土坑がある。

庇部分を含めた平面積では、55m<sup>2</sup>から96m<sup>2</sup>の大型のSB1・2・3・8・14・31、27m<sup>2</sup>から43m<sup>2</sup>の中型のSB7・9・12・24・36・37、10m<sup>2</sup>から15m<sup>2</sup>の小型のSB4・5・29・30がある。大型・中型は住居、小型は納屋、馬屋などの性格が推定される。

柱穴の配列は、SB24を除いて、建物の内側にも1間ごとに柱穴があるいわゆる総柱構造である。柱穴はほぼ円形でその大きさは、径40～50cmほどの大きいものと20cmほどの小さいものがある。1棟で両者が用いられているSB1・2・13は、周囲の柱穴の径が小さいもので、庇または櫺であることを物語るものと考えられる。

SB31は西側柱列の内側50cmのところに平行して柱列がある。SB12は北側と南側の中央柱がやや外側にでている。

柱根は残っていないが、直径16cmから20cmの黒色土の柱痕跡がある。SB6・7では方形の柱痕跡が認められた。柱穴の間尺は、1.8mから2.8mの幅があり、2.1mと2.4mのものが多い。

SB2とSB13は棟方向が同じで、しかもその間が2.8m離れるだけで平行している。SB7とSB8も2.4m離れるだけで平行している。それぞれが接続した1棟の建物であった可能性がある。

建物は、SB1・2・9・36・37の5棟が重なっており、5回以上の建て替えがあったことがうかがわれる。出土遺物からみて、柱間尺が小さいもの、方位が北から東にふれが大きいものほど古い時期と考えられる。

### b 土坑

擗立柱建物に付属する作業場的な土坑、墓の可能性がある土坑、ゴミ捨て穴とみられる土坑、井戸などがある。

#### 作業場的な土坑SK1・2・4・29・32

SB1・2・4は東西2～4m南北7m深さ10cmから30cmの細長いものであるが、土層の堆積状況からみて、長さ3.5mのものが五つ重なっているようである。その位置は、SB1の身舎東側1間分と東側庇部分にあり、SB1の建物に付属する施設と考えられる。出土遺物に、刀子、釘、砥石、鉄滓があり、鍛冶工房の可能性がある。

SK29は、東西4.5m南北2.5m深さ20cmでSB8の南側庇部分に、SK30は東西3m南北4m深さ10cmでSB8の身舎東側2間分にあり、いずれもSB8の付属施設と思われる。SK29は鉄滓、鎌が出土している。

SK32は一辺約1mの方形で深さ約60cmである。床面は平坦で、中央には径30cmの柱穴と見られる穴がひとつあるだけである。壁面外周にも柱穴状の穴があり、上屋があったものであろう。西側にこの上坑への入り口とみられる一段浅い上坑が付属し、さらにその西側にSB3が接していることから、この建物に付属する施設と考えられる。

#### 墓の可能性がある土坑SK13・14・15・16・17・18・19・36・40・42・43

短辺80cmから1m長辺1.2m深さ2.5cmから50cmの長方形のSK13・14・15・16・18と径50cmから1m深さ30cmの隅丸方形のSK17・19が、SB6の身舎南東部に重なってある。土坑の壁面はほぼ垂直に立ち、SK15からは完全な灯明皿が出土しており、墓穴の空虚気がある。SB6との前後関係は、柱穴と重なりがないこと、上坑の主軸方位が同じで

あることから、同時かその後の近い時期に形成されたものと思われる。

SK36・40は径80cm深さ40cmの円形、SK42・43は長さ1m幅60cm深さ20cmの長円形である。SB7の西北部にあり、SK13などとよく似たありかたを示す。

#### ゴミ穴SK35・46・45

SK35は一辺1.8m深さ30cmの方形、SK46は東西80cm南北1m深さ15cm、SK45は東西60cm南北90cm深さ20cmの隅丸方形である。覆土はいずれも灰黒色で、木炭、種子、骨片が多く含まれていた。SB7とSB8の間にあり、両者に伴うゴミ捨て穴と思われる。

遺構番号	種方向	桁・梁	桁 行	梁 行	面 積	方 位	備 考
SB 1	東西棟	4×4	2.1+2.4+2.4+2.4(7.2)(+1.8)	2.4+2.4+2.4(+2.1)(7.2)	95.5m <sup>2</sup>	N-7°-W	南・北・東に構か庇
SB 2	東西棟	4×2	2.4+2.4+2.4+2.4(9.6)	2.4+2.2+2.8(7.4)	71.04m <sup>2</sup>	N-3°-W	南庇
SB 3	南北棟	3×4	2.1+2.4+2.4+2.1(9.0)	2.4+2.4+2.8(7.6)	64.8m <sup>2</sup>	N-3°-W	東西庇、土坑
SB 4	南北棟	2×2	2.1+2.1(4.2)	1.8+1.8(3.6)	15.12m <sup>2</sup>	N-26°-E	上坑
SB 5	南北棟	2×1	2.5+2.5(5)	2.5	12.5m <sup>2</sup>	N-17°-E	土坑
SB 6	南北棟	5×4	2.1+2.1+2.1+2.1+2.1(10.5)	2.2+2.2+2.2+2.2(8.8)	92.4m <sup>2</sup>	N-6°-E	東庇
SB 7	東西棟	4×2	2.1+2.2+2.2+2.1(8.6)	2.2+2.2(4.4)	37.84m <sup>2</sup>	N-6°-E	東庇
SB 8	東西棟	6×2	1.8+2.2+2.2+2.2+1.7+1.7(11.8)	2.4+2.4(4.8)	56.64m <sup>2</sup>	N-8°-E	南側櫛、東庇、土坑
SB 9	東西棟	3×2	2.1+2.1+2.1(6.4)	2.5+2.25(4.5)	28.8m <sup>2</sup>	N-3°-W	
SB 10	東西棟	2×2	2.8+2.8(5.6)	2.5+2.5(5)	28m <sup>2</sup>	N-10°-E	
SB 11	東西棟	5×4	2.1+2.3+2.3+2.3+2(10.65)	(2.5+1.8+2.1+2.1+1.8)(7.8)	96.05m <sup>2</sup>	N-29°-E	東西南北庇、土坑、張出?
SB 12	東西棟	2×2	2.7+2.7(+2.5)(5.4)	2.5+2.5(5)	27m <sup>2</sup>	N-20°-E	
SB 13	東西棟	4×3	2.2+2.4+2.4+2.4(9.4)	2.8+2.1+2.1(7)	65.8m <sup>2</sup>	N-2°-W	北庇
SB 14	南北棟	5×3	(2.1)2.6+2.5+2.6+2.0+0.8(12.6)	2.4+2.4+2.0(5.8)	85.68m <sup>2</sup>	N-0°-E	北・南側櫛、土坑
SB 15	南北棟	2×2	2.7+2.7(5.4)	2.4+2.4(4.8)	34.25m <sup>2</sup>	N-9°-E	東張出
SB 16	東西棟	2×3	2.4+2.3(4.7)	2.8+3-2.2(8)	37.6m <sup>2</sup>	N-15°-E	上坑
SB 17	南北棟	3×1	2.2+2.2+2.2(6.6)	2.2	14.52m <sup>2</sup>	N-17°-E	
SB 18	東西棟	2×3	2.1+2.1(4.2)	2.3+2.2+1.7(6.2)	26.04m <sup>2</sup>	N-13°-E	南庇
SB 19	東西棟	3×3	2.4+2.5+2.3(7.2)	3+2.8+2.5(8.3)	59.76m <sup>2</sup>	N-7°-E	*
SB 20	東西棟	2×3	2.5+2.5(4.5)	(2.2)+(2.4)+2.5+2.3(7.2)	39.27m <sup>2</sup>	N-17°-E	南庇、土坑、北張出
SB 22	南北棟	2×2	2.3+2.3(4.6)	2+2.6(4.6)	21.16m <sup>2</sup>	N-25°-E	
SB 24	南北棟	2×3	2.4+2.4(4.8)	2.2+2+1.8(6)	28.8m <sup>2</sup>	N-5°-W	東庇
SB 25	東西棟	1×2	2.8	1.7+1.5(3.2)	8.96m <sup>2</sup>	N-18°-E	
SB 26	南北棟	3×3	2.6+3+2(7.6)	2.3+2.4+2.4(7.1)	49.13m <sup>2</sup>	N-15°-E	東・南庇
SB 27	東西棟	4×4	2.4+2.4+2.4+2.4(9.6)	2.4+2.7+2.7+2.4(10.2)	100.92m <sup>2</sup>	N-10°-E	西・南・北庇、東側櫛、土坑
SB 28	南北棟	3×4	1.6+2.1+2.3+1.7(7.7)	1.8+2.3+2(6.1)	44.25m <sup>2</sup>	N-26°-E	南庇、土坑
SB 29	東西棟	2×1	2.7+2.6(5.3)	2.5	13.25m <sup>2</sup>	N-15°-E	
SB 30	東西棟	2×1	2.2+2.2(4.4)	2.4	10.56m <sup>2</sup>	N-14°-E	
SB 31	南北棟	3×3	2.8+3+3+1.8(10.6)	2.4+2+2.4(6.8)	72.08m <sup>2</sup>	N-14°-E	4面櫛
SB 33	東西棟	3×3	1.2+2.1+2.1(5.4)	1.2+1.8+1.2(+2)(4.2)	25.68m <sup>2</sup>	N-2°-W	東庇、土坑
SB 34	東西棟	3×1	2.5+2.3+1.7+1.5(8)	4	32m <sup>2</sup>	N-1°-W	
SB 35	南北棟	1×4	4.5	2.3+2.3+2.3+1.8(8.7)	39.15m <sup>2</sup>	N-1°-W	東庇、土坑
SB 36	東西棟	3×2	2.4+2.4+2.4(7.2)	2.8+2.8(5.6)	43.2m <sup>2</sup>	N-1°-W	土坑
SB 37	東西棟	3×2	1.8+1.8+1.8(5.4)	2.6+2.6(5.2)	28m <sup>2</sup>	N-0°-E	土坑
SB 38	東西棟	2×1	2.5+2.5(5)	3	15m <sup>2</sup>	N-21°-E	
SB 39	南北棟	2×2	2.0+2.0(4.0)	1.9+1.9(3.8)	15.2m <sup>2</sup>	N-26°-E	

表4 吉倉B遺跡掘立柱建物計測表

註

1) ( ) 内の数値は、全長(ただし、( + )・

( + )は、張出部の長さで、全長には含めない)

2) 面積は、庇・張出部を全て含めた数値

3) 方位は全て北を基準とする

## 井戸SE1

SB 3・13の西側にある径2.5m深さ70cmの穴である。井戸と思われるが湧き水はなく、底は砂質土であり桶などを付設した溜め井戸であろう。

## c 溝

建物群の西側に南から北へわずかに屈曲してのびる幅90cm深さ25cmのSD27、建物群の北側に南北まっすぐのびる幅1.1m深さ35cmのSD31がある。覆土はいずれも黒色土であるが、両者は重なりがありSD27が古い。SD31は、東でコの字状に折れ曲がり、内側に四角い区画を作りだしているが、その目的は不明である。  
(久々)

## C 北西建物群 (第44図、写真図版21・22)

調査区の北西側で9棟確認された建物群で、北側の未調査区へ続く。据立柱建物は、大きくSB19・SB17・SB27を中心とする3群がみられる。いづれも柱立柱建物で、土坑を持つSB16・27、南側に廊が付けられるSB17・18などがある。

SB19・26は、遺跡西側にみられる河跡が「L」状に曲がり、谷へ落ちはじめる一段低い部分に位置し、河跡が一部埋まつた後に建てられている。SB26は、2間2間で東と南側にそれぞれ1間2間の廊がつき、南東の隅に1間(1.8m)である。入り口であろうか。SB19は3間3間で、南北が2.7mで2間と2.4m1間、東西が2.4mの柱間となる。SB16・18は、ほぼ同一方向に並ぶ建物で、2間3間、1間2間の規模を持つ。SB17・18は、南側1間の柱穴が細く廊と考えられる。また、SB16はSK7が付随する土坑付建物で、SB15・38と重複する。SB27・15・38は、東西棟の建物で、中でもSB27は規模が大きく、3基の土坑を持つ。土坑は、同時に使用されたものではなく建物の拡張などで作り替えられたと考えられる。柱穴は、直径30~60cmと大きい。また、東側の1間は南東側と北東側が別々に拡張されているため東西の柱間が異なっている。東側にはSD90など排水用の溝が拡張前に設けられていたようである。

土坑は、5基が確認される。SK53を除き建物に付属する。建物に付随するSK7・50・51は床が堅く締まり土間状となり、それぞれが柱間の中に、長辺3~4.5m、短辺2~3.5mで設けられる。遺構検出面からは浅く、床まで約15cm程で暗茶褐色土が覆土となっている。最も浅いSK52では、底面が黒いしみ状に検出される程度である。

SB25は、この建物群の中ではやや東に位置する1間2間の小型建物で東側に檐が付く。柱は、やや歪んで建てられており、比較的簡易な建物と推測される。

## SD7・27・31・38・58

溝は、中世前半に属する区画溝と、建物の雨落ちなど排水用と考えられるもの、中世後半から現代にいたる用水路がある。用水路は、流路の下層から近世、中世の流路が確認される例が多く、長く使用されていたことを窺わせる。

SD7・31・38は、中世の区画溝。SD7・31は、微高地の中央部を南北に流れるSD38から直角におれ、遺跡の東側部分を約50m幅で南北に区切る。中央建物群は、この区画内に位置する。溝の幅は、1~2mで深さは、50cmを測る。SD31は、東の端で約10mの大方形区画を設ける。SD38は、X30以南で確認できないが、おそらくかなり上流から北流していると考えられ、未調査の北側へ続く。また、上層には、近世の流路が確認される。SD27は、古代の溝SD75・96の後、中世の区画が作られるまで北流したと考えられる溝で、SD31に切られる。SD58は、中央建物群の中を走る溝で性格不明。

## D 近世以降の溝 (用水路)

SD6・37は、近世以降まで使われていた溝の中でも比較的古いもので中世後半までさかのばる可能性がある。SD1~5・39は、現代まで使われていたと考えられる用水路。SD1は、ほ場整備以降の用水。それ以外は、ほ場整備以前の用水路と考えられる。また、X15以南では、SD1の下層から中世後半にさかのばる溝跡が一部で検出された。1990年に調査を行なった当遺跡のすぐ南に位置する南中田D遺跡でも同様に溝が古い時代から流路を変えずに使用されており、同様の傾向を示す。

(酒井)

### 3 遺物

#### (1) 古代

古代の遺物は、須恵器、土師器、鉄器、砥石、炉壁がある。遺物量は整理箱（長さ64cm幅37cm深さ10cm）約250箱である。その時期は、奈良時代後葉から平安時代前葉にかけてのものと考えられる。須恵器は杯蓋、杯、壺、瓶、高杯、甕、鉢の器種があり、土師器は碗、甕、鍋、高杯、鉢の器種がある。須恵器杯・杯蓋と土師器甕・鍋は、形態や体部整形手法に違いがみられる（第31図）。その違いにより次のように分類した。

須恵器杯蓋 口縁端部の形態から5類に分ける。1類・2類はともに口縁端部が断面三角形のものであるが、口径に対して器高が高いものを2類とした。3類は口縁端部が丸いものである。4類は口縁端部がやや細長く立ち、やや外へ出るものである。5類は体部が低平で、口縁端部がわずかに出るものである。1類・2類と3類は時期差があると考えられ3類が新しい。4類・5類はその過渡的なものと考える。

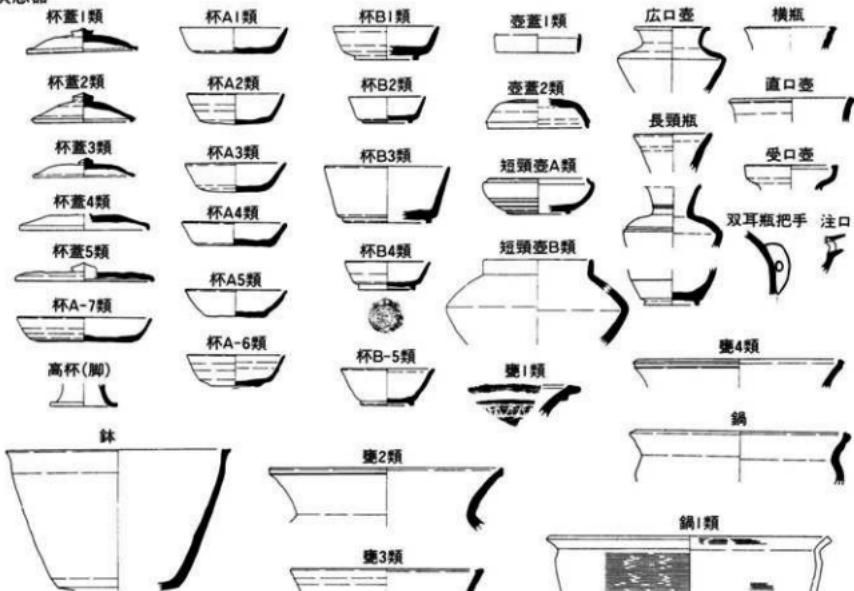
須恵器杯 高台のつかないものを杯A、高台がつくものを杯Bとし、さらに体部の形態から杯Aを7類、杯Bを5類に区分した。A 1類・A 3類は底部がやや済曲し体部との境が丸いもの。体部の立ち上がり角度は60~70度である。口径は10~11cmで、器高が3cmほどの浅いものをA 1類、3cmを超える深めのものをA 3類とする。A 2類・A 4類は底部が平坦で体部との境が角張るもの。体部の立ち上がりは60度前後である。口径は9~12cmで、器高が3cmほどの浅いものをA 4類、3cmを超える深めのものをA 2類とする。A 5類は口径が10cm前後器高が3cm前後で、体部の外傾度は50度前後のもの。A 6類は口径10cm器高3.3cmで底部に回転糸切り痕を残すもの。A 7類は口径が14cm器高が3cmの盤または皿とも呼べるものである。A 1類・A 3類とA 5類は時期差があると考えられ、A 5類が新しい。A 2類・A 4類はその過渡的なものと考える。

B 1類・B 2類は底部と体部との境が丸いもの。体部の立ち上がり角度は60~70度である。口径は10cmから12cmで、器高が3.5cm前後の浅いものをB 1類、3.5cmをこえる深めのものをB 2類とする。B 3類は口径が13cmから14cm器高が5cmから6cmの大型のもので、体部の立ち上がり角度は75度前後のもの。これには、底部と体部の境が丸いものと角張るものがある。B 4類は口径9cm器高3cmのもので、底部と体部の境が角張る。底部に回転糸切り痕を残すものがある。B 5類は口径10~11cm器高約4cmで、体部の立ち上がり角度は60度前後である。B 1類・B 2類・B 3類と、B 4類・B 5類は時期差があると考えられ、後者が新しい。

土師器甕・鍋 内外面の調整手法・口縁部の形態・大きさの違いでわかる。甕Aは体部がハケメ調整のもので、口縁端部は丸い。口径24cmの大型（A 1類）と口径7cmから10cmの小型（A 2類）がある。甕Bは口径が15cmから20cm器高が28cmから30cmで、体部はカキメ、タタキメ、ヘラケズリ調整のもの。口縁端部の違いで3類にわける。断面が四角いB 1類、断面が三角形のB 2類、内側に段をなして立つB 3類である。小型の甕は、口径が8cmから12cm器高7cmから12cmで、体部はナデ、ヘラケズリ調整のもの。口縁端部の違いで3類にわける。断面が丸い1類、内側に段をなして立つ2類、断面が丸く肥厚する3類がある。底部はヘラケズリのものと糸切り底のものがある。鍋は口径22cmから35cm器高12cmから19cmで、体部はカキメ、ヘラケズリ、ハケメ調整である。口縁端部の違いで3類に分ける。断面が四角いもの（1類）、断面が三角形のもの（2類）、内側に段をなして立つもの（3類）である。底部は湾曲するものと平底のものがある。甕Aと甕B・鍋は時期差があると考えられ、後者が新しい。甕Bと鍋の1類から3類は時期差があり、その順で新しくなると考えられる。

土師器碗 高台のつかないものを碗A、高台がつくものを碗Bとし、さらに体部の形態から碗Aを4類、碗Bを2類に区分した。A 1類は口径9.4cm器高3cm、体部の立ち上がり角度は55度である。A 2類は口径9.4cm器高3.8cm、体部の立ち上がり角度は50度である。A 3類は口径10cmから11cm器高は3.5cm前後、体部立ち上がり角度は50度である。

須恵器



土師器



第31図 古代土器の器種分類

A 4 類は内面が黒色のもの。3 類は底部に回転糸切り痕があり、その他はヘラキリである。B 1 類は口径15.2cmの赤彩土器、B 2 類は口径8.6cm器高6 cmで、体部外面下方に小さな段がついた赤彩土器である。

#### S I 1 (第46図)

須恵器(杯)、土師器(杯・壺・鍋)、鉄鑓、刀子がある。須恵器は、杯のA 2 類(1)と杯A 1 類(2)がある。土師器は壺のA 2 類(11・13・15) B 1 類(3・5・12) B 2 類(4) C 類(16)、小型壺の1 類(9)、鍋の1 類(7・8) 2 類(6)がある。鉄鑓729は、茎部が少し欠けるが長さ10.4cmの柳葉形のもの。刀子731は刃部の幅1.5cm。時期は壺B 2 類・鍋2 類であることから2期とする。

#### S I 2 (第46図)

須恵器(杯蓋・杯)、土師器(鍋)、鉄製のやすがある。須恵器は、杯蓋の4 類(21・22) 杯のB 1 類(24) B 2 類(3) A 2 類(25)がある。土師器は、鍋の3 類(26)がある。やすは刃部が長さ7.4cm一辺8 mmほどの断面三角形のもので、基部に木質が残る。時期は鍋3 類であることから3期とする。

#### S I 22 (第46図)

須恵器(壺)、土師器(壺)、土鍤がある。土師器は壺のA 2 類(10・14)がある。土鍤18~20は長さ3.4~4.8cm径2.2cmの筒形である。

#### S I 6 (第49図)

須恵器(杯蓋・杯・壺)、土師器(壺・鍋)、土鍤、刀子がある。須恵器は、杯蓋の1 類(122~126・128~133) 2 類(127)、杯はA 1 類(134~138) B 2 類(139) B 1 類(140)、壺は口縁部がすこし内側に張り出す3 類(141)がある。土師器は壺のB 2 類(142・143・145・148・149・159・160) A 1 類(144) A 2 類(156)、小型壺の1 類(151) 2 類(146・147・150・152~155・157・158・169・167~169)、鍋の1 類(172) 2 類(162~166・173~175)がある。小型壺の底部はヘラキリが多いが回転糸切りの168もある。土鍤171は長さ5.4cm径3.5cmの紡錘形である。刀子は刃部の幅1.5cmのもので、基部に織維状のものを巻き付けている。土師器壺B 2 類・鍋2 類であることから2期とする。

#### S I 7・20 (第50・52図)

須恵器(杯・杯蓋・壺)、土師器(壺)、か壁がある。須恵器は、杯のA 2 類(176・177) A 3 類(318)、杯蓋の1 類(315~317)、壺の1 類(319)がある。土師器は、壺のB 1 類(179・312) B 2 類(178・313・314)がある。土師器壺B 2 類であることから2期とする。

#### S I 8 (第50図)

須恵器(杯・杯蓋)、土師器(壺)がある。須恵器は、杯蓋の1 類(180・181) 杯A 1 類(182)がある。土師器は、壺のA 2 類(183)がある。土師器壺A 2 類であることから1期とも考えられるが、同じく1期のS I 9より新しいことから2期としておく。

#### S I 9 (第50図)

須恵器(杯・壺)、土師器(壺・楕)がある。須恵器は、杯のA 1 類(186) B 1 類(185・187)、短頭壺(189)がある。土師器は、壺のA 2 類(184) 楕の1 類(188)がある。須恵器A 1 類・B 1 類、土師器壺A 2 類であることから1期とする。

#### S I 10 (第50図)

須恵器(杯・杯蓋・高杯)、土師器(壺・鍋・楕)、砥石(735)がある。須恵器は、杯のA 5 類(193・194) A 6 類(192) B 類(195)、杯蓋の1 類(190・191)、高杯脚部(197)がある。土師器は、壺のB 1 類(199・204) B 2 類(198・202・203・205) B 3 類(201)、小型壺2 類(206・207・209) B 3 類(208)、楕のA 1 類(196・200) A 4 類(212)、鍋の2 類(211)がある。

S I 10古からは、土師器壺B 2類が、S I 10新のカマドから須恵器杯A 5類、土師器壺B 3類が出土していることからS I 10古は2期、S I 10新は3期とする。

#### S I 14 (第50・51図)

須恵器（杯・杯蓋）、土師器（壺）、紡錘車（723）がある。須恵器は、杯のA 1類（234）、杯蓋の1類（233）がある。土師器は、壺のB 1類（235）がある。土師器壺B 1類があることから1期とする。

S I 10かS I 14かどちらに伴うか不明のものがある。須恵器は、杯蓋の1類（213～216・219）3類（217・218）、杯A 5類（223）杯B 1類（220・221）杯B 5類（222）。土師器は、壺B 1類（227）B 2類（228）、鍋の1類（231・232）2類（230）、小型壺の2類（224～226・229）がある。須恵器杯蓋3類・杯A 5類・杯B 5類、土師器小型壺2類は、S I 10新に伴うものと考える。

#### S I 15 (第52図)

須恵器（杯蓋・杯）、土師器（壺・鍋・椀）がある。須恵器は、杯蓋の2類（296・297）5類（298）、杯のA 4類（300・301）B 4類（299）がある。土師器は、壺のB 2類（295・306・307）、鍋の2類（303）、小型壺の1類（305・308）2類（304・309）、椀B 2類（302）がある。土師器壺B 2類あることから2期とする。

#### S I 16 (第52図)

須恵器（壺胴部片）、土師器（壺・椀）がある。土師器は、壺のB 1類（311）、椀は把手付き椀（310）がある。土師器壺B 1類があることから1期とする。

(久々)

#### S I 5 (第48図)

須恵器（杯・杯蓋・壺）、土師器（壺・鍋）がある。須恵器は、杯のA 1類（105）3類（106・107）、B 2類（108・109）、杯蓋の1類（104）、壺（110）がある。土師器は、壺のA 2類（115）、B 1類（118）B 2類（119）B 3類（116・117）、小型壺の2類（113・114）、鍋の2類（121）がある。

須恵器杯蓋1類、杯B 2類、土師器壺B 2類・小型壺2類、鍋2類から、時期は2期とする。

#### S I 12 (第51図)

須恵器（杯・杯蓋・壺）、土師器（壺・鍋）、鉄器（刀子・L字形鉄製品）がある。須恵器は、杯のA 3類（270）、B 1類（269）、杯蓋の1類（268）3類（267）、壺（264・265）がある。土師器は、壺のA 2類（271・272）、B 1類（276・277・279）鍋の1類（282）2類（278・280・281）がある。鉄器は、刀子（732）とL字形鉄製品（722）がある。刀子はカマドの西脇から出土しており、残存部の長さ13.7cm刃部の幅1.1cm、炭が付着する。L字形鉄製品は煙出の西側の穴から出土した。断面は長方形を呈する。時期は鍋2類があることから、2期とする。

#### S I 11新 (第51図)

須恵器（杯・杯蓋）、土師器（壺・鍋・椀・皿）、刀子がある。須恵器は、杯のA 1類（237）3類（236）、B 1類（244・238・239・242・243）、杯蓋の1類（241・245）4類（240）がある。土師器は、壺B 1類（246・252・266）2類（253・254・256・258）、小型壺1類（247・249・250・259）2類（248・251・260・261）、鍋の1類（257）、椀の6類（263）、赤彩の皿（262）がある。刀子（733）は、刃部の幅7mmである。切先が重なるので、2本になるとも考えられる。

また遺構の重なるところなので、他の遺構（S I 11古・13・S D 73）の遺物も混入している可能性がある。床面出土もししくはS I 11新の遺物であることが確実な遺物は（247・248・249～251・254～256・258・260・261）で、小型壺2類から時期は3期であると考える。

#### S I 13 (第52図)

須恵器（杯・杯蓋）、土師器（壺・鍋）がある。須恵器は、杯のA 1類（283・284・285）、B 4類（289）、杯蓋の4類（286）がある。土師器は、壺のB 1類（287・291・293・295）B 3類（292）、小型壺の1類（288・290）、鍋2

類(294)がある。杯蓋4類・鍋2類があることから、時期は2期とする。

(境)

S I 3 A・3 B (図版46・47 写真図版29~33)

遺物は49~54が3Bカマド、55~60が3Aカマド出土品であると覆土からの出土品でわざかに混じりがある。

須恵器(杯・杯蓋・壺)、土師器(壺・壺)、鉄製品(刺突具・錐・釘)墨書き土器がある。須恵器は、杯A 2類(49)A 4類(27・56)A 5類(28・29・31)杯B 5類(30・57)杯蓋3類(33・34・55)5類(32・35)及耳瓶(36)がある。また、31は墨痕が残り「田?」であろうか。土師器は、壺B 1類(46・47・50)B 2類(53)B 3類(51・58・59)小型壺1類(39・40・44)2類(38・41・42・45・48・54・60)3類(43)鍋2類(52)3類(37)がある。鉄製品は、S I 3 Aかまど付近から多く出土し、釘(724)錐(728)刺突具(719~721・724・725)不明品(726)などがある。725は、基部に木質が残る。カマド出土品をみると、3B出土の壺B 51では口縁に段をもち緩く外反するが、3Aでは、立ち上がる。また杯では、体部の立ち上がりがより外反する。このことから3Bを3期、3Aを4期とする。

S I 4 (図版47・48 写真図版29・30)

西をS I 3 A・3Bに切られ、北西でS I 21を切る。遺物は、床より5cm程浮いた状態でカマドの前面から多く出土する。須恵器杯A 3類(69・71・73)杯A 4類(70)杯A 5類(68)杯B 1類(73・74・77)杯B 2類(75・76)杯B 3類(79)杯蓋3類(63・64・66)杯蓋4類(65・67)横瓶(61)壺4類(81)長頭壺(80)鍋(82)がある。67は、頂部糸切りで内面に墨痕が残る。土師器は、壺A 類(62・93・96)壺B 1類(83・84・86・87・100・101)壺B 2類(85)壺B 3類(97・103)小型壺1類(91・92)2類(88~90)鍋1類(98)鍋2類(99)がある。85は、カマド内出土。壺Bなどでは、口縁端部の作りがしっかりと取りされていることやB 3類をほとんど含まないことから2期と考える。鉄製品は釘(714)がある。また、鍋82の同一固体破片がS I 3 Bから、423の破片が覆土から出土している。

S I 17 (図版53)

須恵器(杯・杯蓋・壺蓋)土師器(壺・鍋)鉄製品がある。一部S I 18のものが混入する。328・340・342は、カマド内出土。須恵器杯A 3類(330)B 4類(332)その他、口縁部に括れをもつ331がある。蓋は杯蓋1類(326・327)5類(328・329)壺蓋(339)がある。327は内面に墨痕がみられる。土師器は、壺B 1類(333・343・338)B 2類(337)小型壺1類(334・340~342)2類(335・336・342)鍋1類(354)2類(344)がある。また、須恵器鍋423の破片が出土している。杯蓋1類、壺口縁部の特徴から2期とする。

S I 18 (図版53)

須恵器杯、土師器壺・鍋がある。須恵器杯A 1類(323)、土師器壺B 2類(320)鍋1類(321)がある。S I 17に切られるところから1期と考えたい。

S I 19 (図版53)

遺物は、少なく須恵器杯蓋2類(324)5類(325)土師器鍋2類(322)がみられる。1期と考えられる。(酒井)

S K 57 (第53図)

須恵器(杯・杯蓋・壺)、土師器(壺・鉢)がある。杯はA 2類(347~349)、杯蓋は3類(351・352)、壺は直口壺(350)、壺はB 1類(354)、B 2類(346)がある。鉢353は口径約14cm器高8.5cmで、外面縦ハケメ内面横ハケメ調整である。壺B 2類から2期とする。

S K 58・S K 59 (第53図)

S K 58には土師器壺B 1類(356)がある。S K 59には土師器壺A 2類(357)がある。壺B 1類・A 2類とも1期のものであるが、S K 58は3期以降とみるS B 32の柱穴であり、古い時期のものの混入であろう。

S D 75 (第55図)

須恵器(杯・杯蓋・壺・壺)、土師器(壺・鍋)がある。須恵器は、杯のA 3類(431)、B 2類(432~437)、B 5

類（438・439）、杯蓋は1類（443・444）、3類（440～442）、4類（445～447）があり、長頸瓶の頸部（448）、胴下半部（449）、壺の口縁部（450）がある。436は底部裏に墨書があり「又」とも読めるが一部であり判然としない。土師器は、壺のB1類（451）、鍋の1類（453）、小型壺の2類がある。土師器小型壺から2期には埋まったものと考えられる。

（久々）

#### SX6（図版53 写真図版32）

撥高地のはば中央に設けられた水溜め状の遺構でSD96に続く。遺物は、最も新しいものを含むが、古い時期から引き継ぎ使用されたと考えられる。須恵器杯蓋1類（358）杯A2類（369）A4類（368）A5類（370・371）A6類（372）B2類（360・361）B4類（362）広口壺（365）壺蓋（366）がある。372は、底部糸切りの杯Aで「山か古万呂」と墨書きされる。土師器は、椀1類（373）小型壺2類（367）がある。373は、外面に「柴」と墨書きされる。このSX6は、墨書き土器の出土があることから水に関係した祭祀を行なっていた可能性がある。

#### SD96・97（図版53～55 写真図版29～34）

この2条の溝は、同一路流を流れる溝でY63より西では下層と上層の遺物の接合がみられるが、Y65より東では、時期幅をもつ遺物が出土しておりSX6に近づくにつれて路路は新しいものとなる。また、遺物は西に行くにつれて多くなる。ここでSD96出土品として扱う遺物は、Y65以前のものである。

SD96 須恵器杯蓋1類（363・364）杯（359）土師器椀1類（374・375）がある。359は、外面に文字の一部が見えるが意味不明である。杯蓋は2期、椀は糸切り底で4期である。

以下、遺物は溝内出土品を一括して扱う。須恵器は、杯・杯蓋・壺・鉢・壺蓋・土師器壺・鍋などが大量に出土し、調査遺構では遺物量が最も多い。須恵器杯A1類（376～378）A2類（379・380・388・393）A3類（381～386・390～392・394）A5類（387・389）杯B1類（395～400）B2類（401～407）B3類（408・409）杯蓋1類（410・411）4類（412・414）5類（413）壺（416）壺蓋（415）鉢（423）がある。414は、内面に墨書き痕が残る。また、423はSI4・17などから同一個体が出土している。土師器は、壺B2類（424・425・427・428）B3類（426）小型壺1類（417～419・421）2類（420・422）鍋2類（429・430）がある。遺物は、1～4期の幅をもち2・3期が多い。

#### SD83 須恵器杯B3類454。外底面に「上山」あるいは「歩」と墨書きされる。SD95 須恵器杯A1類455がある。

#### 包含層の遺物（図版56 写真図版38）

須恵器杯A1類（487・488）杯B2類（490）杯蓋1類（492）3類（491）壺1類（498）壺2類（505）壺4類（506）短頸壺A類（494）壺蓋2類（493）長頸壺（501）受口壺（500）注口（499）などがある。489は、杯底部片で「立か」の墨書きがある。土師器は、小型壺の底部502、土鉢503・504、赤色土器椀B1類495がある。

#### 石器（図版60 写真図版38）

石器には、砥石・敲石がある。砥石は、自然石を割り平らな面を作り使用するため、自然面を残す例が多い。736・738・742は、茶褐色の泥岩を使う。また、742は、紐掛けの穴を穿つ。737は、河原石の端部を利用する敲石で、砂岩製。740・741は、縄文時代の石器。740は打製石斧で摩滅が激しい。X28Y63区のSD1出土。741は晩期と考えられる石棒で、X51Y92区出土。この他に縄文時代の遺物はみられない。

（酒井）

#### 河跡（第55・56図・写真図版30・32・34）

河跡からは、多数の土器が出土した。これらの土器は、時期が1期～3期のもので、4期以降のものは含まれない。このことから、この河跡は、4期にはすでに埋まっていたと考えられる。

特記すべきものとしては、底部外面に「寛」の墨書きのある須恵器杯B（470）、須恵器壺（475・476）、須恵器鉢（486）、赤彩の土師器高杯（478）、内黒の土師器高杯（479）がある。

（境）

(2) 中・近世の遺物 (図版57~59 写真図版35・36)

中世の遺物には、上師質土器・珠洲・八尾・越前・青磁・白磁・青白磁・瀬戸美濃・越中瀬戸・砥石・銅錢・鉄製品・羽口・鉄滓・砥石などがある。近世の遺物は、伊万里・唐津・越中瀬戸・越中丸山・京焼風の陶器などがある。中世の遺物は、大きく2つに分けられ12世紀後半~14世紀前半と、16世紀に主体がある。しかし、16世紀の遺物は少ない。また、近世の遺物は、多くが用水路の流路内の砂層から混在して出土している。

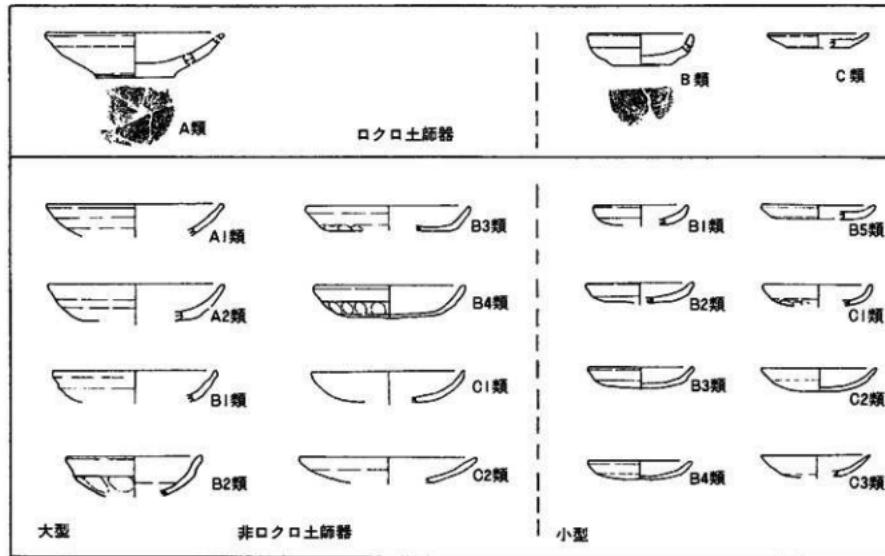
**土師質土器** 遺物量はそれほど多くない。また、全器形が判るもの、供伴する遺物がみられる例は少ない。そのため器形や製作技法などの特徴から分類を行なった (第32図)。

**ロクロ土師器** 平安時代からの土師器製作技法により作られ、底面に回転糸切り痕を残す。底部は、比較的厚く仕上げられ、中には高台となる例もある。

**A類** 口縁がゆるく外広するもので大型 (507・511・542~545・550・551・616) と小型 (508・615・617・632) がある。**B類** 小型で口縁がやや立つ (605)。**C類** 小型で浅い皿状のもの (620)。いずれも口縁部は、ロクロナデが施され面取りはされない。その他、図示していないがA類で柱状高台をもつ例が1点ある。

**非ロクロ土師器** いわゆる手づくり成形により作られる土師質土器で底部には、指頭圧痕などを明瞭に残す。

**大型品** **A類** 口縁部に二段のナデを施すもので、直線的に外広する A1類 (655) と、まるみをおびて外広する A2類 (529・622・624・655・657・665) がある。両者とも、口縁の面取りは行なわれない。内面は、丁寧にナデで仕上げられる。**B類** 口縁に面取りを行ない一段のナデを施すもので、やや深く椀状の B1類 (534・535・581・658)、B2類 (558・602) と、平らな底部から折れあがる皿状の B3類 (510・579・580・656・659・665)、B4類 (528・530・574・583・595・599・652~654・666・667) がある。両者とも外面のナデは比較的強く施す。**C類** ゆるい一段ナデを施し口縁端部を上へつまみ上げるように作るもので、まるみを帯びて立ち上がる C1類 (668) と、直線的



第32図 土師質土器分類

に開き端部をやや彫れ気味にする C 2 類 (623・669)、口縁部を厚く仕上げ外反する C 3 類 (675・678) がある。

小型品 B 類 口縁部を面取りし、一段ナデを施すもので、比較的口縁部、胴部の面取りがゆるい B 1 類 (586・589・600・604・650) B 2 類 (509・519・564・601・662・680・681)、両者の面取りが強く施される B 3 類 (514・518・527・532・546～548・553・557・559・575・576・598・606～608・670～674・679)、口縁部の面取りがやや丸くなる B 4 類 (517・549・554・565・566・588・594・682)、皿状で口縁部の面取りのゆるい B 5 類 (515・525・526・539・540・577・578・603・614・628・629・674・683・684) がある。C 類 ゆるい一段ナデを施すもので、まるみを帯びて立ち上がる C 1 類 (621・649・660)、直線的に外広し、ナデ幅の狭い C 2 類 (531・612・651・661・663・664)、底部までナデを施す C 3 類 (648) がある。この非クロコ土器器は、おおむね①京都系二段ナデ、②口縁面取り、強い一段ナデ、③一段ナデへと変化することが知られている【北陸中世土器研1992】。この成果をもとに年代を考えると大型の A 1・2 類、C 3 類は、12世紀後半～13前半、B 1・B 3 類は、13前半～中頃、B 2・B 4 類は、13後半～14初め、C 1 類14世紀前半、小型 B 1・B 2・B 5 類が12後半～13前半、B 3 類13前半～中頃、B 4 類13後半～14初め、C 1・C 2 類14世紀前半と考えられる。また、大型 C 2・小型 C 3 類は、16世紀頃の土器質上器である。

珠洲 片口鉢・壺・壺がみられるが片口鉢が最も多く、次いで壺・壺の順である。

片口鉢 オロシメをもたない小型の585・691・692・693と大型でオロシメが施されるものがあり、散漫で不規則なオロシメを施す537・538・561・610・635・702、放射状に荒く施す536・570・591・611・626・627・693・701、内面に密にオロシメを施す562・690などがある。その他、523・592・596・633が口縁部破片、567・634が底部破片である。吉岡氏による編年【吉岡1989】によると、小型の鉢は1期、散漫なオロシメが施されるものは2期、放射状のオロシメをもつものが2～3期、密にオロシメが施されるものが4期に位置付けられている。中でも、底部に静止糸切り痕をもつものや放射状オロシメを施すもので口縁部に強い幅広のナデをもつものは、古く2期と考えられる。

壺 小破片が出土している。541・560・568・590は、同一固体片で細かく打ち割られた破片が遺構内や包含層から出土している。590・694は1期。524・593・625は、細かなタキギが施される胴部破片で2期ぐらいであろうか。

壺 波状文を施す口縁部破片と胴部片で、この他に無文のものが2点ほどある。696は、口縁部・頸部に細かな波状文を施す壺で、4期。697は、胴部に波状文を施すもので2期と考えられる。

八尾 壺・鉢がある。鉢 (636・699・700) は、いずれも無文でオロシメを施さない。口縁端部には、幅広のナデを施す。壺 (695) は、頸部片で口縁を欠く。時期を決めるには、難があるが13世紀後半と考えられる。瓷器系陶器の編年は、常滑窯製品の年代が50年ほど遅ることが明らかにされている【中野1992】。また、吉倉 A 遺跡では散漫なオロシメを施す片口鉢が出土しておりオロシメは、珠洲2期の手法に似る。また、八尾窯出土の壺では、口縁端部を折り返し舌状に引き出すものなどもあり、窯の創業は13世紀前半では少なくとも古くなるようである。単純に対比できないが常滑窯編年に当てはめると、八尾窯1群は13世紀前半、2群は概ねそれ以降の年代が与えられる。

中国製磁器 青白磁・青磁・白磁がある。645・646は同一固体の梅瓶で12世紀。643は、同安窯系の青磁皿。609・631・638は龍泉窯系の碗で13世紀のもの。512・571・582・583・584・639～641・644は、鎌倉弁文の龍泉窯系青磁で582・639は同一固体でX30Y86とSK32出土。13世紀後半から14世紀のもの。637・642は、くすんだ釉のかかる無文の青磁碗で、14世紀以降の新しいもの。白磁は、2点出土している。520・533は、口はげの碗で同一固体。それぞれSK 1・2 から出土している。647は、15世紀のもの。

瀬戸美濃 521は、山茶碗で13世紀後半のもの。

685～689は、いわゆる瀬戸美濃製の陶器で天目茶碗 (685・686)、おろし皿 (687)、合子蓋 (688)、灰釉皿 (689) がある。14世紀後半～16世紀後半と考えられる。

その他の遺物 552は、小型でコップ状の土器器底部でよく火を受けている。製塩土器の可能性がある。時期不明。

遺物の出土状況をみると遺跡北東の土坑群（SK12・18・20・23・36・40・42・43）では、ロクロ土師器の出土があり12世紀後半から13世紀にかけてのものと考えられる。また、北西建物群は、ロクロ土師器、珠淵2期の片口鉢などがみられ12世紀後半から13世紀前半にかけての建物群と考えておきたい。

中央建物群・南建物群は、遺物に幅が見られ時期決定に決め手を欠くが中心的建物群であり、土師質土器B4類以降のものがみられないことから13世紀から14世紀前半の間に営まれたと考えたい。（酒井）

#### 金屬製品・羽口（第60図・写真図版37）

金属製品は、表土・第1層・中世遺構から、鉄器・鉄滓・古銭を合わせて約75点が出土した。

703の鍔はS B 7のP 2から出土したもので、全長13cmを測る。704は包含層からの出土で、刀子と思われる。残存部の長さ7.5cm、刃部の幅1.5cmを測る。705の鎌はS K 29からの出土である。706は器種不明で、S K 25・26のどちらに伴うかは不明。708（刀子か）はP 49から、709の刀子はS K 1から出土した。残存部の長さ19.2cm、刃部の幅1.3cmを測る。710（刀子か）はS K 7からの出土で、茎部が残る。刃部の幅2.8cm、基の幅2cmを測る。711・712は鉄滓で、711はP 144から、712はS K 2から出土した。713（釘か）はP 94からの出土である。残存部の最も太い部分が5mm四方の正方形で、先細りになる。715・716は釘で、715はS K 29から出土し、全長12cm、断面0.5cm四方になる。716はS K 32からの出土で、全長4.7cm、断面5×4mmの長方形になる。717・718はともにS K 2からの出土で、717は器種不明、残存部の長さ16.8cm、718は鋤鍤車の軸と思われ、残存部の長さ17.4cm、断面は一辺4mmの正方形である。717は断面が正方形から徐々に平たくなる。730の刀子は、包含層の出土で、残存部の長さが10.7cm、刃部の幅が太いところで1.2cmを測る。

フイゴの羽口は2点出土している。569は、S K 26からの出土で炉側の先端部がガラス状に融解する。残存部の長さ4.8cm。707はS D 2からの出土で、同じく炉側の先端部であり外側が黒いガラス状になり気泡が目立つ。残存部の長さ2cm。

この他に、器種不明品や鉄滓が数多く出土している。特に土坑からの鉄滓の出土が目立つ。これらの鉄滓は、精練鐵治滓であると思われ、フイゴの羽口が出土していることと合わせて一部で鍛冶を行なっていたことが窺える。鉄滓が出土した土坑は、S K 1・2・7・13・26・29・32・35・50である。

古銭は、6点出土しており（写真図版37）、この内2点が中世のものである。2点とも北宋銭の「熙寧元寶」で、初鑄年は1068年である。1点は、S K 2の西脇からの出土で、篆書体。もう一点はX 9 Y 72グリッドの表土からの出土で、行書体。残りの4点は全て「寛永通寶」で、包含層からの出土である。（境）

#### 砾石（第60図）

表土・1層及び中世の遺構から17点出土した。遺構に伴うものは、S K 2（743）、S K 26（739）、S D 2、S D 23、S D 53からの出土である。目の荒い砂岩製のものと泥岩製のものがあり、後者が多い。大きさは長さ5cmから10cmの小型と15cmの大型のものがある。

739は泥岩製で研ぎ面が湾曲している。743は板状で研ぎ面が平坦である。744は河原石の泥岩を用いている。

#### 種子・骨

S K 35とS K 45からマメ類、コメ、ムギ、カキ、モモの種子、魚と思われる焼骨片が出土した。

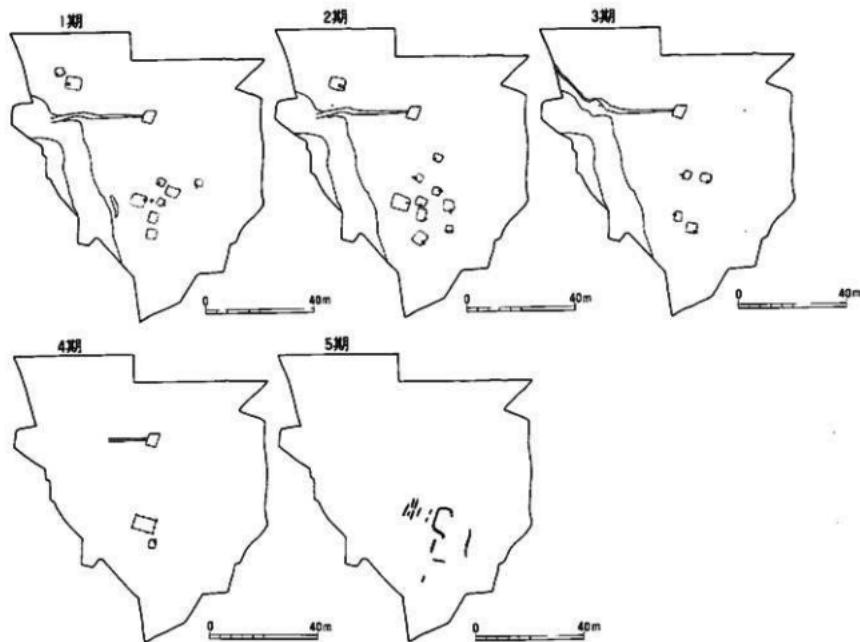
（久々）

#### 4 まとめ

吉倉B遺跡の出土遺物は、绳文時代晚期、奈良時代・平安時代（8世紀後半～9世紀後半）、平安時代末、鎌倉時代（12世紀後半～13世紀後半）、南北朝時代、室町時代、江戸時代以降のものがある。遺構は、奈良時代・平安時代の堅穴住居跡・掘立柱建物・土坑・溝・河跡と、平安時代・鎌倉時代・南北朝時代の掘立柱建物・土坑・溝がある。その様なことから、遺跡の中心となる時代は、奈良時代・平安時代と平安時代から南北朝時代の二時期である。その二時期の遺構は発見される深さが異なり、遺構が確認される面は約10cmの間隔がある。また、それぞれの遺構について見ても、4回ほどの重なりがあり、各時期がさらに数期に分けられる。以下では、遺構の重なり・出土遺物の特徴から遺構の時期区分を行い、その変遷と遺構の性格について考えてみたい。

##### (1) 奈良時代・平安時代（第33図）

この時代の遺構は、堅穴住居跡20棟、掘立柱建物1棟、土坑10か所余り、溝12条、河跡1条がある。これらはその重なりぐあいから五期に分けることができる。1期は堅穴住居9棟（S I 20(7)・9・11古・14・16・20・21・22）、S D 96、S X 6、河跡がある。2期は堅穴住居10棟（S I 1・4～6・8・10古・12・13・15・17）になる。3期は堅穴住居4棟（S I 2・3古・10新・11新）になり、S D 96が少し流れを変えS D 97となる。4期は河が埋まり、堅穴住居1棟（S I 3新）になり、掘立柱建物S B 32が出現するようである。S D 96も細々とした流れになる。5期は溝12条（S D 72～74・76～83ほか）だけとなる。堅穴住居跡は3棟ほどが重なっているが、主軸が同じでわずかに位置をずらす程度の重なりかたである。このことは、建て替えにあたっては、前の住居跡の存在が知られていたことを



第33図 吉倉B遺跡古代遺構の時期別配置

物語る。また、須恵器・土師器の特徴も連続性がある。すなわち、各時期の遺構はある時期に一齊に建てられたのではなく、少しづつ建て替えていったものと考えられる。

各時期の年代については、その実年代を知ることができる遺物はない。ただこれまでの研究成果と対比して、1期は8世紀後葉、2期は8世紀末、3期は9世紀前葉、4期は9世紀中葉、5期はそれ以降と考えられる。県内の集落遺跡では、1期は大島町荒畠遺跡〔大島町教委1991〕、2期は砺波市高沢鳥II遺跡〔砺波市教委1978〕、3期は富山市南中田D遺跡S119、4期は同S125〔県埋文1991〕と同じ時期を見る。窯跡では、1期は古沢3・4号窯跡、2期は上末釜谷1号窯跡〔富山大学考古1989〕、2期は小杉町石太郎J遺跡1号窯跡〔県埋文1992〕、3期は富山市室住池1号窯跡〔池野1988〕、4期は井波町犬蔵遺跡〔上野1985〕とはほぼ同じ時期を見る。1期の前は富山市長岡杉林遺跡の奈良時代の遺物、4・5期の後は、同平安時代の遺物が該当すると思われる。吉倉B遺跡と長岡杉林遺跡とでは、遺跡の形成と廃絶の時期が異なり、古代集落遺跡のありかたを考えるうえで注目される。

遺跡の性格は、竪穴住居跡があること、出土遺物が食器である須恵器杯・杯蓋・土師器碗が50%、煮炊き用の土師器甕・鍋が43%を占めること、その他の性格を推測させる特殊な遺物がみられないことから、一般的な集落と考えることができる。ただ、その成立と廃絶にいたる背景についてはまだよくわからない。文書等史料によれば、8世紀後半の時期は、天平15年(743)の整田永年私財法の施行により、東大寺・西大寺などの有力寺院や在地豪族層による大規模な水田開発がおこなわれた時期である。吉倉B遺跡は、そのような動きのなかで誕生した開墾集落と思われる。その集落には「山古万呂」と記された墨書き土器があり、そのように名乗る人物がいたことがわかる。(久々)

## (2) 中世の遺構について(第34図)

中世の掘立柱建物は36棟確認され、大きく4期に分類したのが第34図である。時期区分は、調査区内にみられる建物群を各単位ごとに相対的に区分したもので相互の関係は、検証されていない。掘立柱建物は、比較的北から東への振れが大きいものと振れが小さいもの(中央建物群の南側に位置する建物SB1~3など)があり、後者が新しい建物を含んでいると考えられる。建物の重複関係は、最も少ない北西建物群で4回、南建物群で5回、中央建物群で7回が考えられ、それぞれの群が大きく移動することなく、2~3棟が立て替えを繰り返すようである。また、大きな変化としては、3群が次第に中央建物群に集約され、遺跡は終止するようである。以下各期の概略を記す。

I期 建物は、遺跡の立地する微高地上に散漫に建てられ、区画溝SD7・31は、設けられない。北東端のやや低い部分に、土坑群が作られる。溝は、SD27が中央に存在したと考えられる。掘立柱建物は、SB18・26が北側に、中央にSB9・24・31、南にSB20がある。中でもSB31は、4面に樋を設ける3間4間の建物。SB24は、唯一の隅柱建物。

II期 最も盛況な時期で建物群の配置や区画割が設けられる。

IIa期 北西にSB16・17・19、中央部北東にSB4~6・12・30・39、南にSB11が建てられ、区画溝が設けられる。しかし、東西に設けるSD31はSB5・6などの建つ部分に流路がありIIb期に作られたとも考えられる。しかし、南北の区画溝SD38は、この段階で作られていたと考えられる。SB4・39は、同一の建物の可能性を残すが北側と南側の建物の難がややざれることから別の建物とした。また、各群に土坑つき建物がみられる。

IIb期 北西建物は、やや北側のSB15・27に移動する。また、中央では、北東隅から区画の中央寄りに建物が移動し、SD31に方形の区画が設けられる。建物群が最も集約された配置をもつ。

IIc期 北西建物群が衰退し、中央と南に建物が移ると考えられる。建物の推移を考えると一時的な目的が達成され、当初の集落構成からなんらかの変化が見えはじめた段階としてとらえることができよう。

III期 集落が次第に衰退を初め、終止する段階と考えられる。

IIIa期 南建物群が衰退を初め、中央に建物が集約される段階で、区画溝との方向性が失われ、建物数も減少する。

IIIb期・IIIc期 中央に建物がみられるだけで集落が維持されなくなり、単位家族が存在する段階。どのような理

由から集落が変化するかは、はっきりしないが原因として莊園管理体制の衰退による農地の荒廃あるいは、集落の統合化など管理体制の変化が原因である可能性が強く、自然災害などによる荒廃とみられる状況は確認できない。

Ⅳ期 集落などに関係する建物などの遺構はみられない。耕作に関係する用排水路が南北、東西にみられるだけである。このような状況は中世後半から長くつづきこの地域では、集落は營まれない。

吉倉A遺跡の南部分で確認された中世集落は、概ねこのような変遷をたどると考えられる。時期は、Ⅰ期が12世紀後半～13世紀初め、Ⅱ期が13世紀前半～後半、Ⅲ期が13世紀末～14世紀中頃、Ⅳ期をそれ以降に位置づけておきたい。

今まで運動公園内に発掘調査を実施した遺跡は10遺跡で、その内8遺跡で本調査を行ない任海遺跡を除く遺跡では、集落の主要部分を発掘している。これらの遺跡は、いずれも古代後半に成立し、中世前期に据立柱建物をもつ集落として營まれ、後半には衰退するという共通の要素をもっている。また、比較的せまい地域内に立地し、同一の基盤の上に作り出された地域共同体的な要素の強い遺跡群である。このことは、西を神通川、東をその支流の熊野川に挟まれた地域（新保地区）を集中的に再開発を行なった結果と考えられる。このような事例は、上市町から立山町にかけての地域などに知られ【酒井1990】中世集落の出現時期の一つの特徴である。運動公園内の遺跡を含む新保地区内の遺跡は、このように中世莊園成立期の開発形態を端的に示していると考えられ、計画的に村落を配置し、地域開発を行なった莊園経営の一端をうかがわせる。

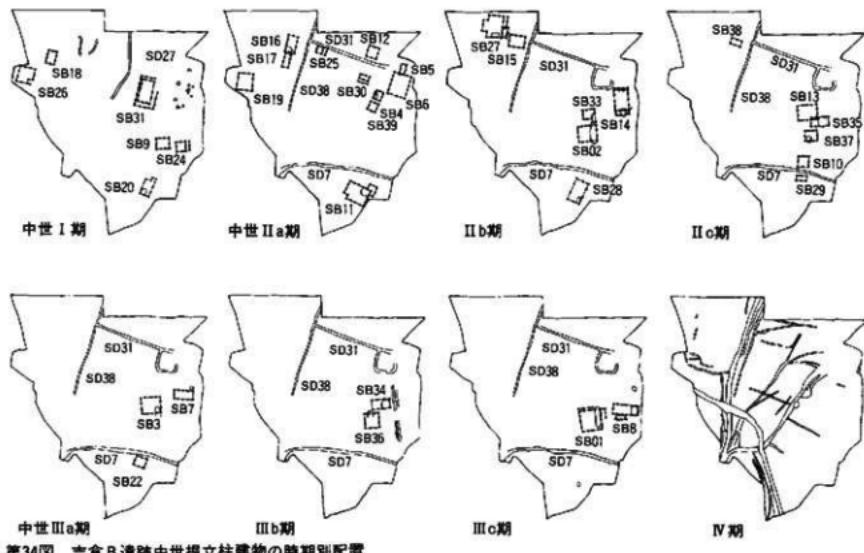
（酒井）

### （3）中・近世の遺物出土分布及び器種組成について（第35図）

中・近世の遺物分布図と器種組成（中世のみ）を第35図に示した。分布図・組成ともに作成にあたっては、同一個体と思われるものは、1点として数え、個体数でデータをとりまとめた。以下、中世に限って若干考察した。

分布図より、遺物の出土は遺構の集中地点と重なることが分かる。遺構出土の遺物も図上に示したためにこのような結果になると思われる。北西建物群において遺物の出土が少ないので、かつてのは場整備のためであろう（第30図）。また、遺跡の南西部において南北に帯状の分布が見られるのは、最近まで利用されていた用水の影響と思われる。

これらのことを見て、次に土器の同一個体の散在について見てみたい。今年度の調査区において同一個体の散



第34図 吉倉B遺跡中世据立柱建物の時期別配置

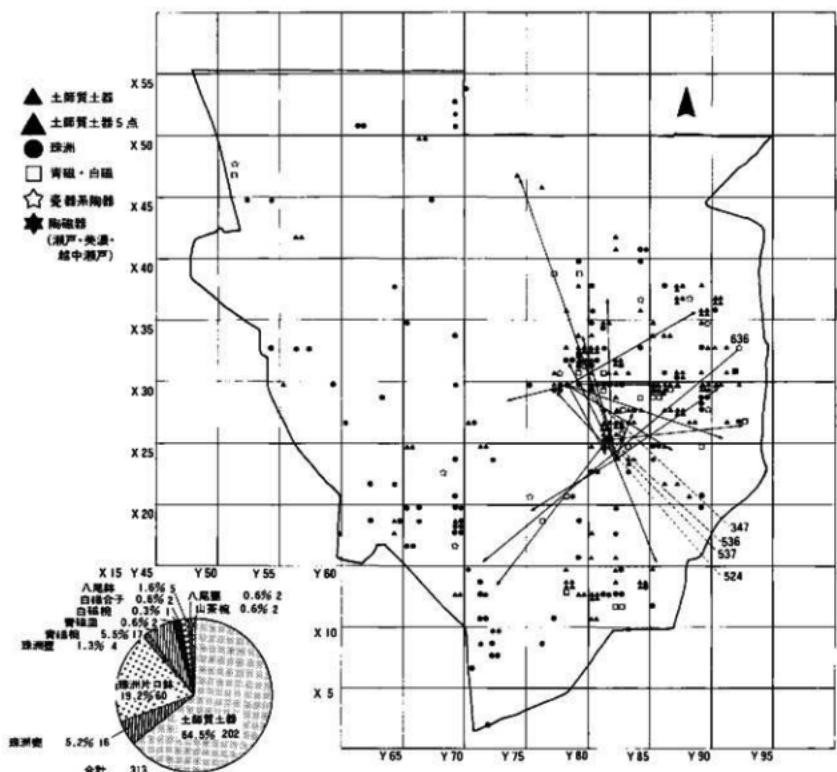
在が目についたので、その代表例を同図に示した。遺構を中心に同一個体の散らばりを矢印で表し、点線で引きだした数字は土器の番号を表す（ドットの上に付した番号も同様）。24点の破片のうち12点が遺構からの出土で、他は、9点が包含層、3点が表土からの出土である。さらに、遺構出土の破片中10点は、次のように遺構間で接合する。

524 : SK 1 (2点) · SK45 · P105 · SD 2 (2点) 585 : P30 · SK32 536 : SK 2 · SD 2

以上のことから、同一個体の土器がかなり広範囲に散在することが分かる。今回は図示しなかったが、636の破片の一つは60m離れたX 60 Y 94から出土した。このことは、当遺跡が集落として広範な広がりを持っていたことを示す。

器種組成を円グラフにして示した。土師質土器64.5%、珠洲25.7%で、当遺跡の南に位置する南中田D遺跡の土師質土器27.7%、珠洲55.9%というデータと対比すると数値が逆転する【富山県埋文センター-1991】。但し、南中田D遺跡のデータは破片数によっているため一概には言えない。次に用途という観点からは、集落跡である当遺跡において、比倒的に高い比率を食膳具が占め、統いて調理具が比較的高く、貯蔵具の比率はかなり低くなる。一般的な日常生活に則した数値と言えるであろう。次年度以降の調査により増加するデータとともに、周辺の遺跡を含めた検討を今後の課題としたい。

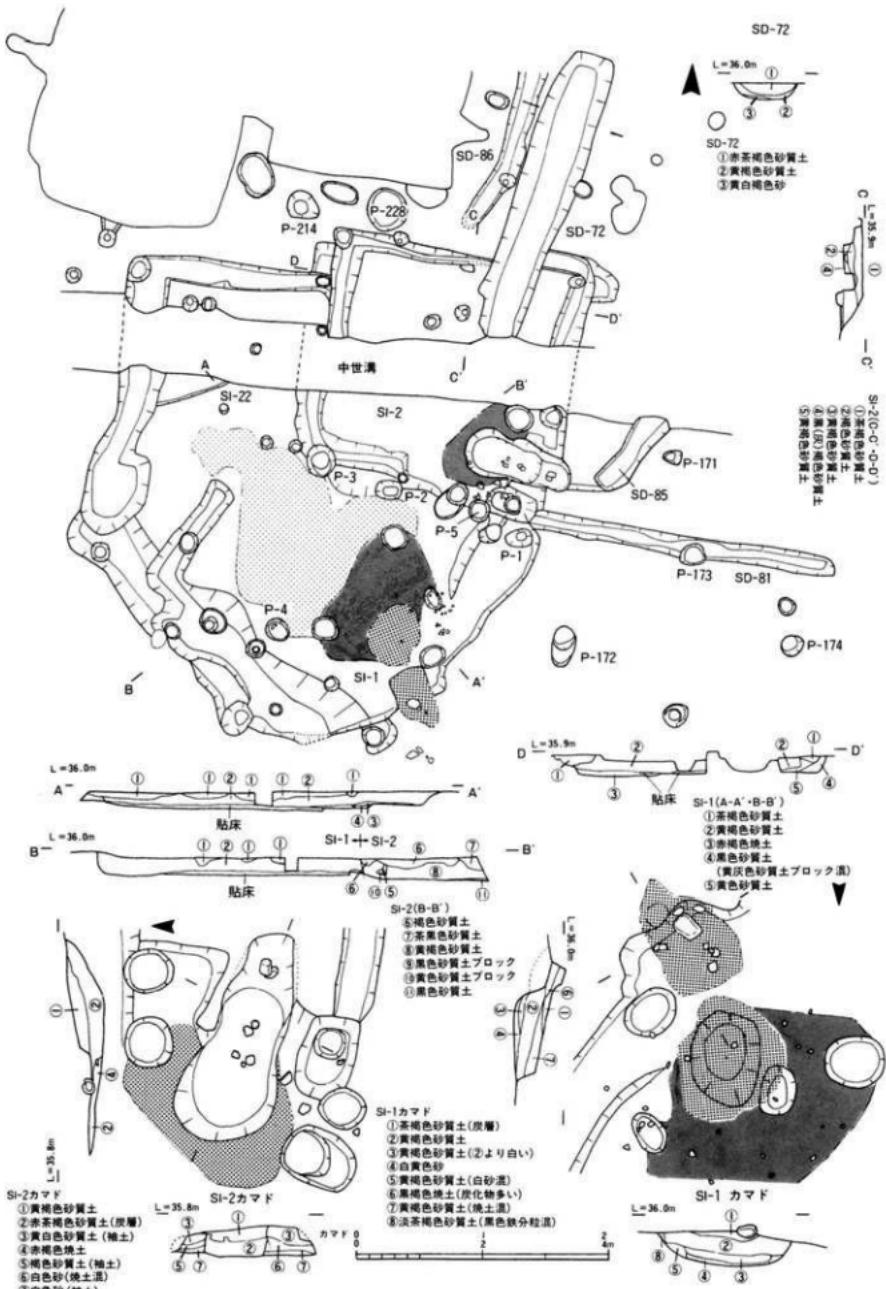
(境)



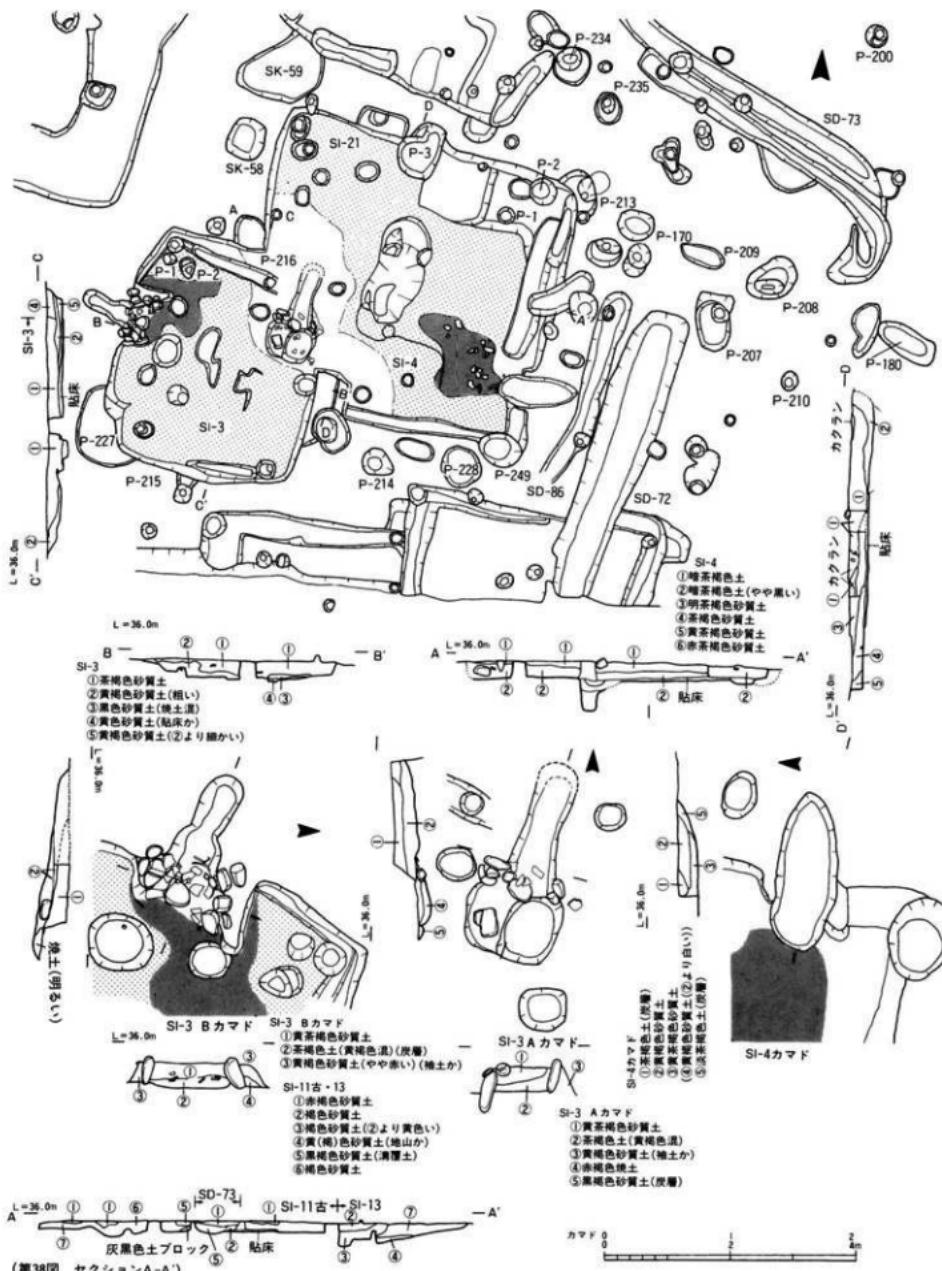
第35図 吉倉B遺跡中・近世土器分布図及び個体数から見た中世土器器種組成

## 引 用・参 考 文 献

- |               |      |  |
|---------------|------|--|
| 安達 志津         | 1989 | 「富山跡内での墨青土器発見から」『富山市考古資料館報』No.19<br>富山市考古資料館                       |
| 宇野 隆夫         | 1986 | 「越中丸庄城跡の土師器」『大境』10号 富山考古学会   |
| 池野 正男         | 1988 | 「射水丘陵における9・10世紀の須恵器窯跡」『大境』第12号 富山考古学会                              |
| 上野 章          | 1985 | 「井波町大蔵遺跡出土遺物の紹介」『大境』第9号 富山考古学会                                     |
| 大島町教育委員会      | 1991 | 『大島町荒畑遺跡発掘調査概要』  |
| 川島 宙次         | 1992 | 『古代の伝承・民家の来た道』 相模書房  |
| 黒田日出夫         | 1984 | 『日本中世開史の研究』歴史科学叢書 校倉書房   |
| 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 1991 | 『堂山下遺跡 県立毛呂山養護学校建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』<br>埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第99集        |
| 群馬県埋蔵文化財センター  | 1989 | 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 - 塩尻市内その2 - 吉田川西遺跡』                        |
| 酒井 重洋         | 1990 | 「越中における在地窯の諸問題」『中世北陸の在地窯 - 生産と流通の諸問題 - 』<br>第3回北陸中世土器研究会 北陸中世土器研究会 |
| 砺波市教育委員会      | 1978 | 『富山県砺波市梅桜野遺跡群予備調査概要』   |
| 富山県           | 1976 | 『富山県史通史編Ⅰ 原始・古代』   |
| 富山県埋蔵文化財センター  | 1990 | 『栗山椿原遺跡・南中田A遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田C遺跡』富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査概要Ⅰ                  |
| 富山県埋蔵文化財センター  | 1991 | 『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』  |
| 富山県埋蔵文化財センター  | 1992 | 『石太郎I遺跡・石太郎J遺跡』ジャパンエキスポ関連遺跡群発掘調査報告書Ⅱ                               |
| 富山県埋蔵文化財センター  | 1992 | 『吉倉B遺跡』『富山県埋蔵文化財センター年報』平成3年度                                       |
| 富山市教育委員会      | 1989 | 『富山県総合運動公園内遺跡群試掘調査概要』  |
| 富山市教育委員会      | 1987 | 『長岡杉林遺跡』   |
| 富山大学考古学研究室    | 1989 | 『越中上末窯』富山大学考古学研究報告第3冊 富山大学人文学部考古学研究室                               |
| 中野 晴久         | 1992 | 『⑥常滑窯』『東日本における古代・中世窯の諸問題』大戸古窯跡群検討会                                 |
| 広瀬 和雄         | 1988 | 『中世村落の形成と展開』『物質文化 考古学民俗学研究』50 物質文化研究会                              |
| 藤田 邦雄         | 1989 | 『中世土器素描』『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会会誌32号                                     |
| 北陸中世土器研究会     | 1991 | 『城館遺跡出土の土器陶磁器』   |
| 北陸中世土器研究会     | 1992 | 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』  |
| 入善町教育委員会      | 1985 | 『じょうべのま遺跡-C・K地区の調査-』   |
| 八尾町教育委員会      | 1985 | 『富山県八尾町長山遺跡・京ヶ峰窯跡緊急発掘調査概要』   |
| 吉岡 康暢         | 1989 | 『日本海域の土器・陶磁 [中世編]』人類史叢書10 六興出版                                     |

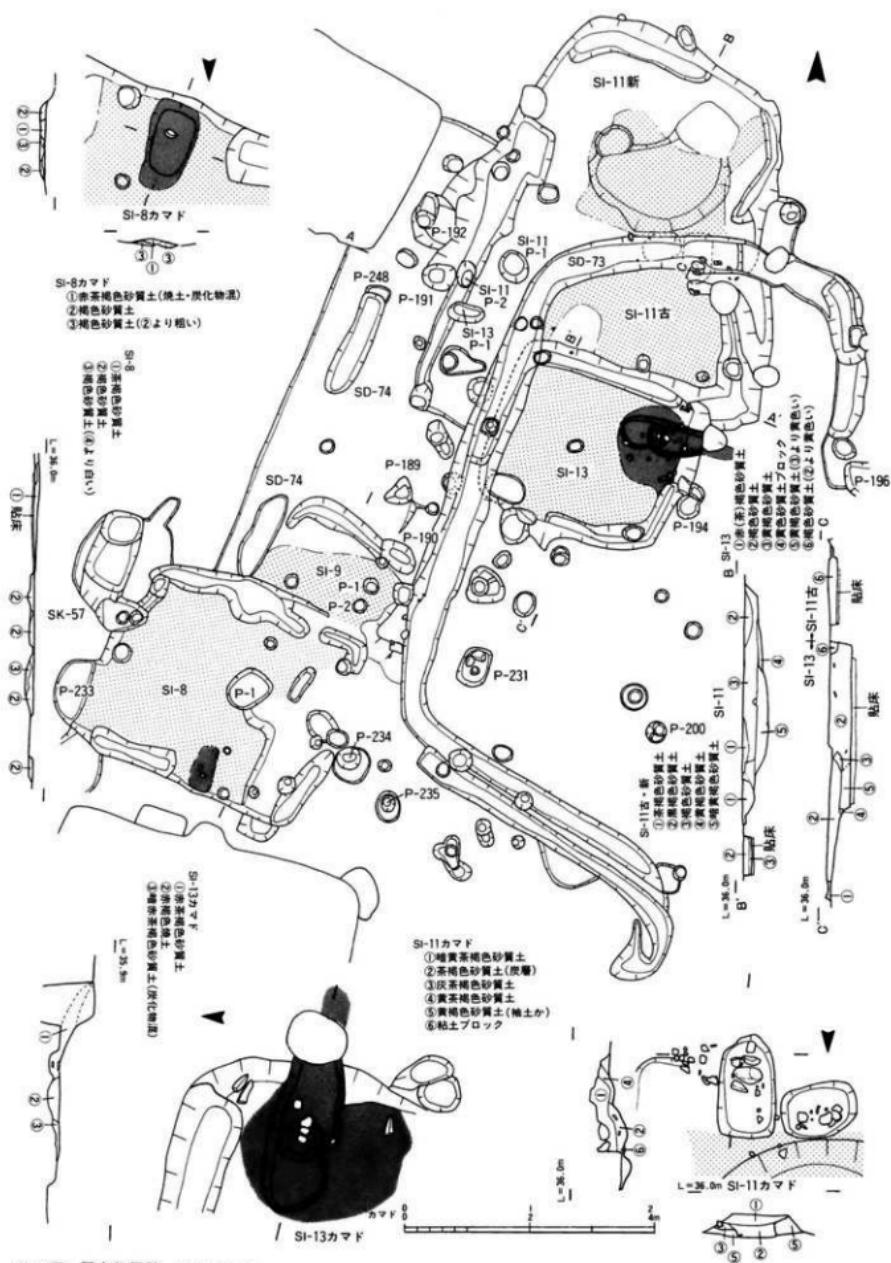


第36図 壁穴住居跡 (SI-1-2-22)

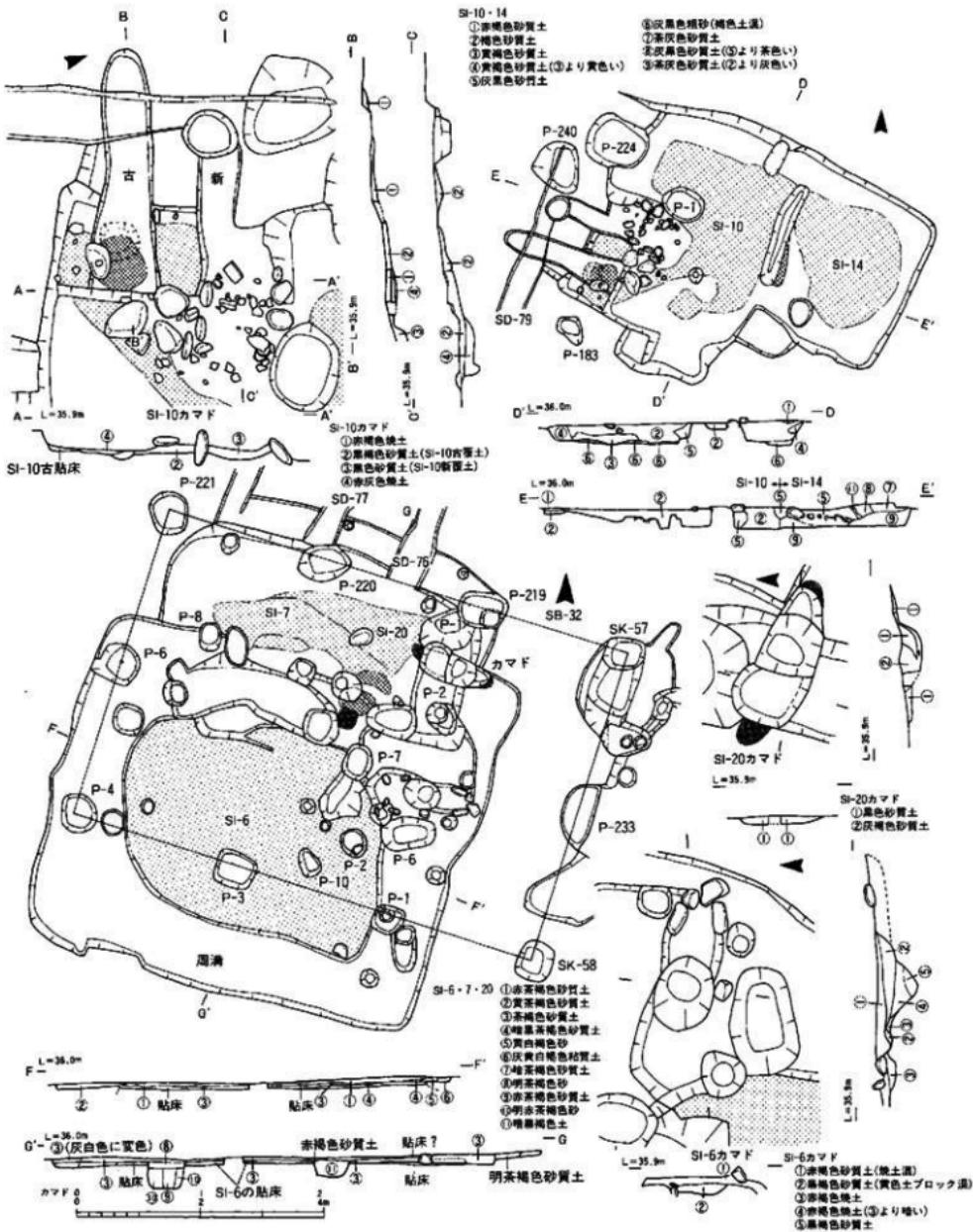


(第38図 セクションA-A')

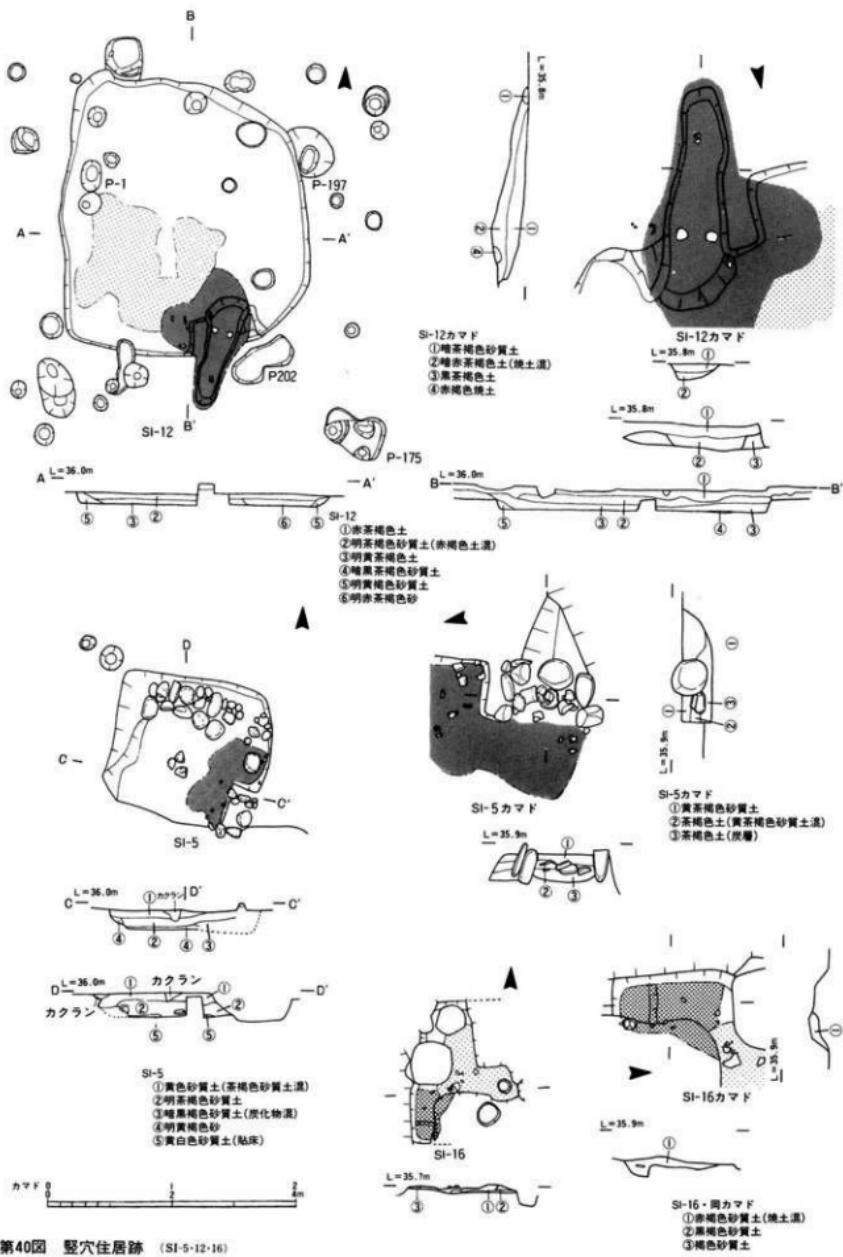
第37図 竪穴住居跡 (SI-3-4-21)



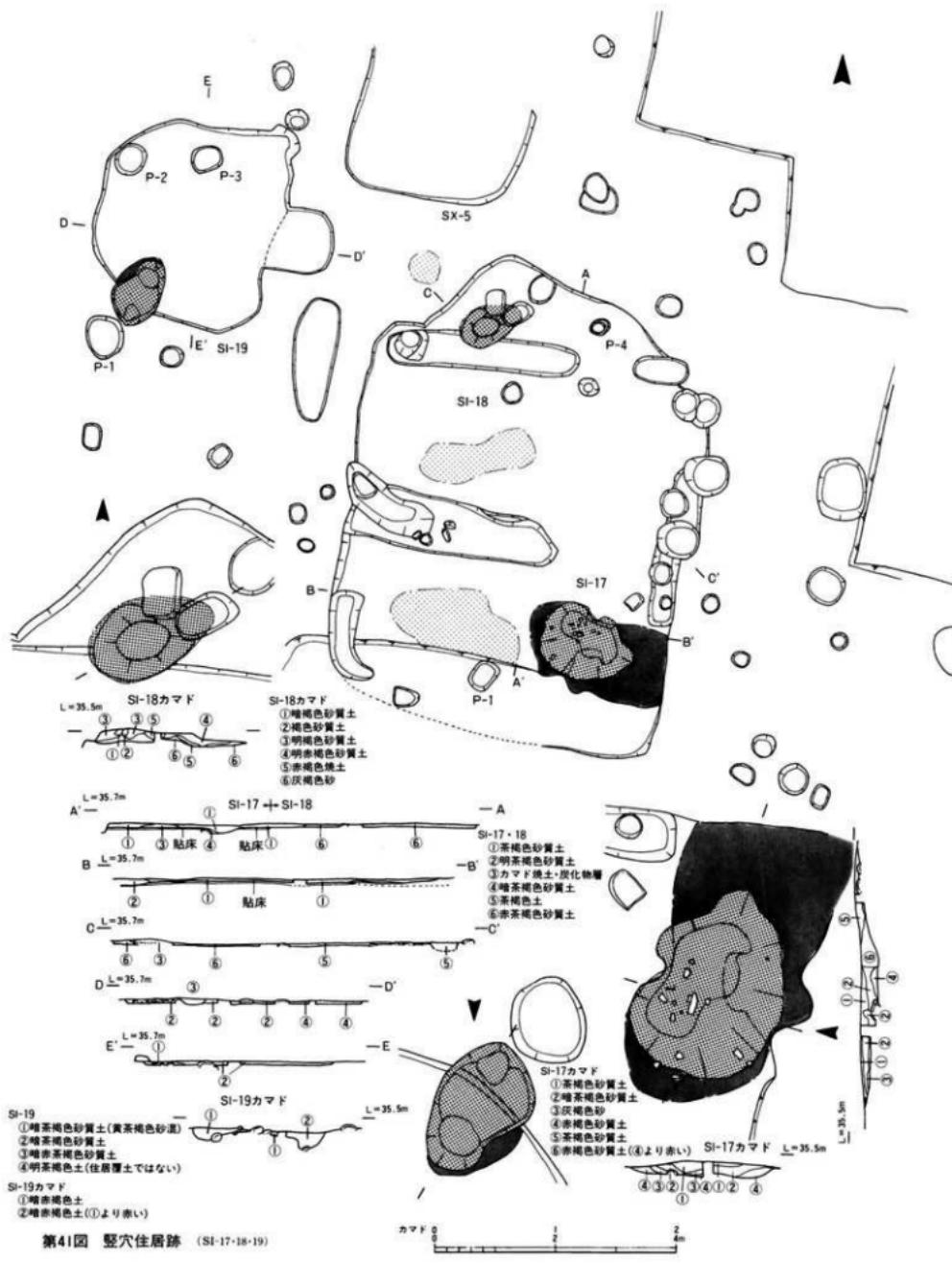
第38図 壁穴住居跡 (SI-8-9-11-13)



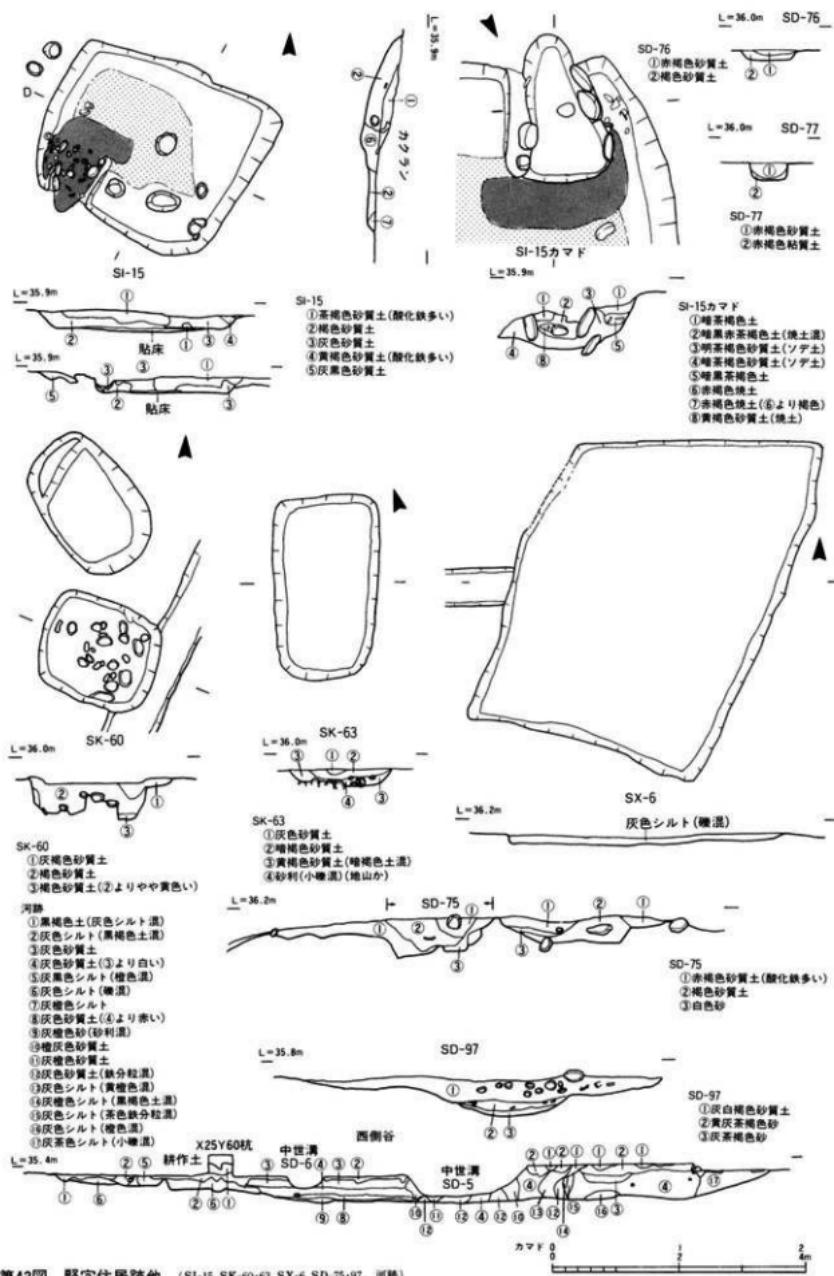
第39図 積穴住居跡 (SI-6-7-10-14-20)



第40図 塊穴住居跡 (SI-5-12-16)



第41図 積穴住居跡 (SI-17-18-19)

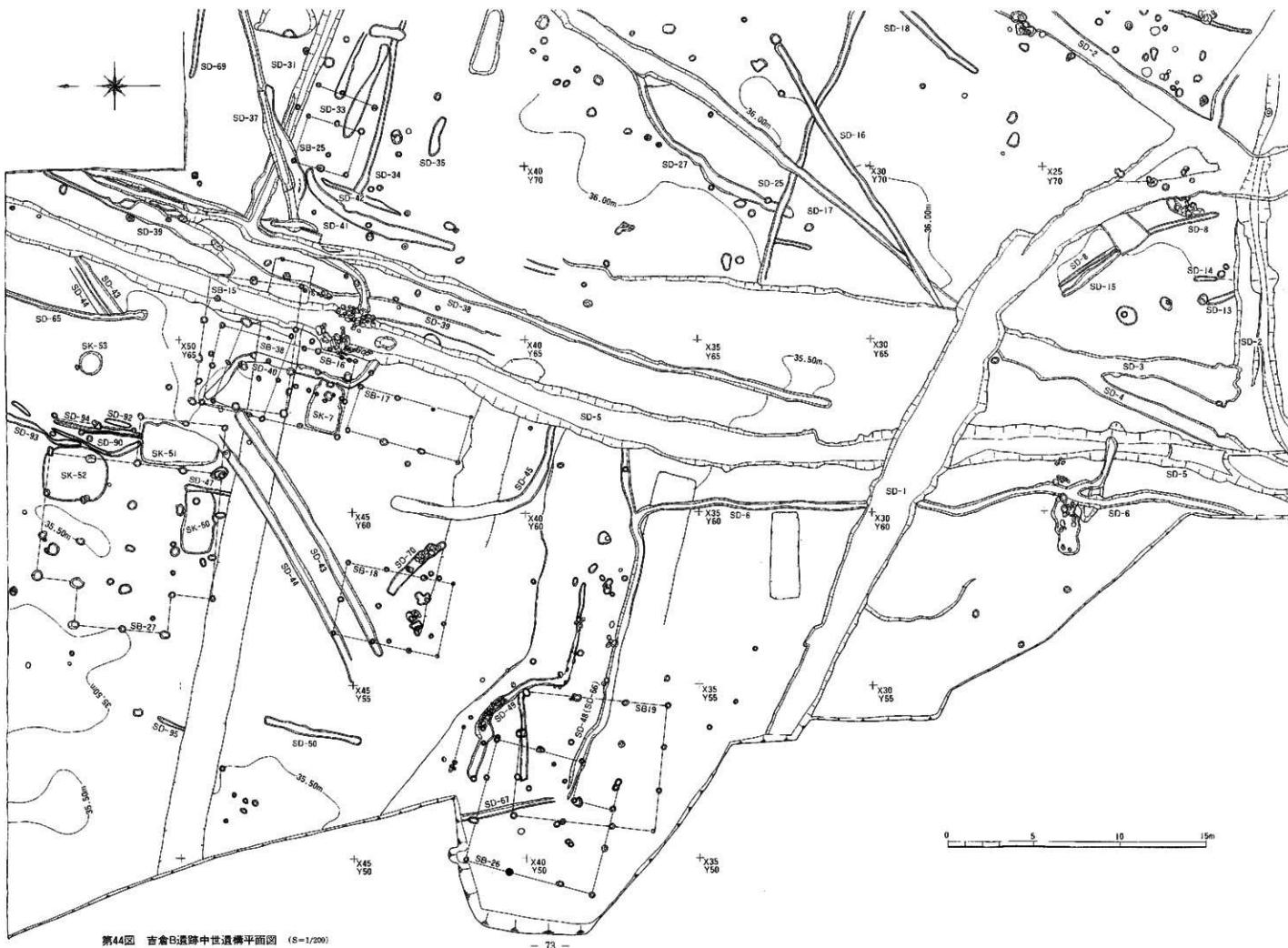


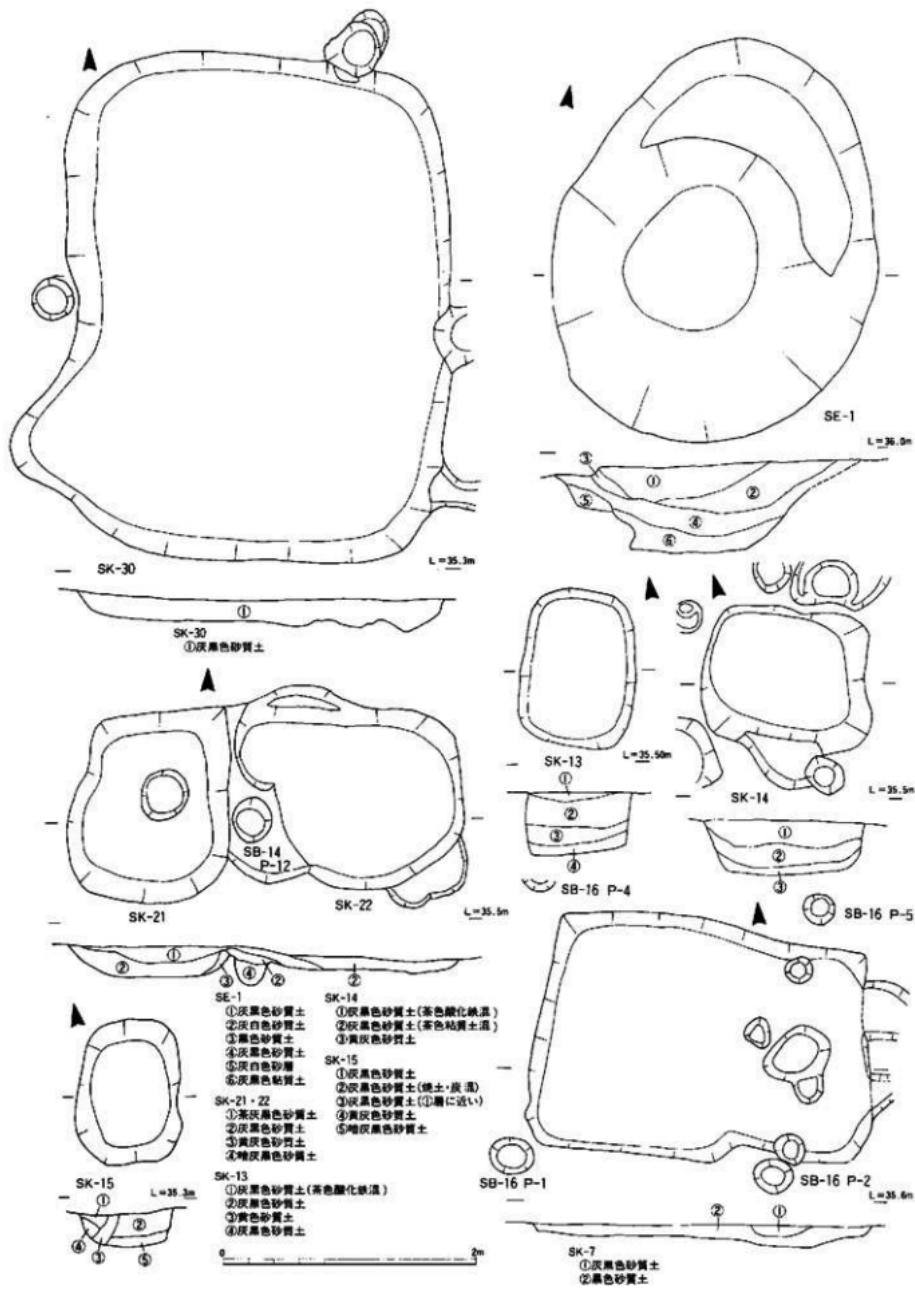
第42図 堅穴住居跡他 (SI-15, SK-60-63, SX-6, SD-75-97, 河跡)



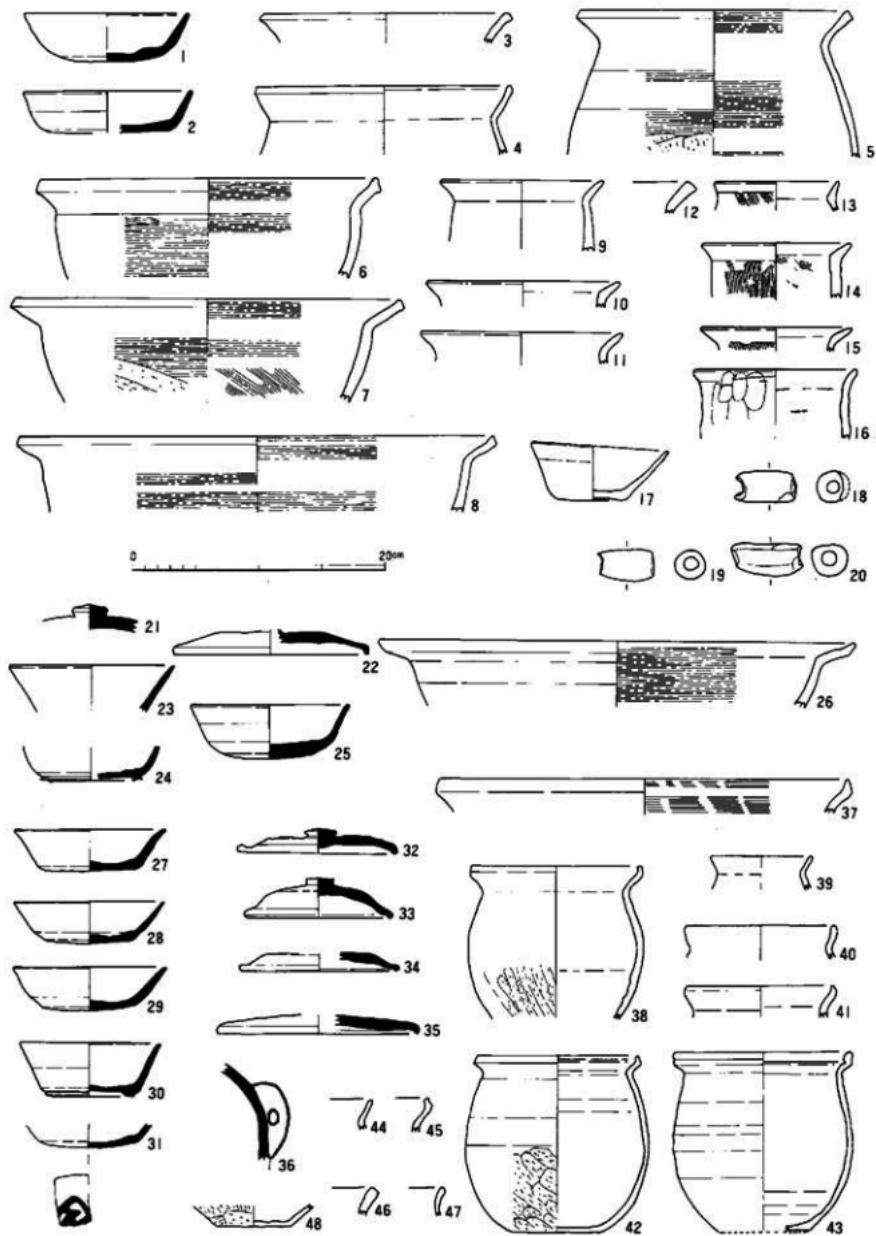
第43図 吉倉B遺跡中世遺構平面図 (S=1/200)



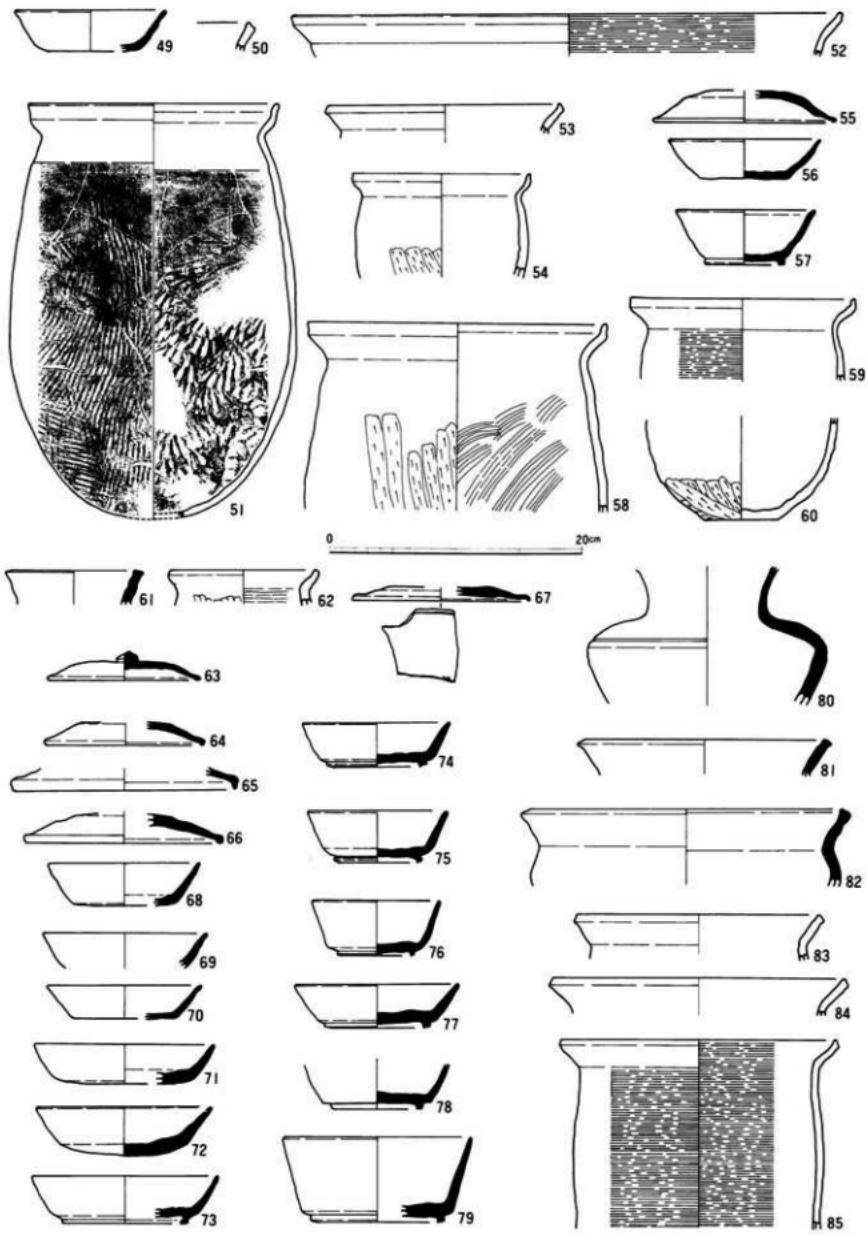




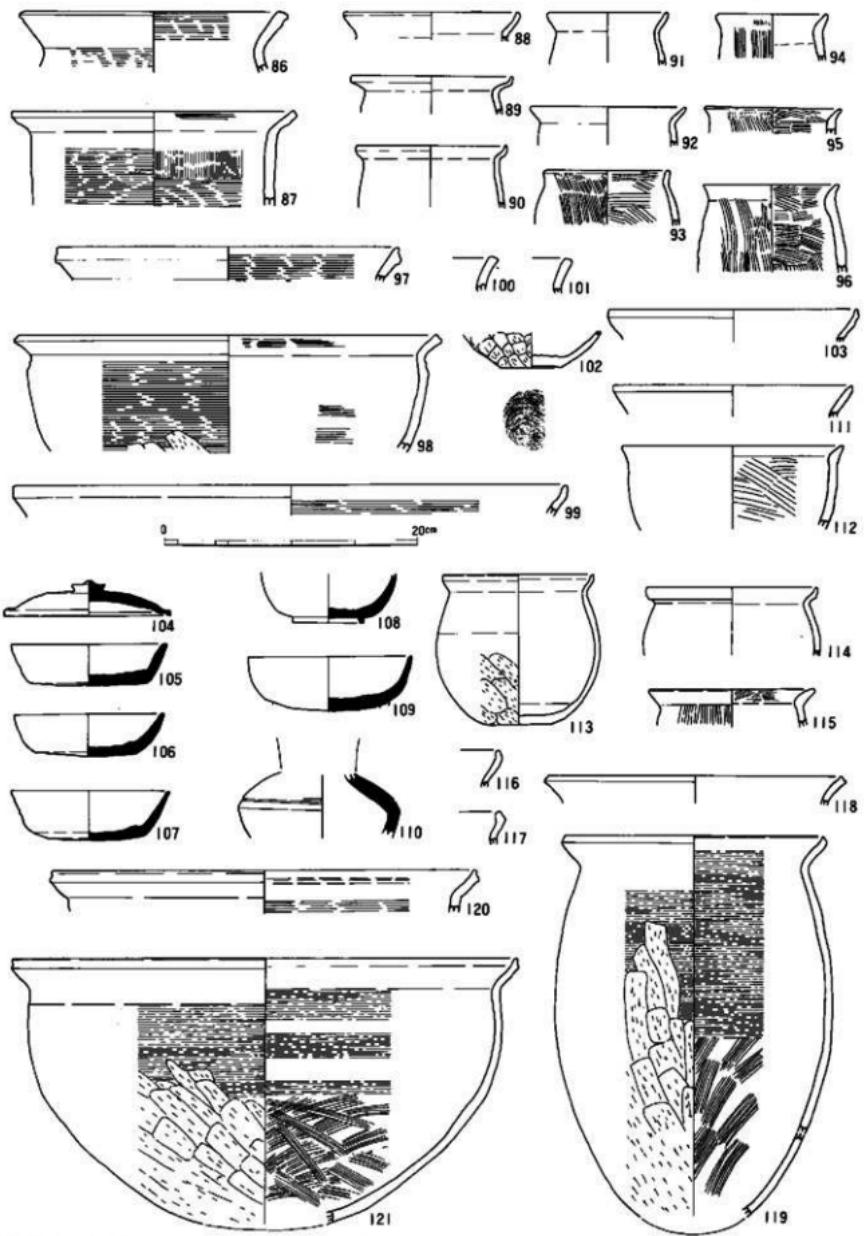
第45図 中世土坑平面図 (SK-7-13-14-15-21-22-30, SE-1)



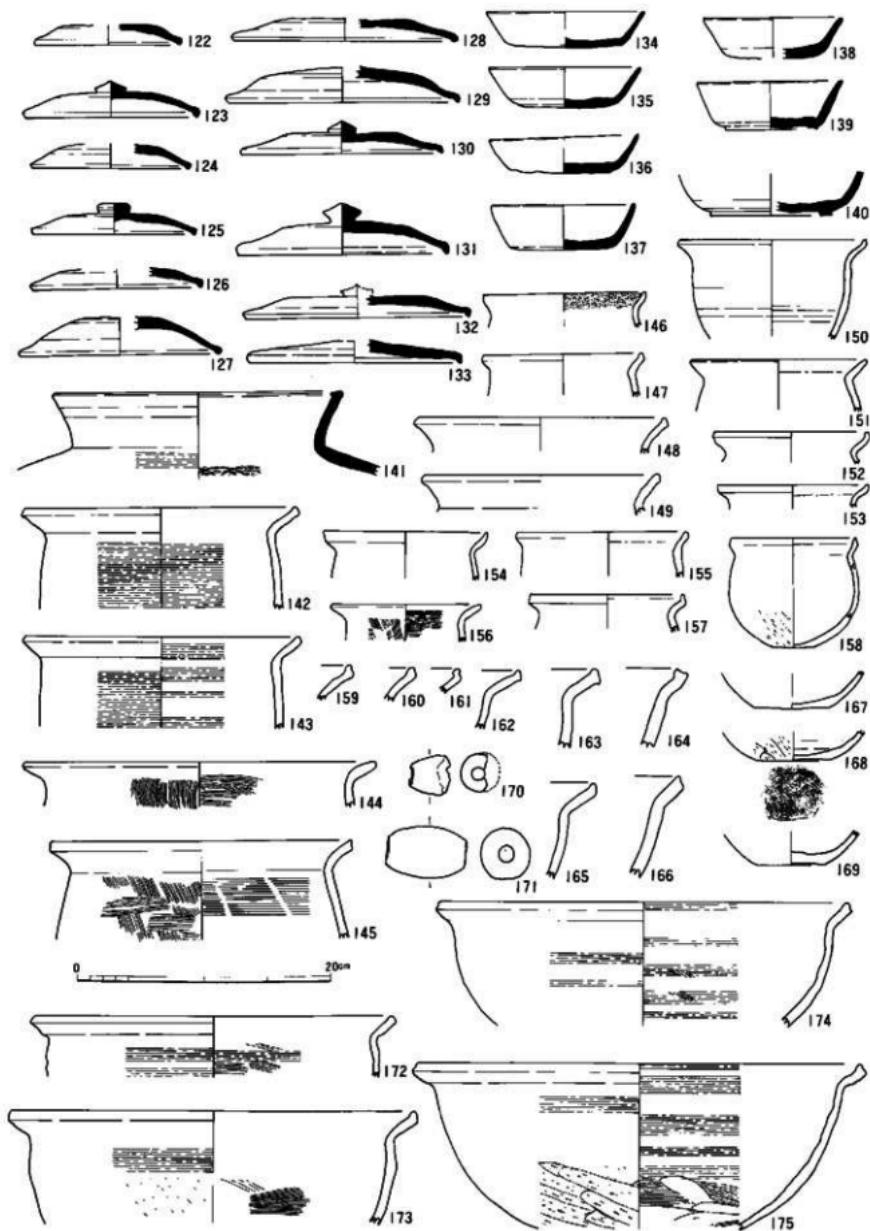
第46図 吉倉B遺跡 古代の土器(1) SI-1(1-17), SI-2(21-26), SI-3(27~48), SI-22(18-20)



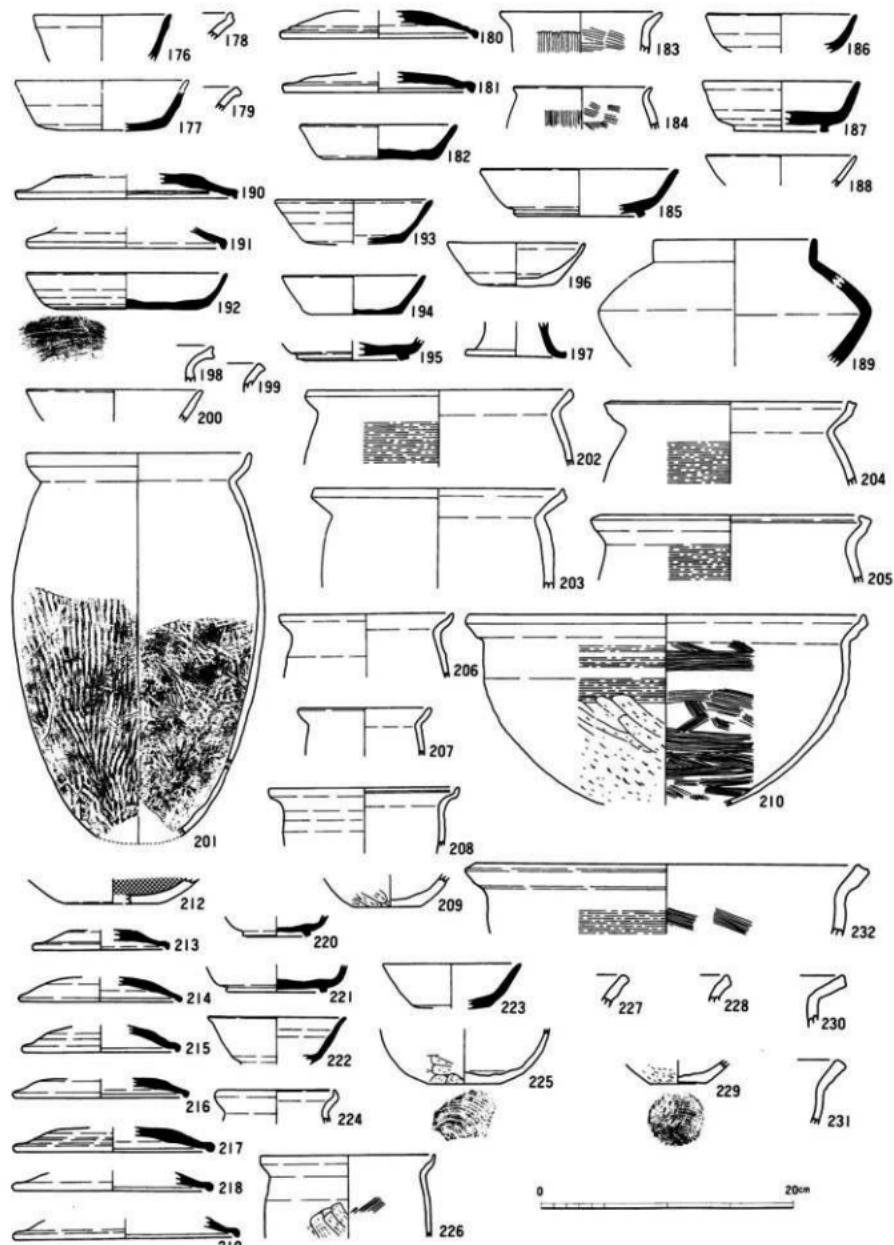
第47図 吉倉B遺跡 古代の土器(2) SI-3Aカマド(49~54), SI-3Bカマド(55~60)



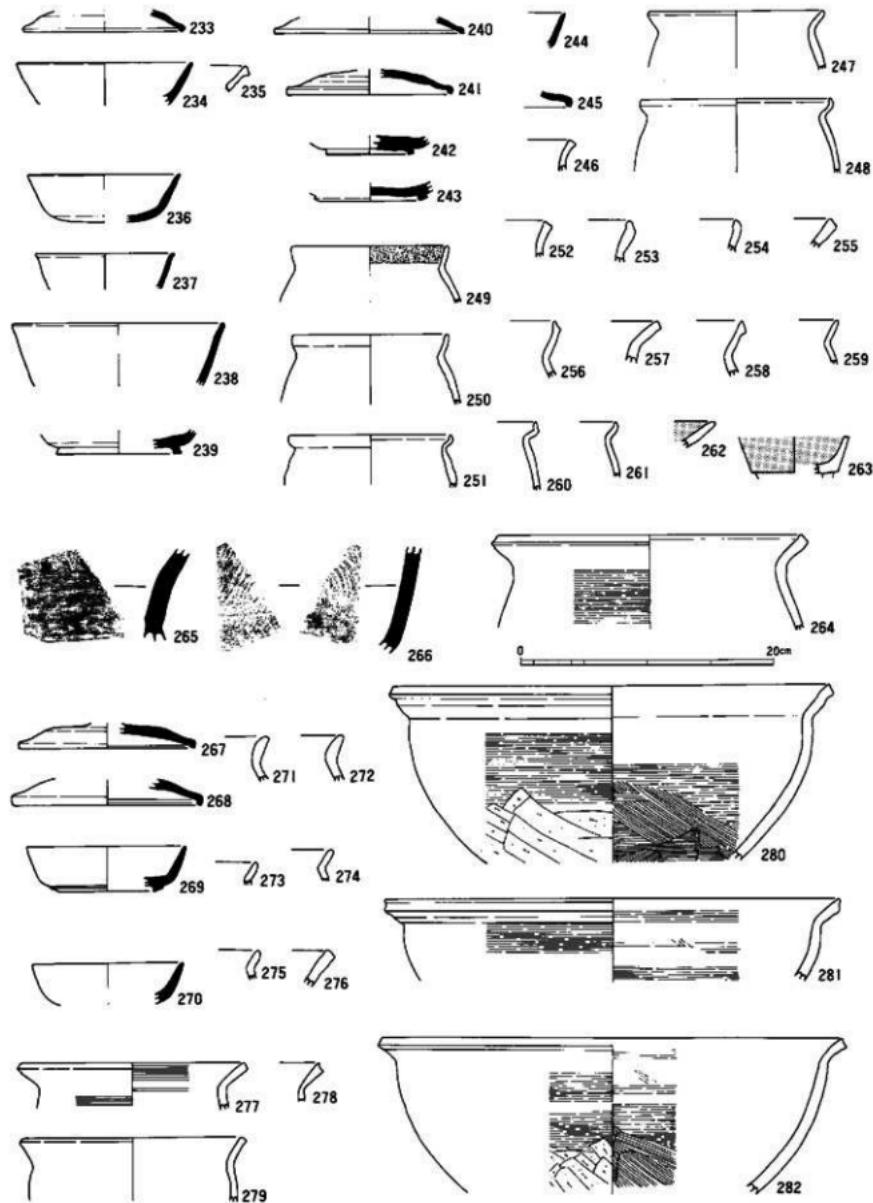
第48図 吉倉B遺跡 古代の土器(3) SI 4(86-103), SI-5(104-119)



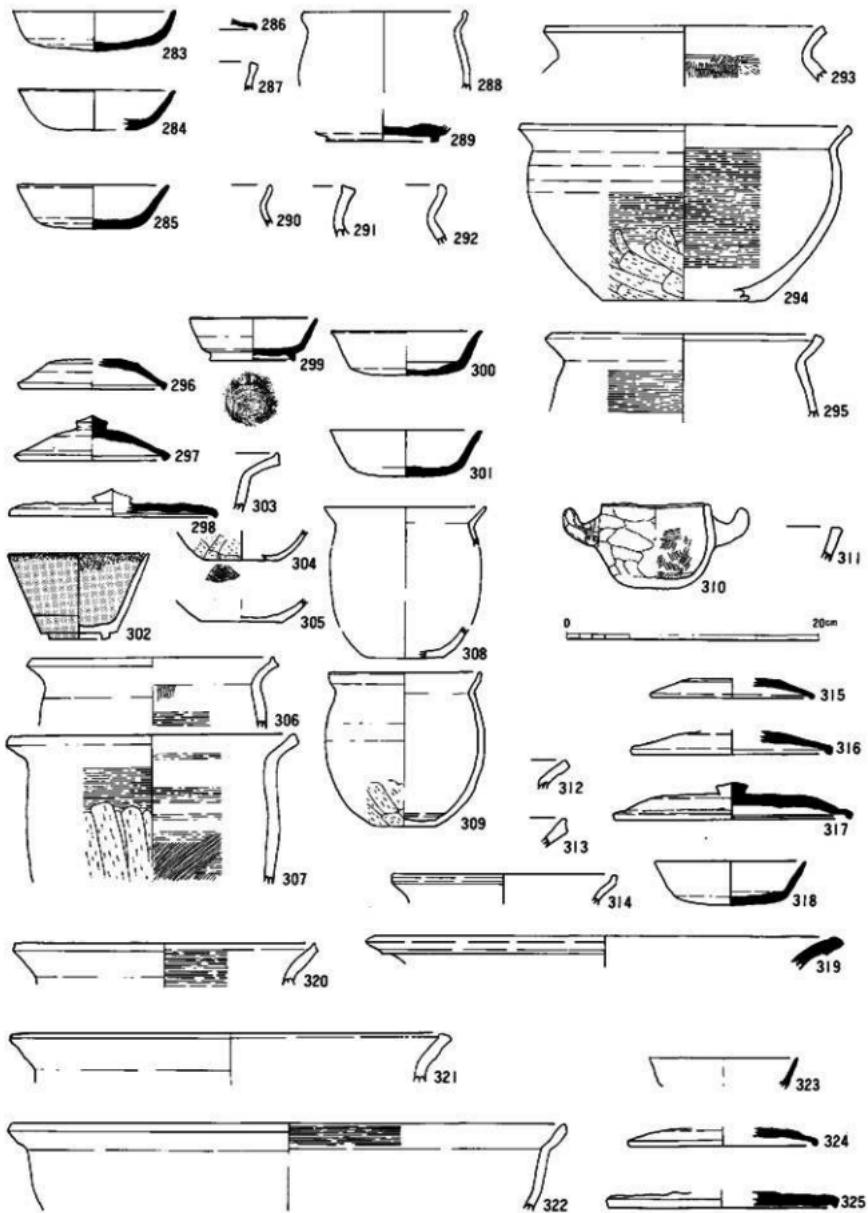
第49図 吉倉B遺跡 古代の土器(4) SI-6



第50図 吉倉B遺跡 古代の土器(5) SI-7(176~179), SI-8(180~183), SI-9(184~189), SI-10(190~212), SI-10・14(213~232)

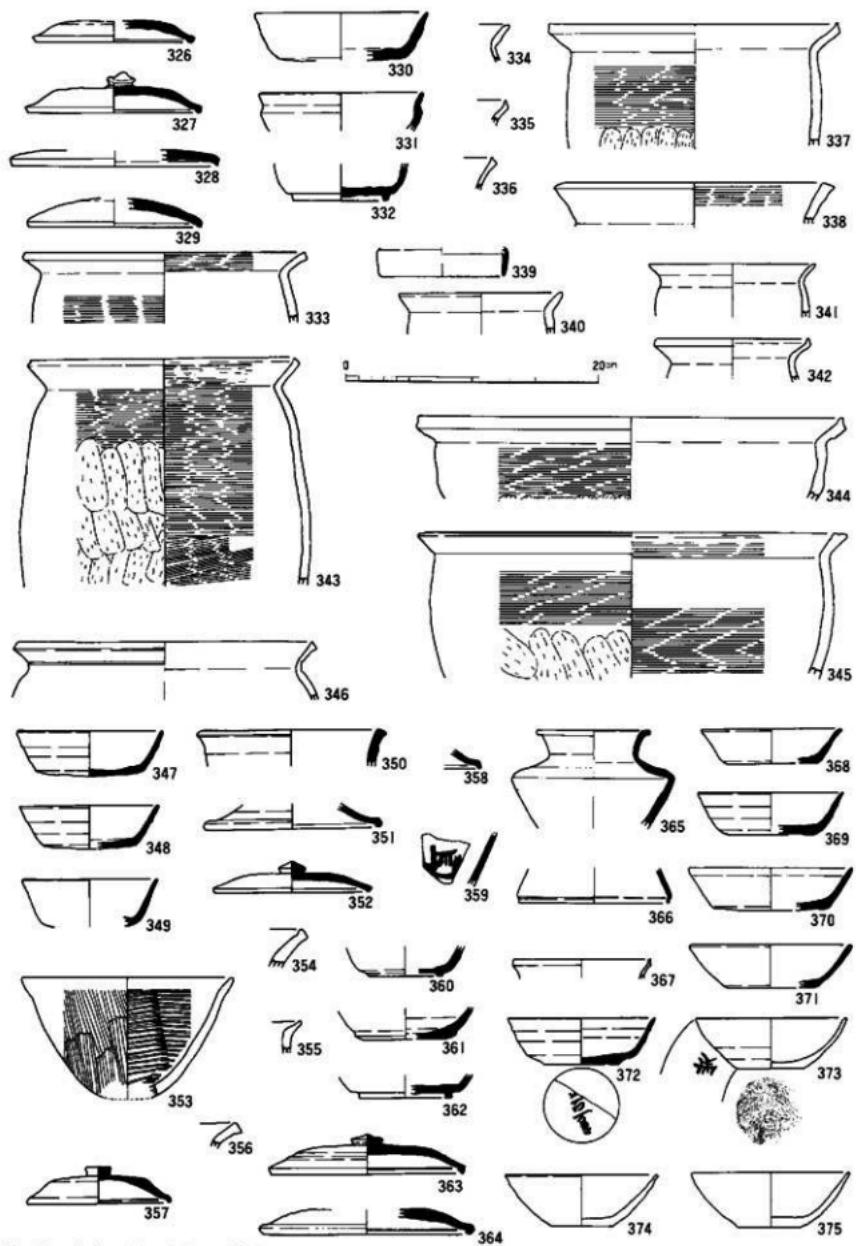


第51図 吉倉B遺跡 古代の土器(6) SI-14(233~235), SI-11(236~264), SI-12(265~282)



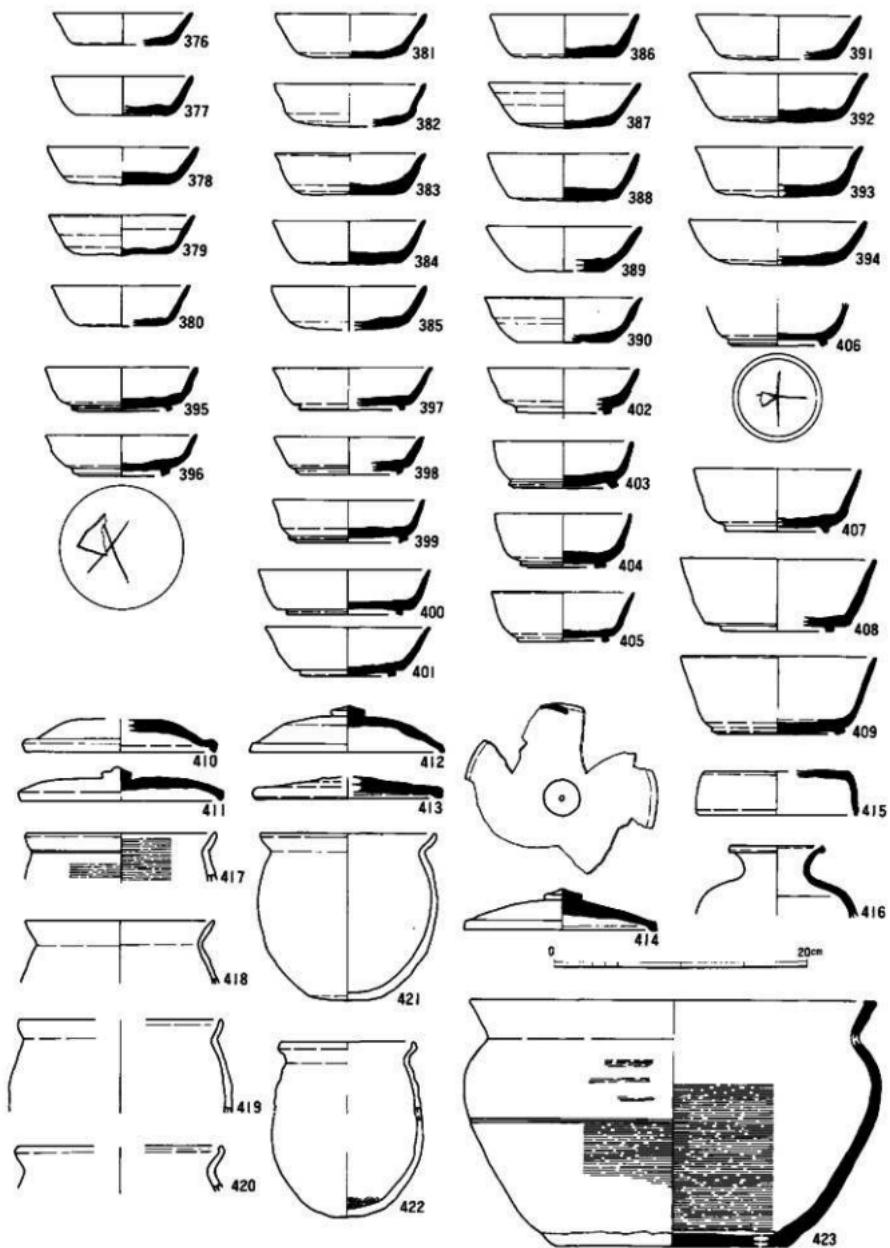
第52図 吉倉B遺跡 古代の土器(7)

SI-13(283-295), SI-15(296-309), SI-16(310-311), SI-18(320-321-323), SI-19(322-324-325), SI-20(312-319)

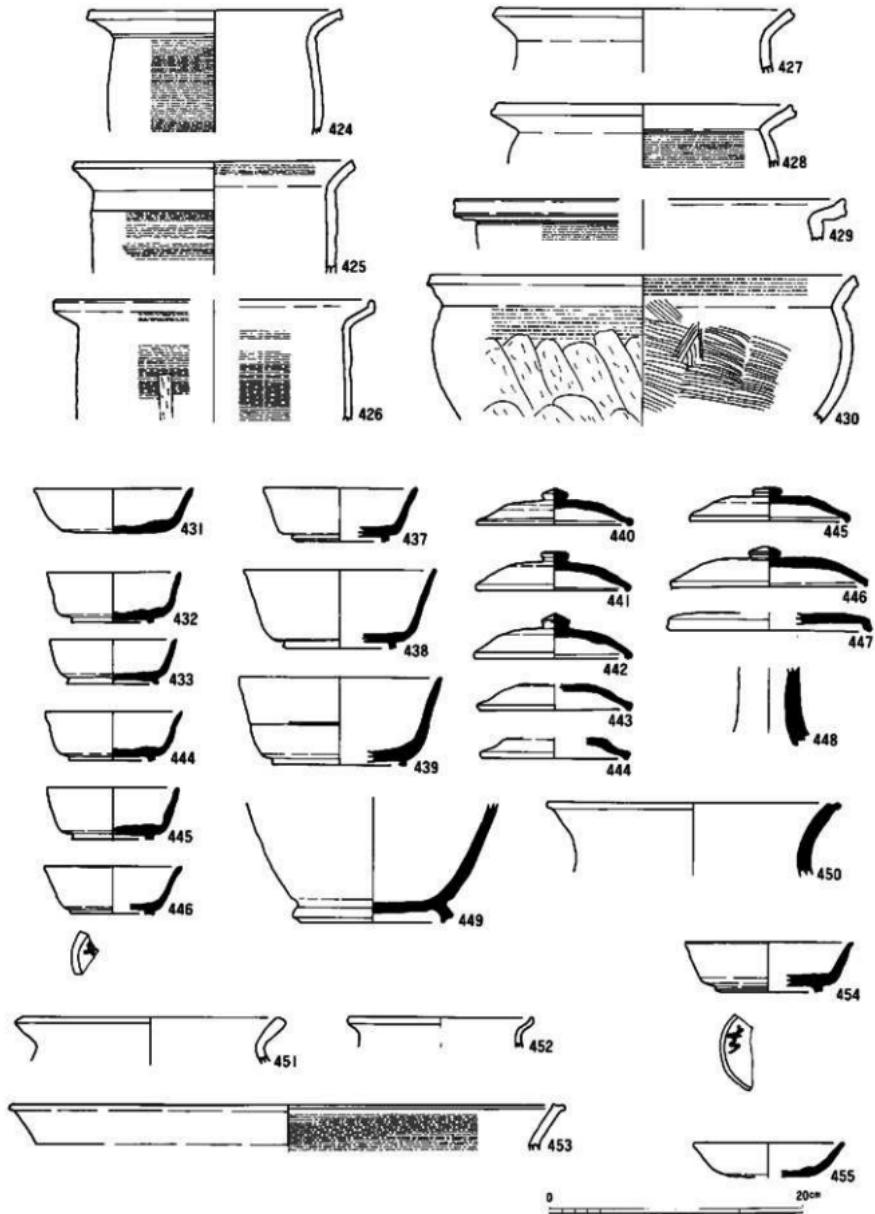


第53図 吉倉B遺跡 古代の土器(8)

SI17(326~345), SK-57(346~354), SK-58(356), SK-59(355~357), SX-6(358~360--362~365~373), SD-96(359~363~364~374~375)

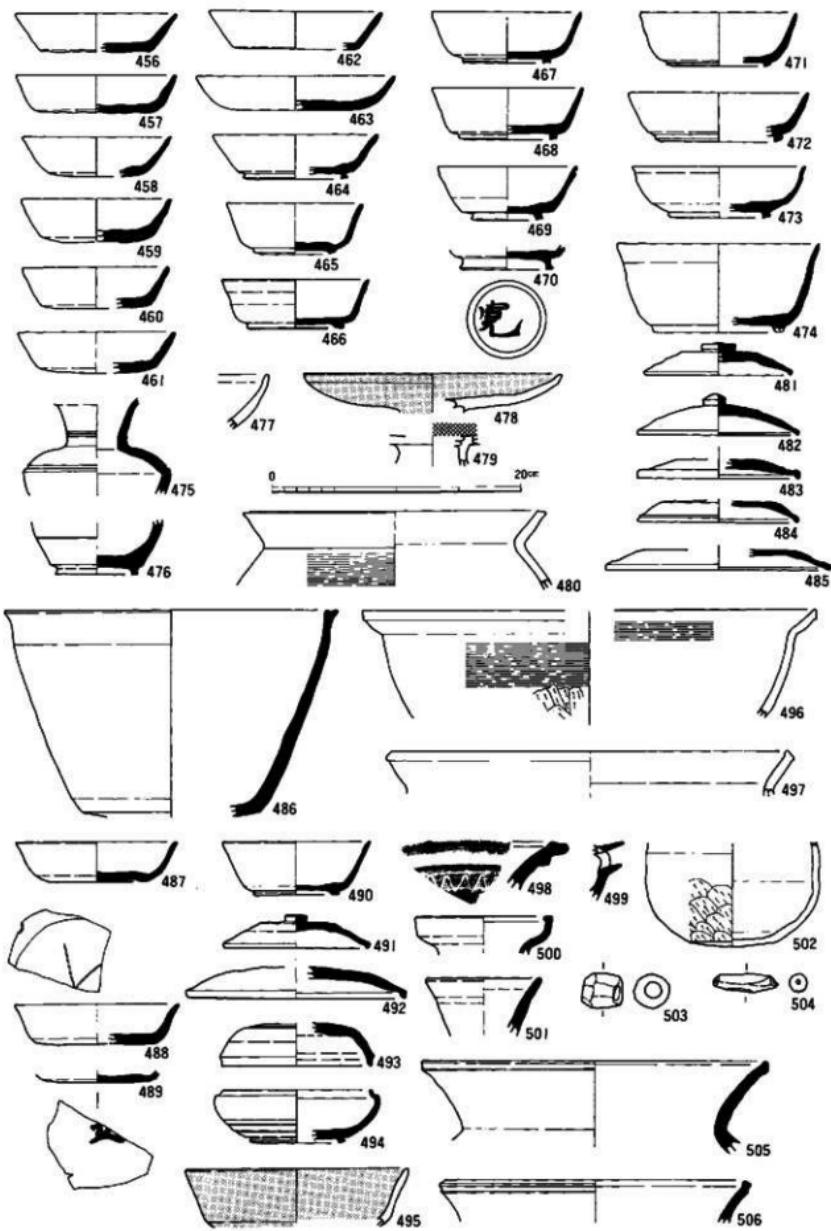


第54図 吉倉B遺跡 古代の土器(9) SD-96-97

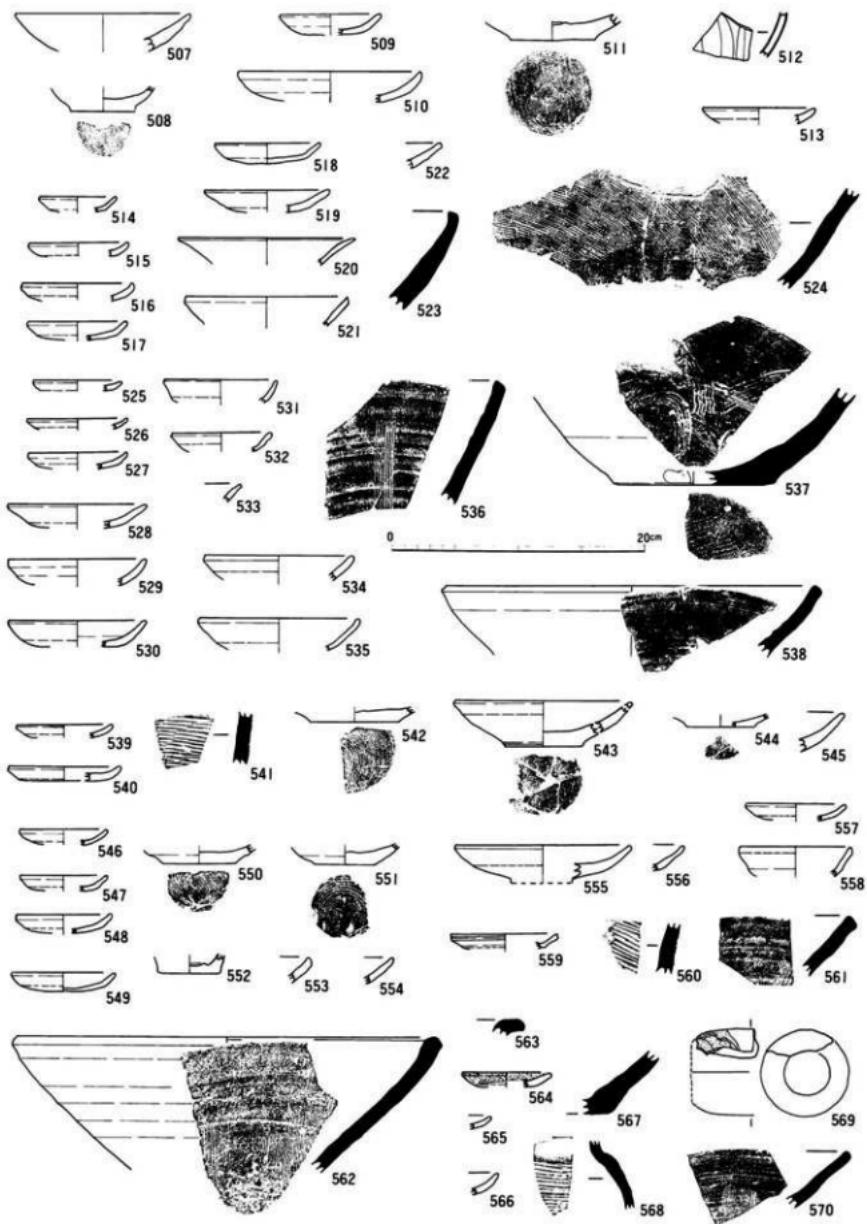


第55図 吉倉B遺跡 古代の土器(II)

SD-96(424-426・430), SD-97(425), SD 75(431～450-452), SD-75付近(451-453), SD 83(454), SD-95(455)

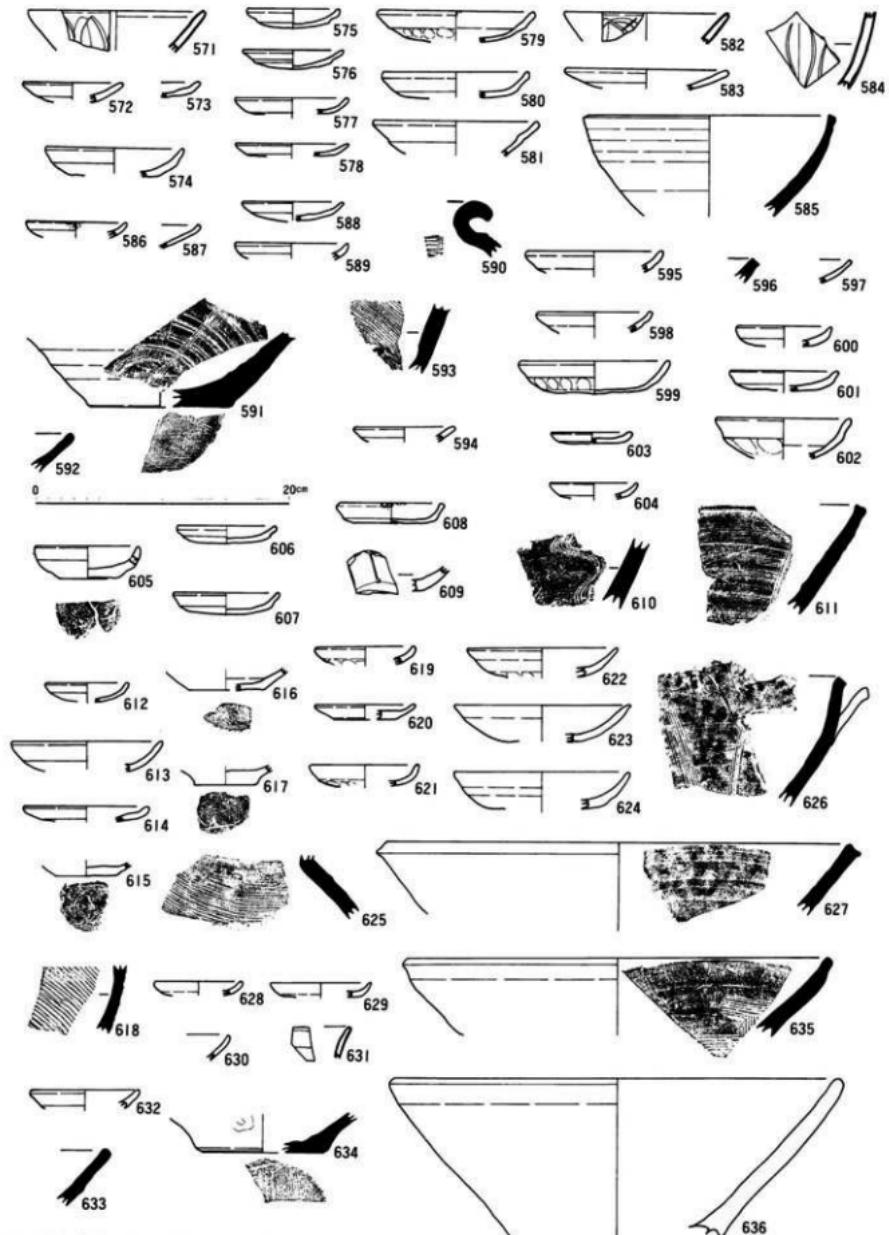


第56図 吉倉B遺跡 古代の土器(II) SD-9(494), K-88内(456~497), その他は名古屋



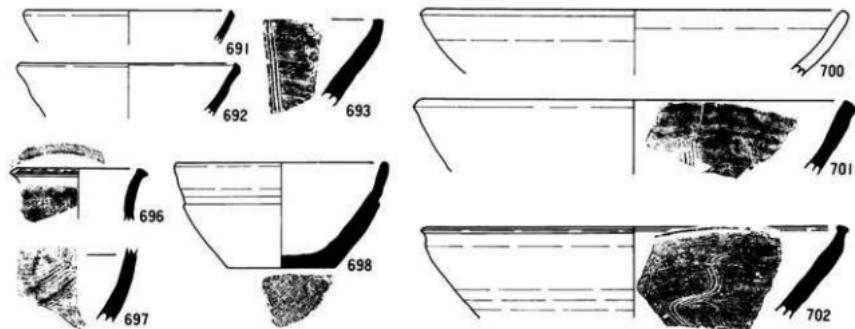
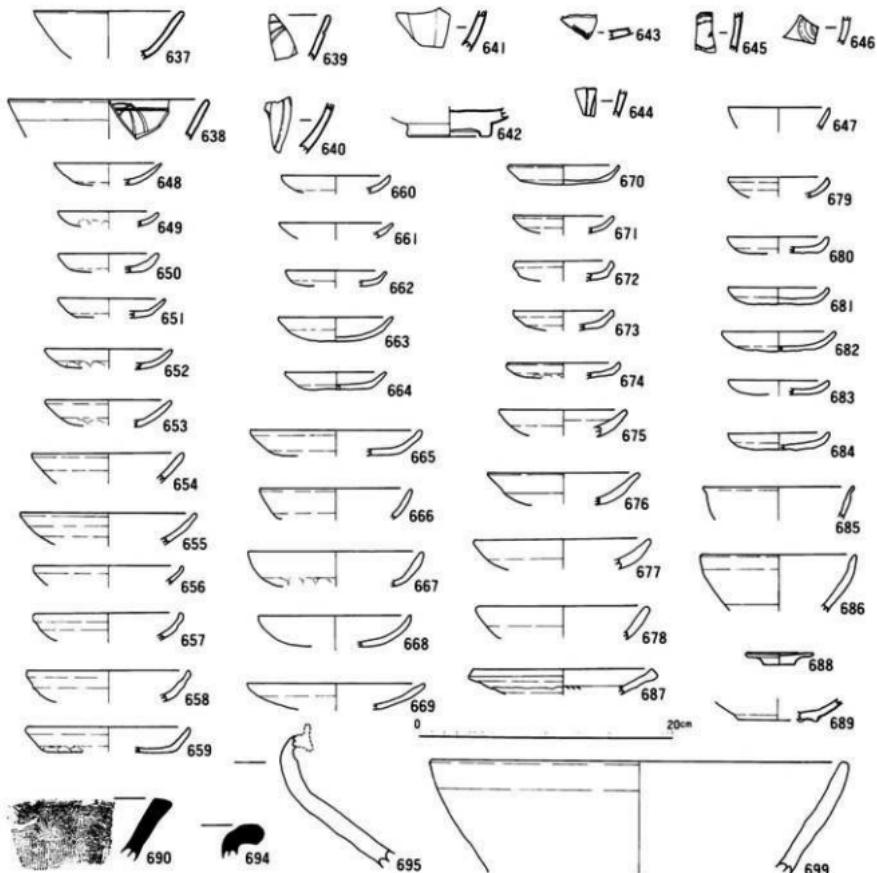
第57図 吉岡B遺跡 中世の土器(I)

SB-6(507-508), SB-2(509), SB-14(511), SB-23(512), SB-26(513), SB-21(510), SK-1(514-524), SK-2(525-538), SK-4(539-540), SK-9(562), SK-10(541), SK-11(542), SK12(543-545), SK-13(557-558), SK-14(555-556), SK-19(546-554), SK-21(559), SK-24(560-561), SK-26(563-569), SD-26(570)

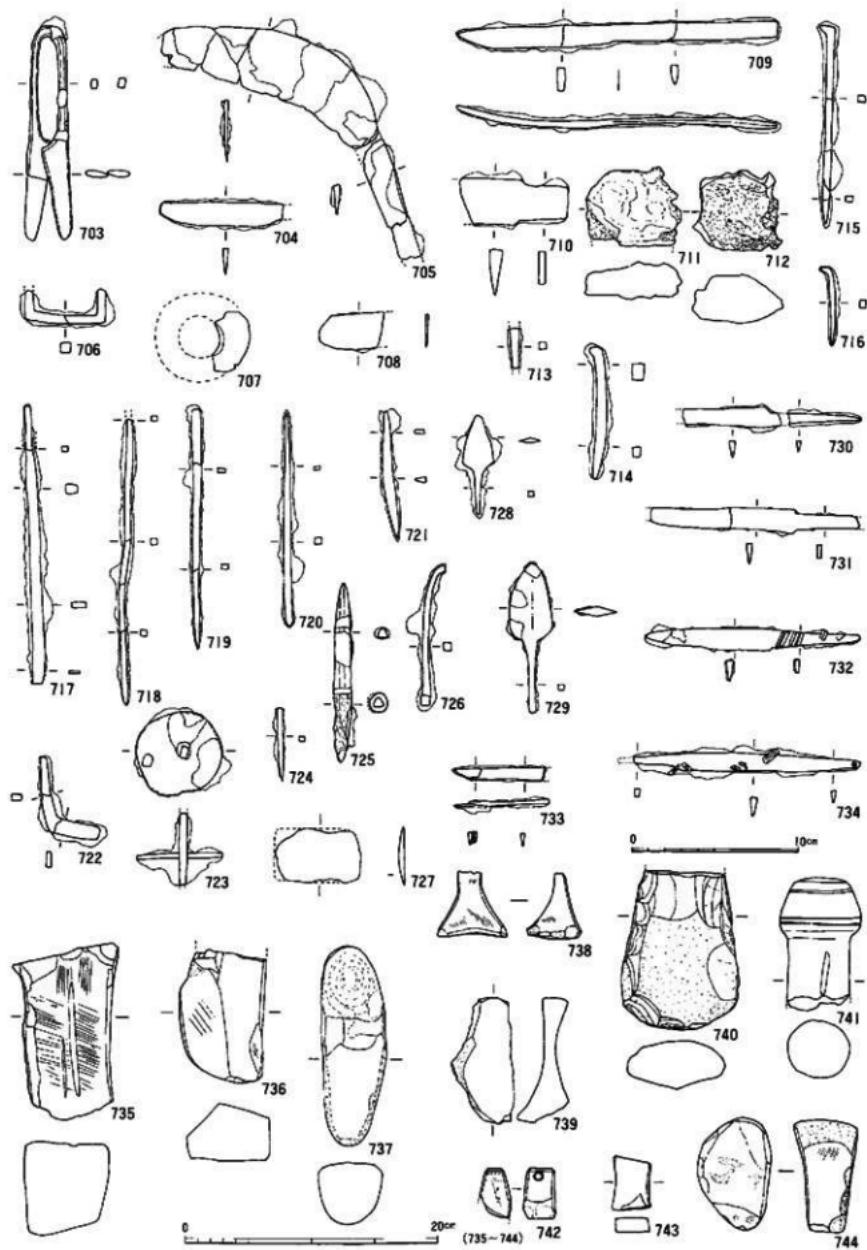


第58図 吉倉B遺跡 中世の土器(2)

SK-29(572~573), SK-30(571~574), SK-32(575~585), SK-35(588~589), SK-45(586~587), SK-56(590), SE-1(591~594), P-68(596), P-77(595), P-85(598~599), P-90(597), P-95(600~602), P-98(608~609), P-101(606), P-102(603), P-111(611), P-142(607), SD-02(619~627), SD-23(612~618), SD-37(634), SD-53(632~633), SD-62(628~631), SK-22(636), SK-51(635)



第59図 吉倉B遺跡 中世の土器(3) 泥合層



第60図 吉倉B遺跡 繩文時代・古代・中世の石器、鐵器、鐵津、羽口 (右欄1/4)

SB-7-P 2(703), SK-29(705-715), SK-26(706-739), SD-2(707), P-49(708), SK-1(709), SK-7(710), P-144(711), SK-2(712-717-718-743), P-94(713), SI-4(714), SK-29(715), SK-32(716), SI-3(719-720-721-724-725-726-728), SI-12(722-734), SI-14(723), SI-17(727), SI-1(729-731), SI-6(732), SI-11(733), SI-10(735).



写真図版2



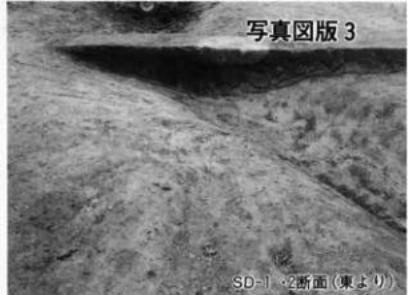
全景(北より)



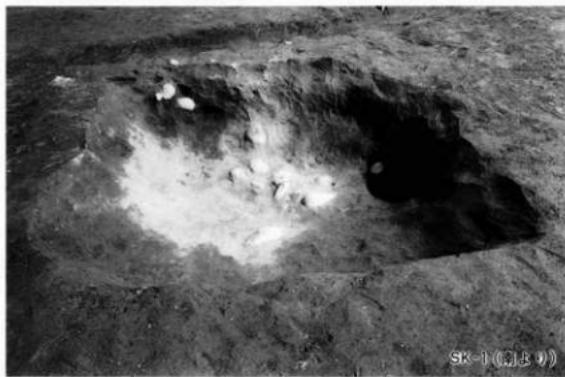
全景(東より)



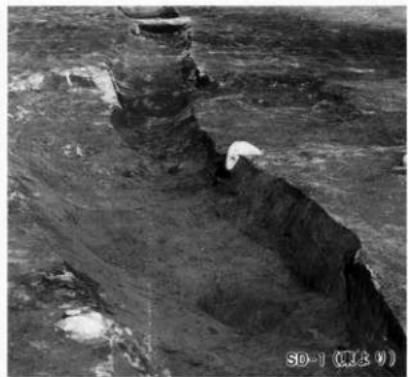
SK-1(南より)



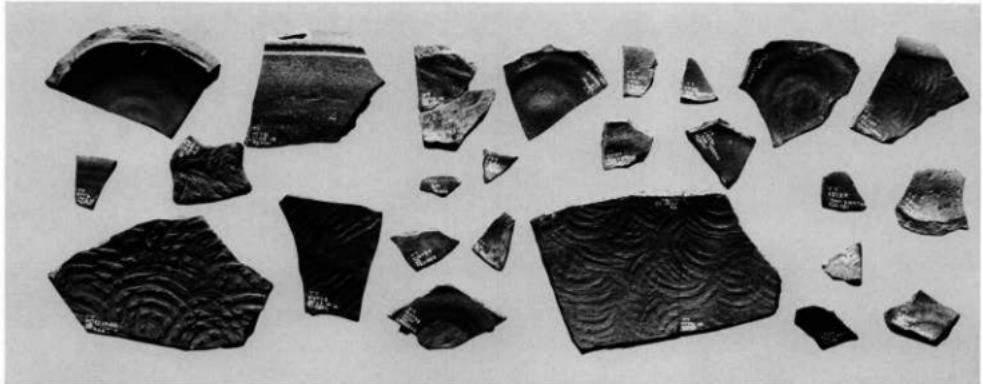
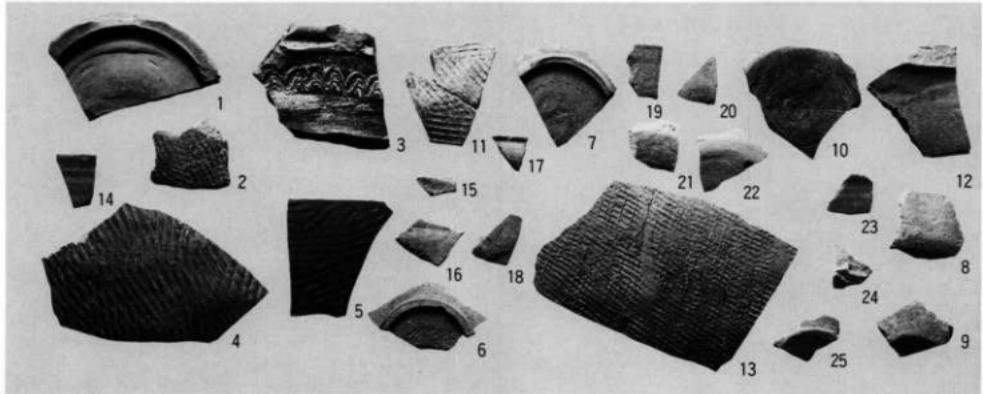
SD-1・2断面(東より)



SK-1(西より)



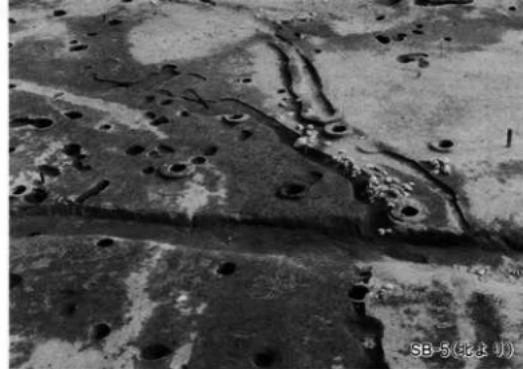
SD-1(西より)



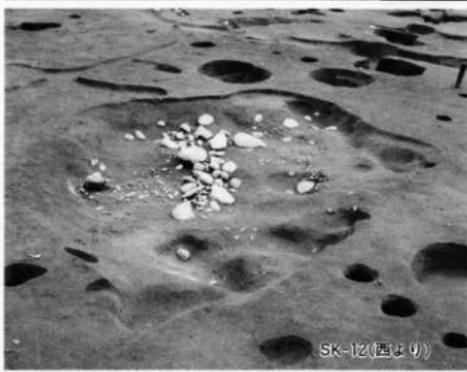
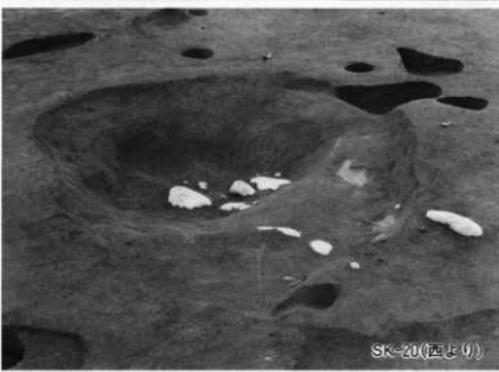
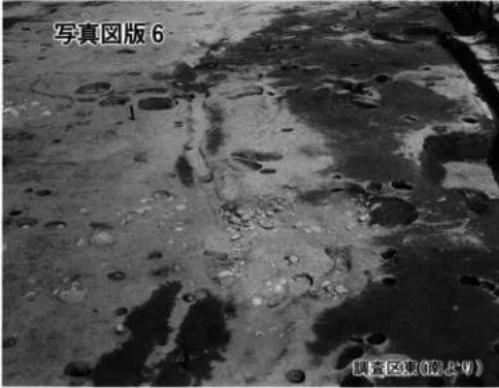
写真図版4

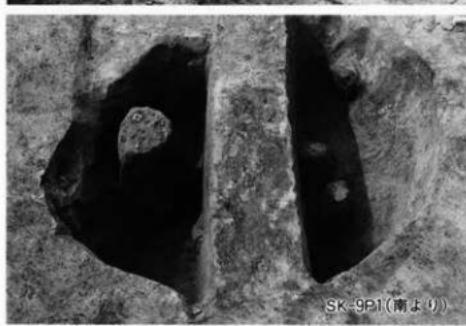
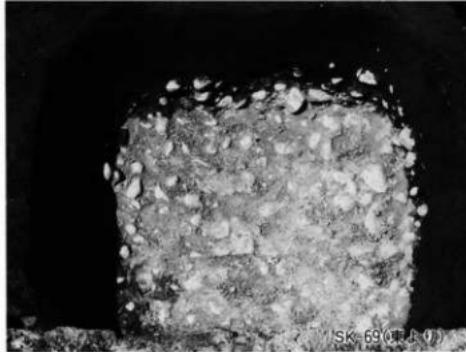


全景(南より)



写真図版 6







古代遺物出土状況(西より)



古代遺物出土状況(北より)



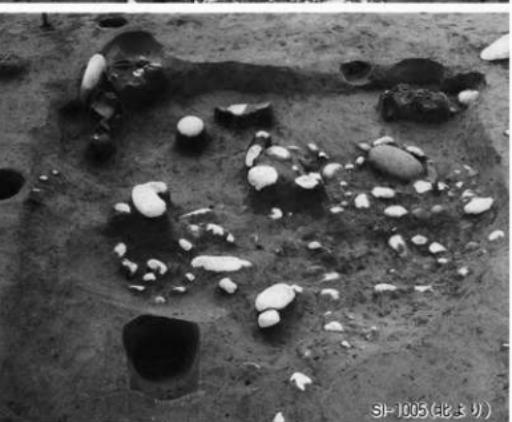
古代遺物出土状況(北より)



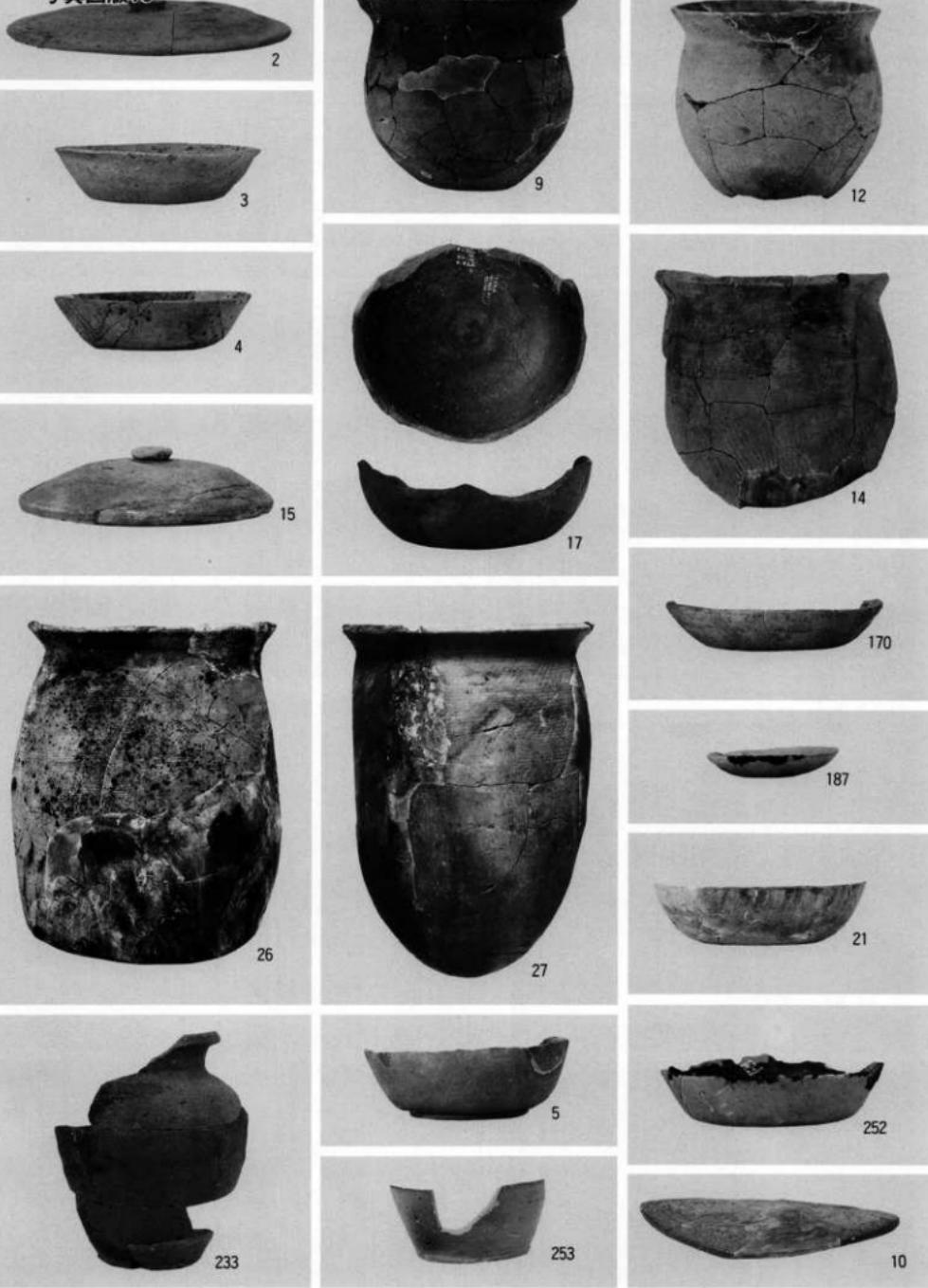
古代遺物出土状況(西より)



全景(西より)

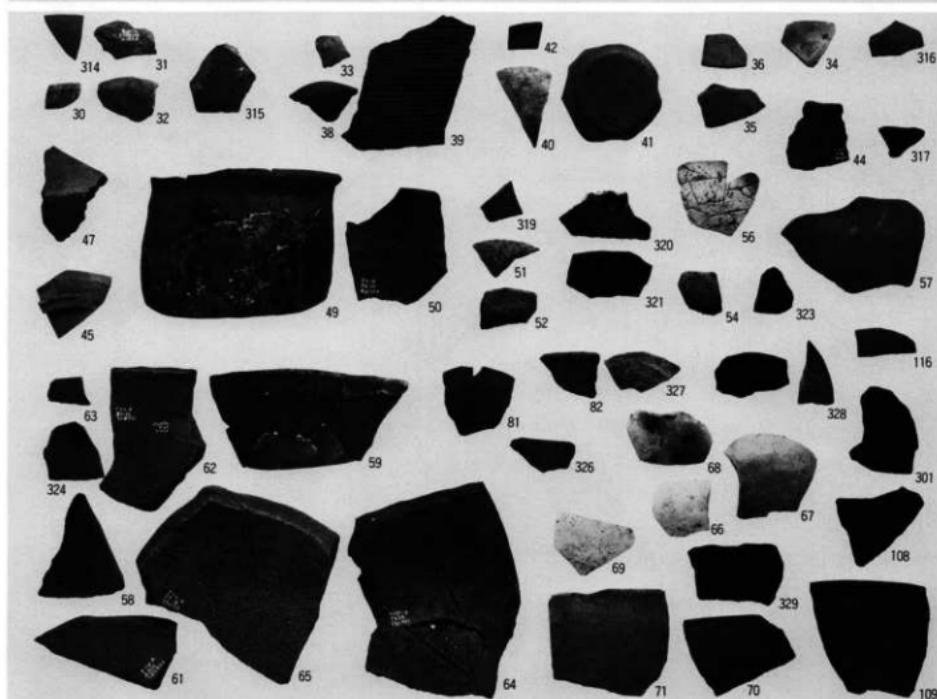
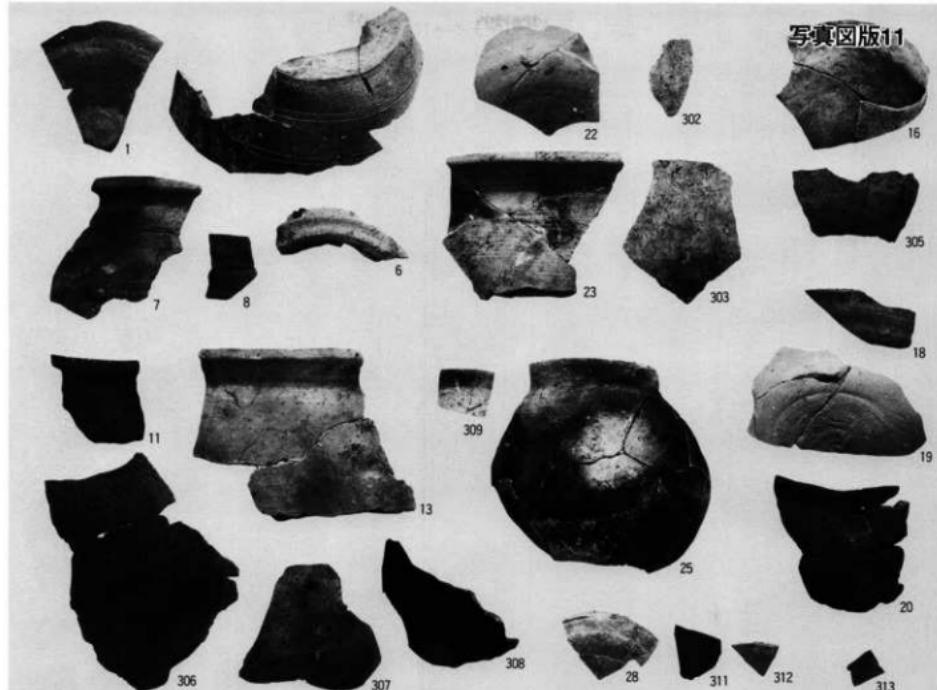


# 写真図版10



写真図版10

2~5・9~10(SI-1005-P15), 12~14(SI-1006), 15~17(SI-1013), 21(SK-1007-南西集石), 170(SK-92), 187(SK-111), 233(中央集石-南集中), 252(X23Y13),  
253(X23Y12)



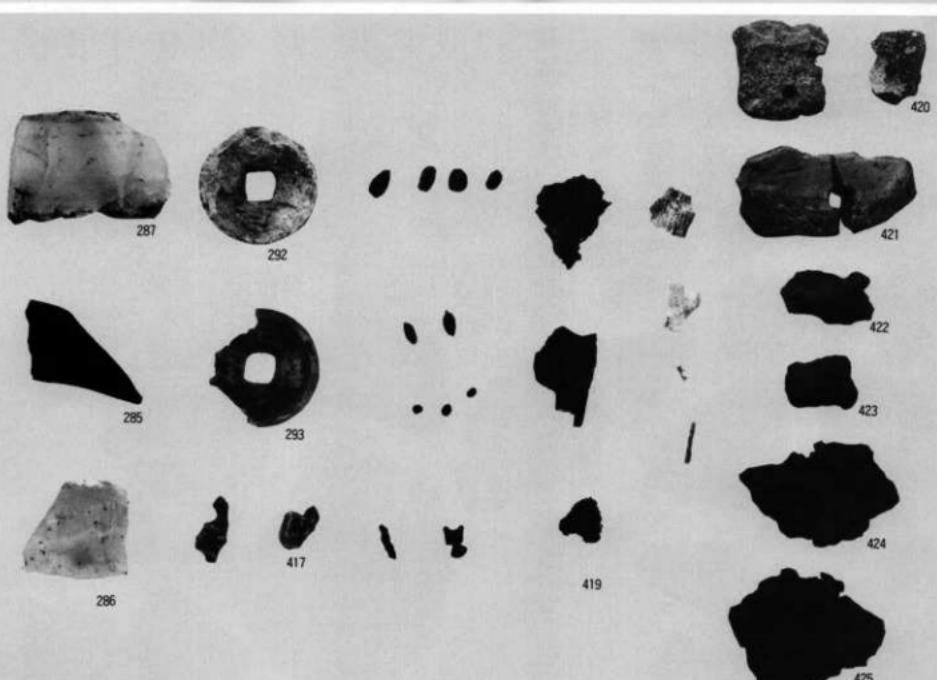


写真図版12 76-77(SK10), 78-80-330(SK10), 82(SK10), 94-101(SK14), 109-331-332(SK16), 304(SK17), 335(SK18), 117(SK19), 126-95-333-334(SK17), 116(SK20), 105-107(SK21), 129-236(SK27), 130-131(SK28), 132-133-135-136-145-205(SK28), 141-142-143-144-145-146-147-151-152-204(SK30), 134-135-136-137-138-139-140-141-142-143-144-145-146-147-148-149-150-151-152-153-154-155-156-157-158-159-160-161-162-163-164-165-166-167-168-169-170-171-172-173-174-175-176-177-178-179-180-181-182-183-184-185-186-187-188-189-190-191-192-193-194-195 (SK10, 183 SK10, 185 SK11, 178 SK10), 342-343 SK17, 345 SK17, 346 SK17, 347 SK17, 348 SK17, 349 SK17, 350 SK17, 351 SK17, 352 SK17, 353 SK17, 354 SK17, 355 SK17, 356 SK17, 357 SK17, 358 SK17, 359 SK17, 360 SK17, 361 SK17, 362 SK17, 363 SK17, 364 SK17, 365 SK17, 366 SK17, 367 SK17, 368 SK17, 369 SK17, 370 SK17, 371 SK17, 372 SK17, 373 SK17, 374 SK17, 375 SK17, 376 SK17, 377 SK17, 378 SK17, 379 SK17, 380 SK17, 381 SK17, 382 SK17, 383 SK17, 384 SK17, 385 SK17, 386 SK17, 387 SK17, 388 SK17, 389 SK17, 390 SK17, 391 SK17, 392 SK17, 393 SK17, 394 SK17, 395 SK17, 396 SK17, 397 SK17, 398 SK17, 399 SK17, 400 SK17, 401 SK17, 402 SK17, 403 SK17, 404 SK17, 405 SK17, 406 SK17, 407 SK17, 408 SK17, 409 SK17, 410 SK17, 411 SK17, 412 SK17, 413 SK17, 414 SK17, 415 SK17, 416 SK17, 417 SK17, 418 SK17, 419 SK17, 420 SK17, 421 SK17, 422 SK17, 423 SK17, 424 SK17, 425 SK17, 426 SK17, 427 SK17, 428 SK17, 429 SK17, 430 SK17, 431 SK17, 432 SK17, 433 SK17, 434 SK17, 435 SK17, 436 SK17, 437 SK17, 438 SK17, 439 SK17, 440 SK17, 441 SK17, 442 SK17, 443 SK17, 444 SK17, 445 SK17, 446 SK17, 447 SK17, 448 SK17, 449 SK17, 450 SK17, 451 SK17, 452 SK17, 453 SK17, 454 SK17, 455 SK17, 456 SK17, 457 SK17, 458 SK17, 459 SK17, 460 SK17, 461 SK17, 462 SK17, 463 SK17, 464 SK17, 465 SK17, 466 SK17, 467 SK17, 468 SK17, 469 SK17, 470 SK17, 471 SK17, 472 SK17, 473 SK17, 474 SK17, 475 SK17, 476 SK17, 477 SK17, 478 SK17, 479 SK17, 480 SK17, 481 SK17, 482 SK17, 483 SK17, 484 SK17, 485 SK17, 486 SK17, 487 SK17, 488 SK17, 489 SK17, 490 SK17, 491 SK17, 492 SK17, 493 SK17, 494 SK17, 495 SK17)



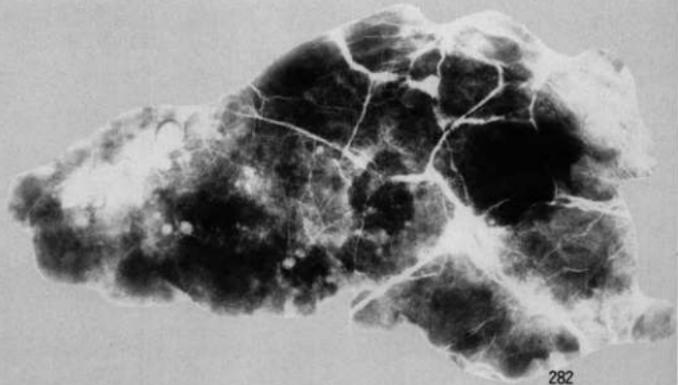
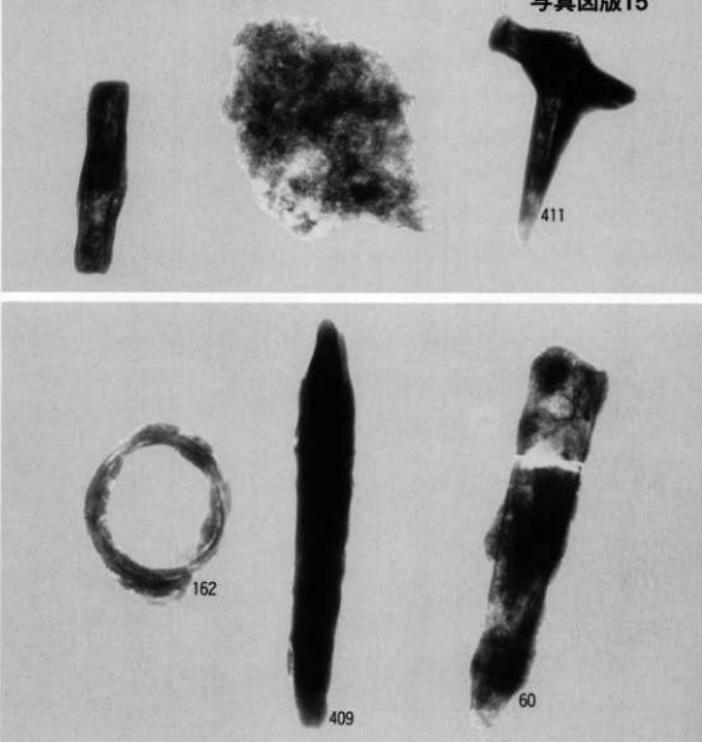
写真図版13 198・199・365(中央集石), 201・210・213・215・218・236・366・387(南側遺物集中区), 249・250・254・264・266・267・269・274・388・403(XY出土)

写真図版14



写真図版14

29(SB1), 48-434-425(SK1), 53(SD1), 60(SD16), 61(Ps4), 286(SK1), 292-419(SK1), 65(SK10), 293(SK33), 113(SK32), 185(SK110), 134-137-423(SK86), 37(P4), 142-146-147-150(SK90), 123(SK5), 161(SK8), 197(中央集石), 198-243-405-244-230-212-246-237-239-247-260-285-286-327(南側集中区), 275-281-406-248-282-284-287-415-417-421-409-431(XY8±1), 73(SK4), 272(SK9).

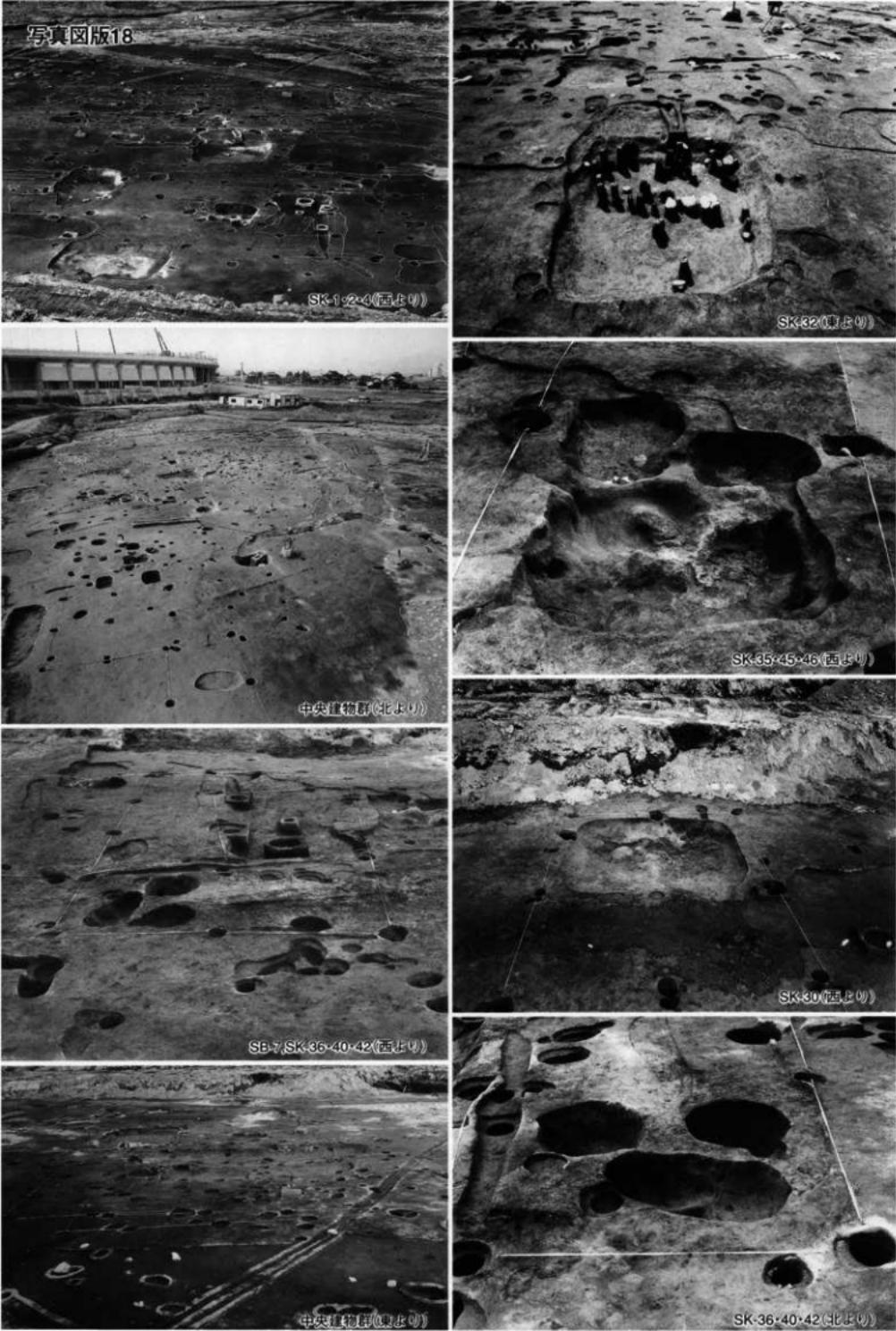


137





写真図版18







SB-10・20・22・26・29(東より)



遺跡南部分(西より)



SD-5(南西より)



SB-25(東より)



SB-11・20・22・26・29(西より)



SB-18・19・26他(西より)



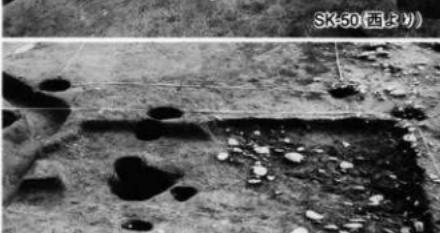
SB-27(西より)



SK-50(西より)



SB-27(北より)



SK-7(北より)



SB-15・16・17・38・SD-5(南より)



SB-15・16・38(東より)



穴住居群(南より)



SI-1-2他検出状況(西より)



SI-1-2他遺物出土状況(南東より)



SI-1-2他(西より)

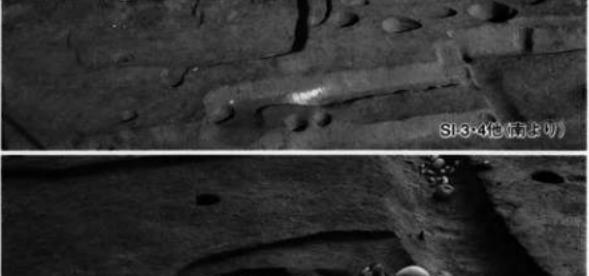
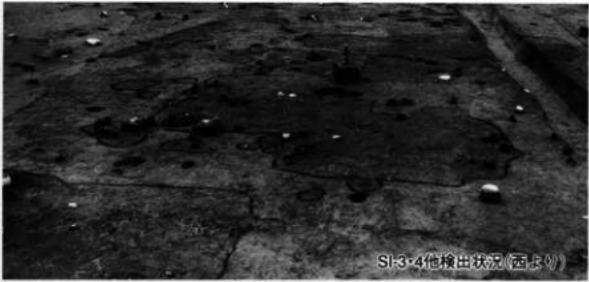
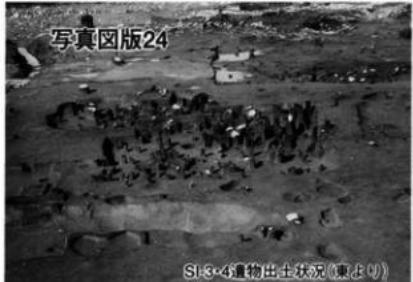


SI-1カマド(西より)



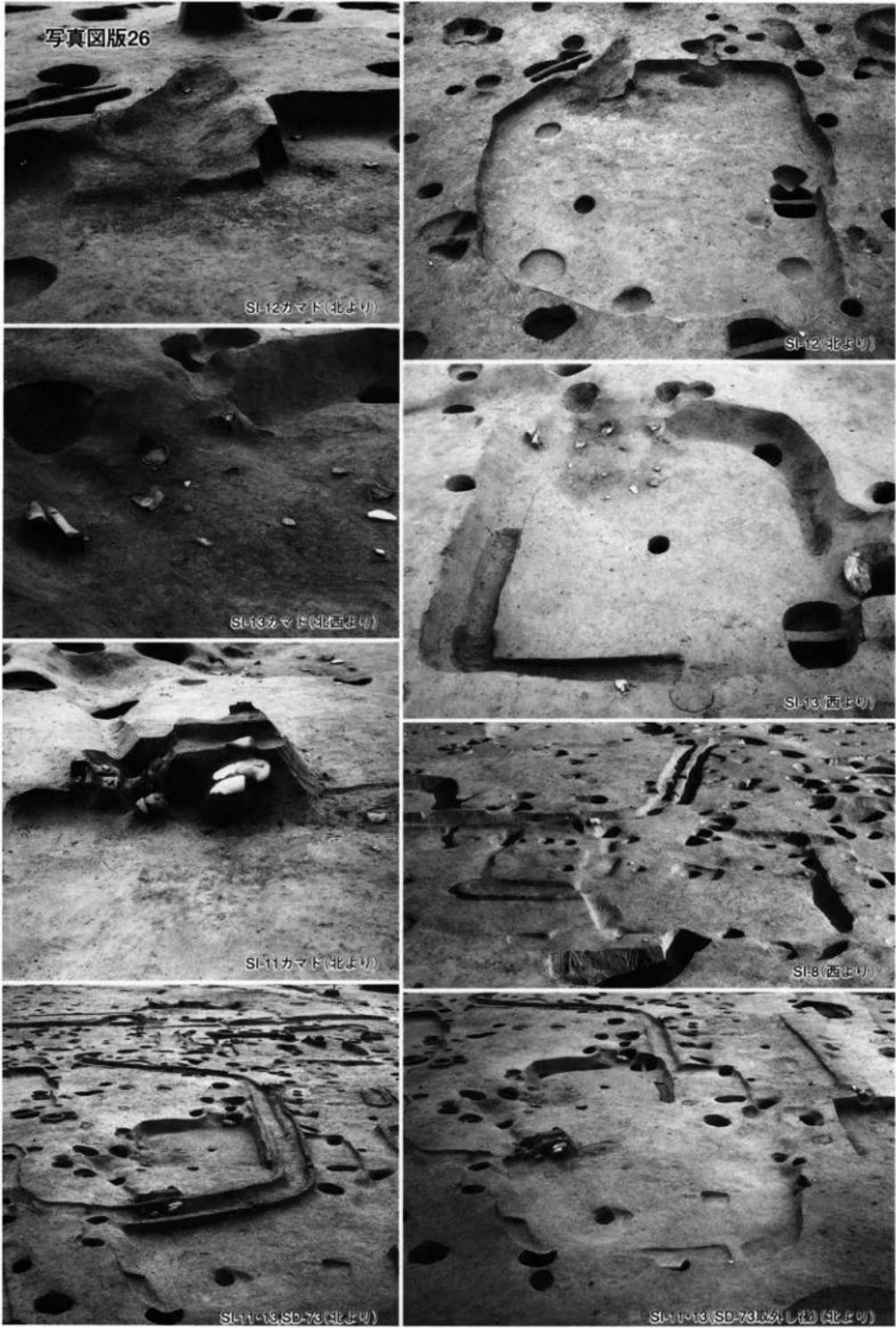
SI-1-2-6小池側方より

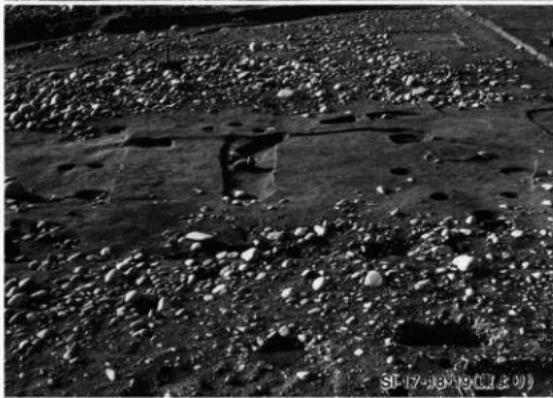
写真図版24

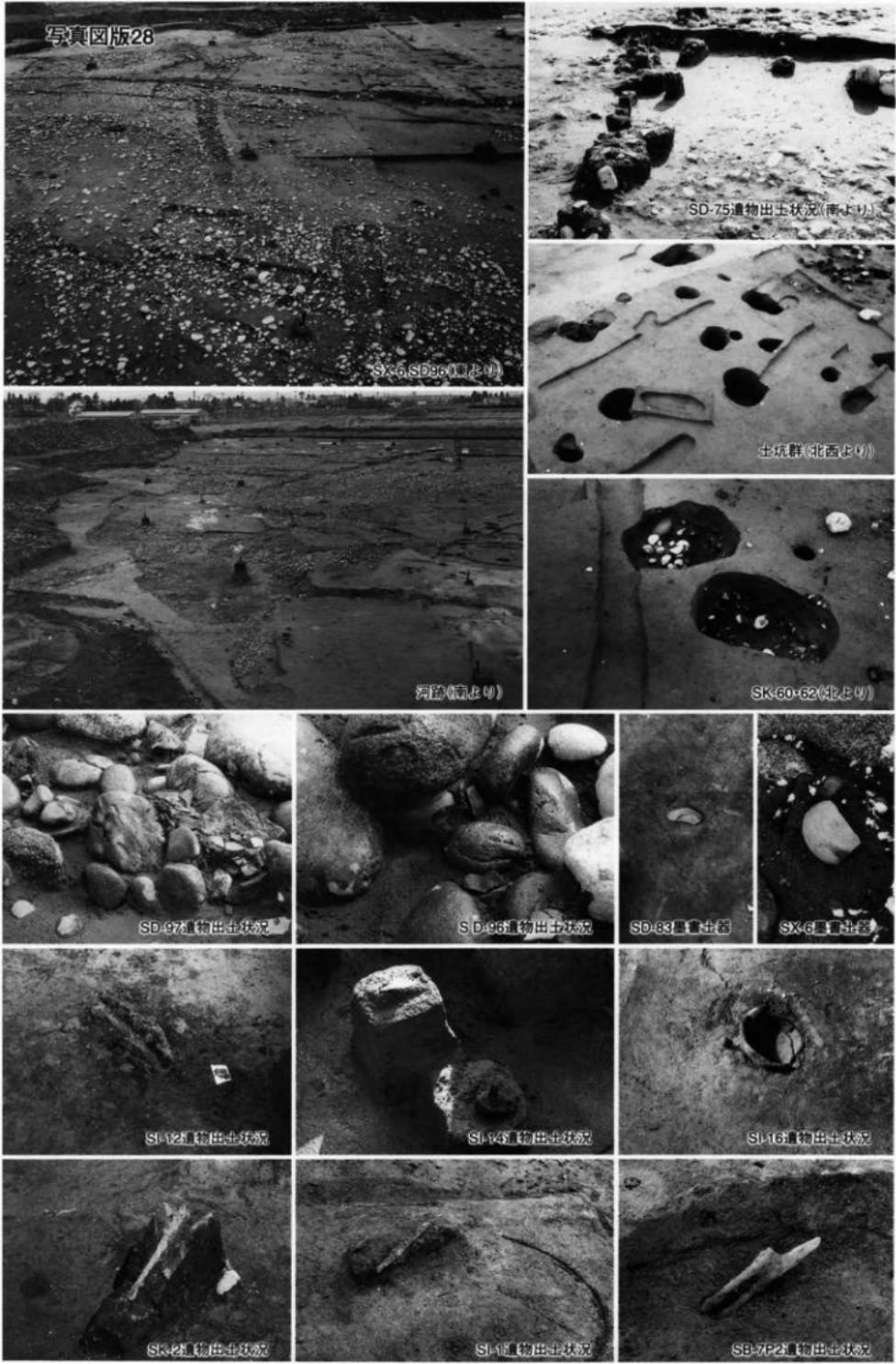


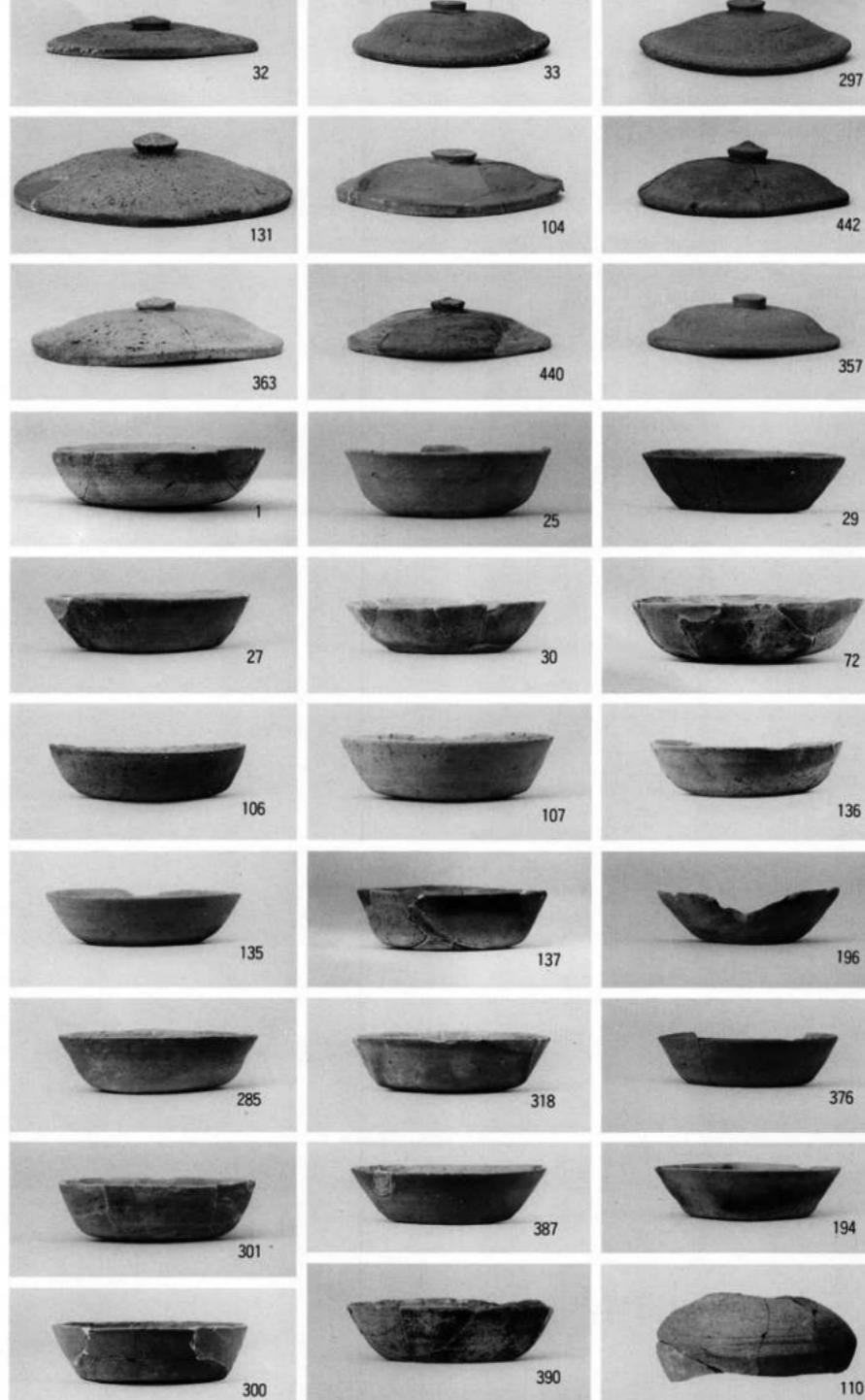


写真図版26

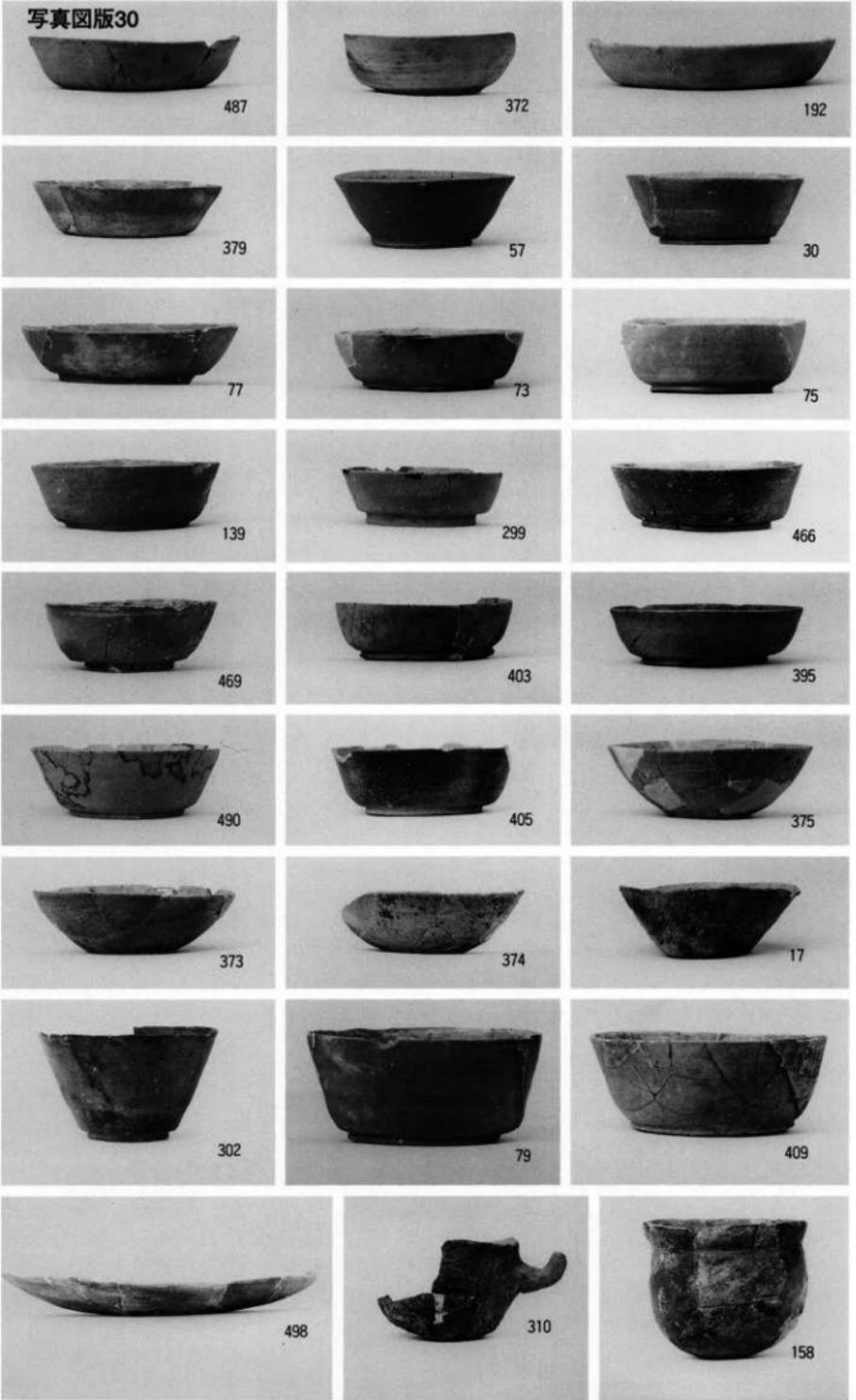








写真図版30





119



51



353



294



121

写真図版32



309



113



43



92



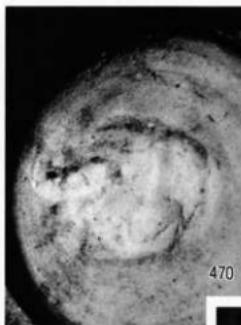
421



449



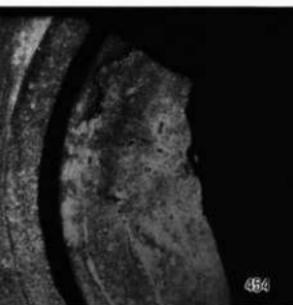
486



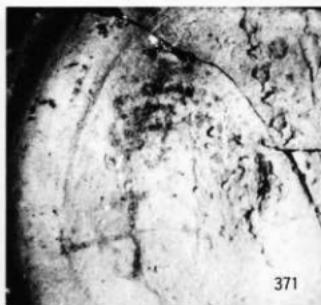
470



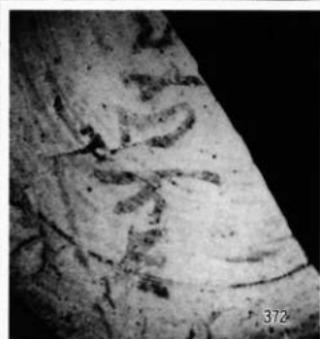
373



454



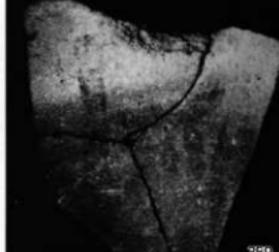
371



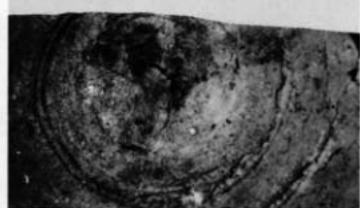
372



359



359



485



96



16



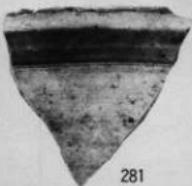
14



183



307



281



58



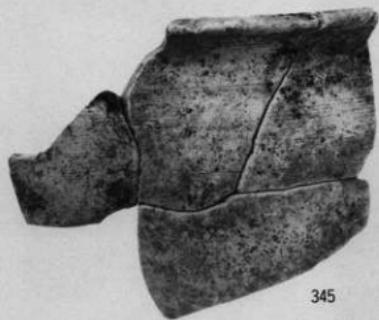
201



205



85

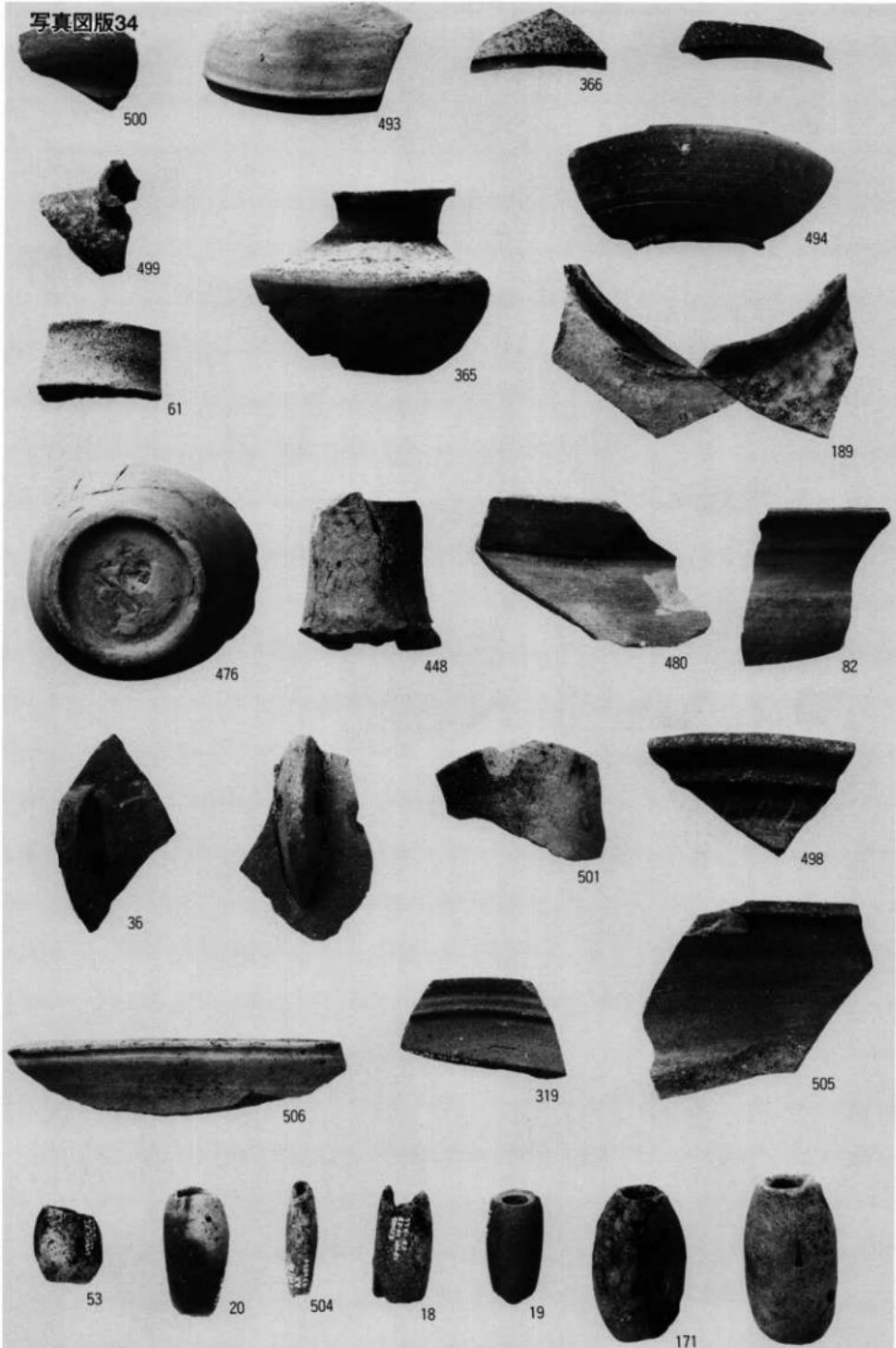


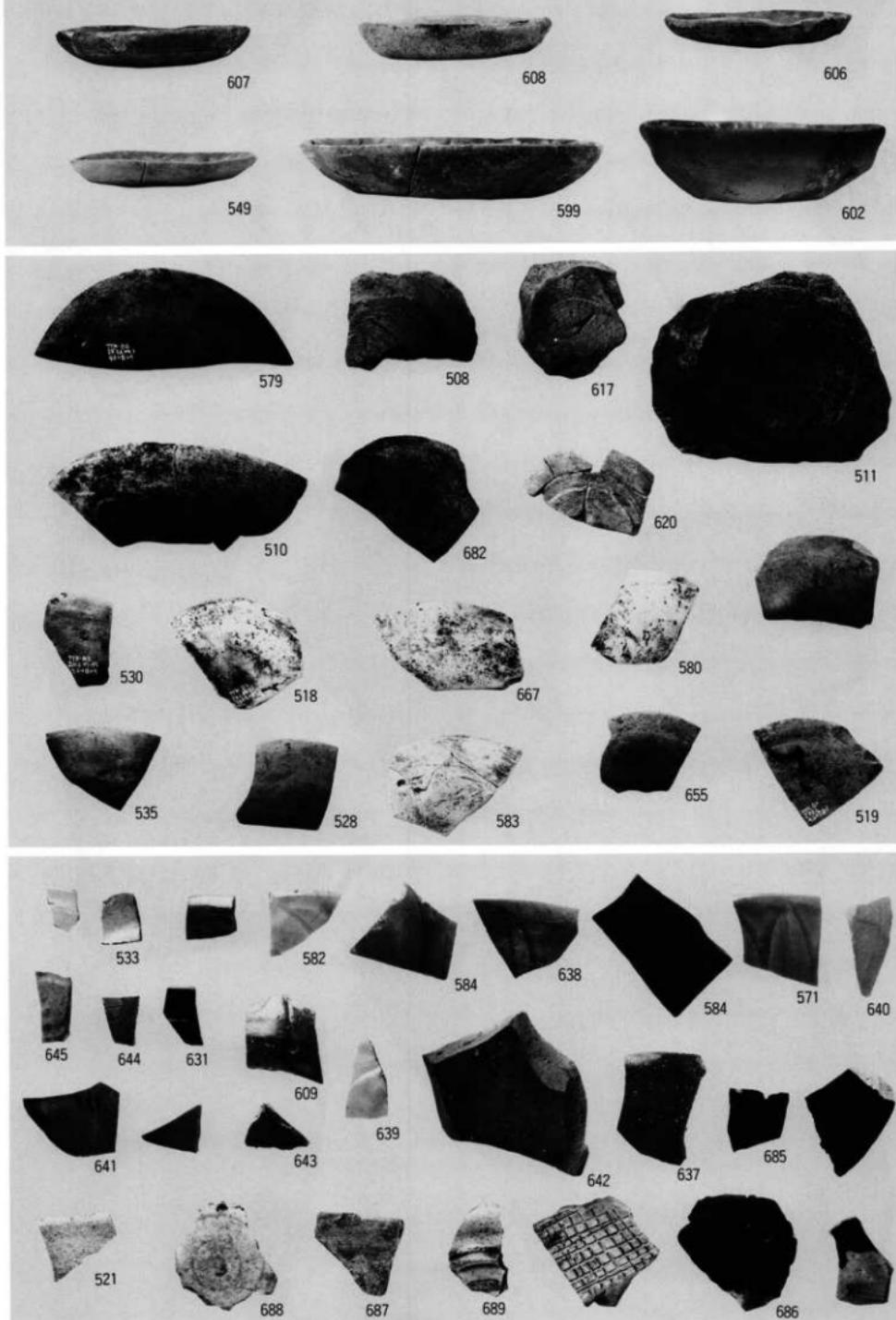
345



175

写真図版34





写真図版36

696

538

635



590



591



536



702



698



562



690



537



636





723



720



725



719



731



722



734



732



733



721



711



728



729



727



714

726



703



705



704



708



710



706



709



717



712



711



715



716



718



569



写真図版38



---

富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)

任海遺跡・吉倉 A 遺跡・吉倉 B 遺跡

平成 5 年 3 月発行

編集・発行

富山県埋蔵文化財センター

〒930-01 富山市茶屋町206番3号

TEL 0764-34-2814

印 刷 所 株 式 会 社 チ ュ ー エ ツ

---